
終末世界の創世記

言乃葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末世界の創世記

【Nコード】

N4537U

【作者名】

言乃葉

【あらすじ】

人気ネットゲーム『エバーエーアデ』そのプレイヤーたちが何の前触れもなく、ゲームの世界らしき世界に自らのキャラクターの姿を持って転移してしまう。

ゲームだったはずの世界が現実の感触を持っている事に戸惑うプレイヤーたち。混乱し暴走する彼らは、もう一つの現実になった世界で生き抜くことができるのか？

MMORPGもの、ではなく異世界転移サバイバルの傾向が強いお話になります。

1話 発端（前書き）

- ・残酷な描写、性転換要素があります。
- ・地雷要素が多数埋設されていると思われます。
- ・用法用量を守り、正しく読みましょう。

1話 発端

見捨てられた街に一人、たたずむ。

すでに仕込みは終わって準備は万端万全。後は向こうが現れるのを待つばかり。

狙い通り待ち伏せ位置は正しく、それほど待つまでもなく相手が現れた。

轟音をと瓦礫をまき散らし、かなり派手に無人の家屋をぶち破って巨体をこちらの眼前にさらしてくる。

相手の姿は一言で言うならトラだ。ただし両肩にムチのごとくなる触腕があつて、こちらを威嚇して剥き出す牙をはじめとして身体を構成するパーツ全てが巨大だ。その大きさはトラックほどはあるだろう。

そんな見るからに凶暴凶悪な巨獣に対する自分の武装はというと両手で構えているレバーアクションのショットガンが一挺に両太ももに提げた拳銃が二挺。この程度の火力でトラックほどもある獣をどうにか出来るのかと思ってしまうが、そこをどう料理するかが腕の見せ所でもある。軽く舌舐めずり。

まずは先制の一発。二〇メートルの距離を置いてショットガンを撃った。

この距離なら触腕の射程外、安全に相手を攻撃できる距離だ。それに今撃った弾種は一粒弾のスラッグ弾、散弾の様に威力が拡散することなく一発の弾丸として巨獣に飛んでいく。

もちろん一発で終わらせるつもりはない。初弾の銃声が止むのを待たず、すかさず用心鉄を兼ねるレバーを操作して排莖、装填、発射。そのサイクルを四度繰り返し、弾倉にある五発全てのスラッグ弾を三秒で撃ち放ち、銃声を連ねた。

だが、それでも相手は倒れない。その巨体に相応しく度外れた耐久力をもつ獣は、十二番ゲージのスラッグ弾を全て胸や腹といったバイタル的に重要な箇所を受けてなお怯まず、いや一層の怒りの炎を瞳に灯してこちらを睨み付けてくる。

獣はその四肢に一瞬だけ力を溜める仕草をし、その次の瞬間には自分に向かって突進してきた。

巨体からは想像も出来ないほどの爆発的瞬発力と速度。二〇メートルの距離はあっという間に詰められてこちらに再装填の時間を与えない。

ならば武装変更。弾切れになったショットガンに替えて、両方の太もものホルスターから両手に二挺の拳銃を持った。変更後すぐに獣の攻撃がくる。突進しながら振ってきた触腕が唸りをあげて襲いかかってくる。

慌てず騒がず対処する。触腕の攻撃速度は速いが動きそのものは単調で十分に見切ることができ、左右からうねるように襲い来る攻撃を難なくかわす。武装が拳銃になったことでショットガンよりも射程も威力も低くなるが、この距離なら十分に有効だ。怖いのは獣が前足で攻撃してくる範囲に入ってしまうこと。そこから多彩な攻撃を繰り出してくるのがこの獣の特徴になるからだ。とにかく今は牽制と挑発を兼ねて両手の銃を撃ち、一定の距離以上近寄せない方針でいく。

獣が触腕を振り回して間合いを詰めてくれば、こちらは二挺拳銃で目を眩ませて突き放す。追うものと追われるもので単純な追いかけっこの構図が出来はじめており、こちらの思惑通りになった事にほくそ笑む。

それからしばらくの時間が経過——できるだけ巨獣の体力を削ってみたが二挺拳銃の弾数も心許なくなってきた。

それにこれ以上削ると獣が逃げを打つ事になる心配が出てくる。
場所も良い感じで誘導できたし、仕掛ける頃合いだ。

拳銃でふさがっていた手に球体の何かが握られ、すぐさま地面に叩きつけられる。一瞬でその場が漂白されたように真っ白に染まる。目が許容することの出来ない光がその場に現れたのだ。

閃光弾。準備していたこちらと違い獣は至近に現れた光に目を潰され、辺り構わず触腕を振り回して暴れ出す。

被害は周囲の建物に及び、壁や窓がなぎ払われ小屋が崩壊し、近くにあった廃車が叩き切られる。

そんな獣の狂乱がこちらの自由時間だ。距離をとり、触腕の範囲外に逃れて予定していた場所に立つ。ここの準備をしたのは信用でき信頼すべきパートナーだ。安心してことに臨める。

ショットガンに弾を補充。三発ほどはさつきと同じスラグ弾。残り二発は小型の爆弾を発射するフラッグ弾。これでとどめにするつもりだ。

ショットガンの再装填が終わったところで獣の狂乱も終わった。視界の戻った目が確実にこちらを捉えている。

怒り度合いは最高潮だ。獣とこちらの距離は最初と同じ二〇メートル、その距離を獣は今度こそはと必殺の意思で駆け抜けてきた。工夫も何もない一直線の突進でこちらに到達するまでは二秒。

そしてその二秒が獣の最期の時間だった。

獣が脚を置いた地面が一瞬光り、爆ぜる。そして土砂が舞い上がり、遅れて爆音が轟いた。爆発に巻き込まれた獣も一緒にその巨体を空中に打ち上げている。

地雷呪紋——メイン・スベル地面に仕掛けられ、かかった獲物を局地的な噴火といえるほどの爆発に巻き込む悪辣なトラップは獣の残り体力全てを奪っていく。

短い空中浮遊の後で地面に叩き付けられた獣はすでに虫の息だった。

そこに容赦なく弾丸を撃ち込み、とどめとする。二発のフラッグ弾が着弾、爆発して肉を抉り、三発のスラッグ弾がダメ押しに頭を撃ち抜く。人間相手では明らかにオーバーキルになるけれど最後まで気は抜けない。

『ルナ・ルクスが大虎種・ウィップティーゲルを倒しました』

そのメッセージが流れたところで自分は一息つくことが出来た。

『経験値が規定値に達しました。ルナ・ルクスのレベルが上がりました』

この獣、ウィップティーゲルを倒せばそうなると分かっていたが、やはり実際にメッセージが入れば充実感と達成感で気分が良いものである。

さて、一区切りついたところでリアルでも一息入れるのでしょうか。

二〇インチの液晶モニターから目を離し、次いで握りしめたゲームパッドからも手を離して、頭のヘッドセットも取り外す。

ズンと、目の奥が重くなるような鈍い感覚に思いのほか長時間ゲームをプレイしていたんだな、と妙に感慨が深くなった。

モニター右下に表示されている時刻表示では今の時間は深夜二時、いつの間にか日をまたいでいたようだ。

OAチェアに座ったままグツと背中を伸ばせば「くうう」という声 that 口から出てくる。間接からもポキポキとコリを示す音を出して

疲れを訴える。

「よし、これで全大型魔獣のソロハント完了つと。長かったな」

十時間ぐらいいは見続けていた画面に再度目をやる。画面内では一個のゲームが起動しており、別ウィンドではそのゲームの攻略サイトが開かれている。

『エバーエーアデ』——十年前に発表されたネットゲームのタイトルであり、ネットを通じて多人数で楽しむRPG、いわゆるMMORPGと呼ばれるゲームがさつきまでプレイしていたものだ。

この手のジャンルのゲームは今現在でも生き残っている老舗のタイトルからファンに惜しまれつつもサービスを停止したもので様々なタイトルが発売されてきている。

その中でこの『エバー・エーアデ』は人気作品のランキングでも上位に食い込んでいる一つだ。この作品の特徴としては、ファンタジーゲームでよく基盤にされやすい『剣と魔法の世界』にマカロニウェスタン風の要素を混入したことにあるだろう。

自分の操作するキャラクター『ルナ・ルクス』の扱う武器がそうであるように、銃器も戦闘要素に組み込まれており、舞台とされている世界観もワイルド・ウェストの風味が強く意識された出来になっている。

そんな突飛な世界観だが、ゲームの造りそのものはオーソドックスで奇をてらわない。ただし、トコトンまで丁寧に作り込まれている。

ゲーム内で知り合った知人などは「制作者の真剣さが伝わってくる良作」と評して惚れ込んでいるようだ。自分もその意見にはおおむね賛成だし、おそらくは常連プレイヤーのほとんどがそう思っていることだと思う。おそらくはここが人気作となった要素の一つなんだろう。

そんなわけでβ版が出た十年間から自分もこのゲーム世界の虜だ、こんな風に時間を忘れてやり込むぐらいには。

トイレのために席を離れることはあっても食事は抜いてしまった。遅まきながらそのことに気付いたのは腹の虫がなってからだ。時間感覚を自覚した途端に胃袋が一気に抗議しだした。

「ぐ、むう……そういえば冷蔵庫の中身はまだ補充してなかったけ

あまりの空腹に痛みに近い感触が胃の辺りをシクシクと苛む。

三日前までアメリカ力で射撃トレーニングに参加していたため自宅の冷蔵庫を空にしており、日本に帰国してから今までの食事は基本外食で済ませていたことに思い至る。一人暮らして自炊もこなせるけれど食材がなくては話にならないし、調理する気力も今はない。

深夜二時となると、食事を摂る手段は限られる。外食を選ぶなら二十四時間営業のファミリーストランと牛丼屋の二つしかないけれど、自宅から距離があるため却下。手っ取り早く食べ物にありつくには徒歩三分の近場にあるコンビニが一番だろう。

「450円が一点、150円が一点、230円が一点。合計で830円になります」

「……」

「900円、お預かりします。お釣りの70円のお返しになります」

「……」
「ありがとうございました。またお越し下さいませ」

バイト店員のマニュアル接待台詞に送られてコンビニを出る。

手には買ったばかりの弁当と飲み物、サラダが入ったビニール袋。こんな深夜に食べる夜食が健康に良いわけがないのに摂取バランス

を気にする辺りが我ながら可笑しくなる。

「食べなきゃ食べないで体に悪いしな。なにより辛いし」

自己弁護をぼそつと口にしてみる。人前では口数が少なくなるくせに独り言はよく喋るのが自分だ。例外はネットゲームのボイスチャットの時ぐらいか。先程の店員もさぞかし愛想の悪い客思っただろうな。けれど今更変えようとも思わない。

「腹ごしらえしたら……そうだなもう一、二時間やってから寝るか」

そして目が醒めたら今度こそ食材の調達をしよう。そんなことをつらつらと考えて家に戻り、エネルギー補給。後は二時間ゲームをプレイしてベッドに潜り込んだ時には夜明けの光がうつすらと窓の外から差し込んできていた。

カタカタと風で揺れる窓が出す音が耳に入り、鼻を突くのは薄い機械油らしき臭いと火薬を燃やした硝煙の臭気。

それら聴覚と嗅覚に促されるように目を開けば、見慣れない場所の天井が視界一杯に広がっていた。

昔のアニメに出てくる有名すぎるフレーズを口にするべきか？

などと愚にもつかないことが寝起きの頭の中をかすめたが、現実としてはかなり深刻な事態だ。

目が覚めたら見知らぬ場所にいるなどとは、フィクションの世界ではよく用いられる状況だが現実には我が身に降りかかるとなると混乱と困惑が思考を歪め、それが恐怖を呼び起こし、なお一層の混乱に陥る負のスパイラルだ。

「すう……ふう、——状況の確認が先決か」

スパイラルを強引に打ち切るため、一度深呼吸。その後で自分に言い聞かせる独り言をつぶやいた。

口から出た声は聞きなれないもので自分の声とは思えないが、ここは無視。今は周辺の確認をしてこの場所が安全かどうかを調べ、その後で自分の身を調べれば良い。ゆっくりと確実に順番にだ。

ギクシャクと体を起こし、周囲の様子をうかがう。鉄骨の柱と梁、コンクリートの床と壁。空間は広く、天井が高い。学校の体育館ほどはあり、清潔ではあるのだが古びて錆びついている部分が目立っている。

印象からいえば廃業した町工場か廃校した学校の体育館といった風情か。そんな空間に流し場、コンロ、食器棚、テーブル、本棚、椅子といった生活用品が詰め込まれ、無理やり生活拠点にされている。自分が体を横たえているのも大きめなソファであり、ベッド代わりだと思われる。

「見覚えがある場所、だな」

そうだ、見慣れはしないが既視感はある。アウトドアの趣味はあっても廃墟探訪の趣味はないからこんな場所を訪れた経験はない。けれど見覚えはある。それもかなりの頻度でこの場所を見る機会がある。

現実ではない、主にモニターの向こう側でCG処理された光景に似たようなものがあった。いや、しかし——

「これは夢である事を願うべきなんだろうが、こうゆう時に限って現実だったりするんだよね」

「そうだな。主ルナの言い分には全面的に賛同する」

「っ……」

予期しない返答者の声に身がすくむ。同時に声のする方向に目を向けて見れば、そこにいるのは椅子の上にちょこんと座る黒猫が一匹いた。

黒ヒヨウをそのままダウンサイズしたようなスマートかつ筋肉質な黒い体、ゴールドの瞳。猫の品種でいえばボンベイだろうか。そんな黒猫がこちらを見つめている。

状況的にいって先ほどの声の主はこの黒猫なんだろう。それに自分の推測が正しければこの猫の名前も分かる。

少しのためらいはあるが、ここは思い切って声をかけてみた。

「もしかして、君はジンなのか？」

「もしかしなくともこの身の名はジンだ。主自ら名付けた名前だろうに……呆れる、と言いたいところだが主の置かれている状況は分かっている。混乱しかけているのだな？」

「……ああ、そんなところ。悪いんだけどしばらく考えを整理したい。一人にしてくれないかな」

「承知した。外で見張りにつくとする。何かあったら呼ぶし、何かあれば呼んでくれ」

一人になりたいと言うと、嫌がる様子もなくあっさりと外に出て行った黒猫ジン。ややシニカルな印象を受けたが、声が低く渋めな男声であるせいか気にならない。

むむう、艶がある声ってああいうものなんだろうな。あんな声をしているとは思ってもみなかった。

そしてそんな黒猫が自分の使い魔 ファミリア かもしれない事に何とも言えない複雑な気分になってくる。

使い魔 ファミリア ——ゲーム『エバーエーアデ』のシステム

の一つになる。魔術師系統に属するスキルを幾つか修めることで習得できる『クリエイト・ファミリア』というスキルで作成できるお助けキャラクターを指すものだ。

その形態、用法は主　マスター　になるプレイヤーによって異なるが、ある一定以上のレベルに達していないと作成できないため高レベルプレイヤーとしてのステータスシンボルという意味合いも使い魔にはあった。

これがゲーム『エバーエアーデ』での知識になる。

その知識通りに黒猫は自分のことを主と呼ぶし、作成の際に名前を『刃』の音読みから取って『ジン』とした記憶もある。

この場所も自分のキャラである『ルナ・ルクス』が拠点としている廃工場にきわめて酷似した場所だ。けれど、それはどこまでいつでもモニターの向こう側、ゲームの中での出来事に過ぎないはずだ。

技術の進歩はいまだ目覚ましく、それがゲームに反映されることはあってもヴァーチャルリアルなどというものはまだまだ夢の技術のほず。

話は変わるが、自分のインドアの趣味に読書があり、ネット小説も守備範囲に入っている。それら作品群の中でネットゲームをしているプレイヤーの主人公がやおらゲームの世界に入ってしまうというのがあった。つまり、自分が置かれている状況というのもそうなのだろうか？

「信じがたいな。それに、現実を起こってしまうとなると馬鹿馬鹿しい気分になってくる。……と、するとこの体もルナのものか」

ひとまずは周囲に人はいないし、脅威になるものも見当たらない。ジンが外を見張りをしてくれると言言葉を感じるなら、しばらくここは安全な場所だろう。なら次は自分自身を確認だ。

寢床になっていたソファから毛布をはねのけて立ちあがり、今の自分の体を見下ろす。

寝巻きにしているらしい黒い上下のスウェットに包まれた体は慣れた男性のものではなく、小柄な少女と違っていい女性の身体だ。目覚めた当初から視界に入っても無視してきたが、改めて正面から確認するとなれば神経を使ってしまう。都合の良いこと手近に姿見があるので、鏡を使って今の自身を確認することしよう。

「ふうん……これがリアルルの感触で見るルナか」

顔は卵型の小作りなものをボブカットの黒い髪が縁取り、大きな瞳はジンとお揃いのゴールド。体も小柄で細身。身長割に腰の位置が高いらしく、脚が長い。

目つきが鋭く悪い印象を受けるが、全体としてはちょっとその辺では見ないぐらいの美少女だ。そんな少女が鏡の中でこちらの感情どおりに困惑七割、好奇心三割の表情をしてこちらの動きそのままの動作をしている。

さつきから耳に聞こえる声も元の男声ではなく、ハスキーがかった若い女声。

気が狂っていないければ、今の自分はゲーム内での自キャラ『ルナルクス』ということになる。

モニターで見ていたときはCG処理されたパターン化した没個性な顔でしかなかった。けれど今日の前に見える彼女は、元の自分の顔の特徴も入っているせいかきちんと個性が感じられる。

「いつそ本当に気が狂っていて現実には黄色い救急車で病院に搬送中、だったなら良かったのかな」

だが、今この体の五感で感じる感触は間違いのないリアルだ。両手を見てみる。元の成人男性としての大きくゴツイ手ではない。

ほっそりとした指の長い纖手。これが今の自分の手。

「事態を飲み込むには時間がかかるか。そして待っていても元に戻る保証はなし。動くしかないのか？」

自身の体から取り巻く世界そのものまで変容しているだろう特大の異常事態。何をするにしても一つ一つ確認を必要とする。

このまま事態を放置したまま待っていれば元に戻る、という可能性は未知数。けれど、自分の勘が告げるにはないと思われる。ならば自分からアクションを起こしていくしかない。

これがゲームであろうが、リアルであろうが関係ない。好ましくない停滞は打破していくのが自分の流儀だ。

動くと決めたならば即実行。まずは、寝巻きから着替えるところからだ。

最初に頭に活を入れる意味で顔を洗おうと流し場に足を向け、水を出す機構を確認した。

現代生活に慣れ親しんでいると蛇口をひねれば水が出るというのが当たり前になっているが、ここでは違っていた。

「ポンプ式の井戸……釣瓶式よりはましか」

古い民家とかなら今でも見かけることがある水圧を利用した金属製の手動ポンプが流し場に鎮座していた。

頻繁に使われているようで、ハンドルを動かすと問題なく水が流れ出て流し台に置かれた洗面器に水を満たしていく。

洗面器に手を入れると井戸水らしい冷たさが手を伝わって全身に広がる。身がかがめて顔に水をかけていけば痛みにも似た冷たさが

顔全面を刺激していく。手で掬った水を一口飲んでみると、冷たい感触と一緒に井戸水ならではの清涼感が口の中で広がった。

これらの感覚が、コレがどうしようもないほどに現実なの言い聞かされているような気分になさてくれる。

「視覚、聴覚はもちろん、嗅覚、味覚、触覚といった全感覚を再現って、今の技術じゃ不可能だろう」

運営側がいきなりヴァーチャルリアルを導入しました、という線はない。現行の電子技術総動員してもこの事態を再現するのは難しいだろうし、するメリットも薄い。何より、直前の記憶ではロゲオフして寝ていたはずだ。自分は一般人、とは厳密には言い難いが普通の市民を捕まえてこのような事態に放り込んだところで運営会社に意味はないだろう。

「会社の陰謀説はなし。となると宇宙人が、オカルトに走った開発者か、ああセカイ系というのもあるか。自分はごめんだがな」

原因を考える思考を手慰みに、スウェットを脱いで下着姿に。ブラもショーツも黒で統一されている。

この下着はフリルやレースといった飾り気は全くなく、ユニクロとかで見かける女性用下着のように機能一点張りだ。

見つけたタオルで水をしぼり体を拭いていき、寝汗をぬぐう。井戸の水でひんやりとしたタオルの感触が肌に心地よい。

目の前にある女性の体に男性としての欲情や劣情はない。第一自分の体だ、戸惑うことはあっても変な気分になつたりはしない。第二に自分は官能小説かエロゲ、エロマンガじゃないと又けない性分だ。例えば元の状態で裸の女性の前にいても勃たないだろう。

そのお陰で年齢〓彼女いない歴〓童貞歴が三十年を超えてしまっ

た。これについては恥とも不名誉とも思っていない辺り業が深い。

「まさか『魔法使い』になった事でこの世界に来てしまった……だったら笑うね、盛大に」

気付かない内に色々と精神の限界なのかもしれない。きわめて馬鹿らしい考えが頭に浮かぶ。そんな都市伝説に原因を求めても詮のない話だろうに。

ソファー近くにあるハンガーラックに見覚えのある服を見つけ、着替える事にした。

教会のシスターが着るような黒いワンピース。しかし丈は短くて膝上十センチほどの長さしかない。

そんなワンピースの上に茶色の革ジャケットを着る。次いでラックにかけてある黒いニーソックスを履き、そばに置いてあったこれまた黒い編上げのブーツを履く。

これではゲームの中で『ルナ・ルクス』というキャラクターが戦闘時に着ている服装になった。

見慣れているはずだ。今の装備を手に入れてからはこの服装が定番なのだから。

一見軽装に見える状態だが、いずれも高い耐久性と防御力を誇り、入手するには高レベルのプレイヤーでも一苦労する逸品……というのがゲームでの話で、現実に着てみた感触は普通の衣類と変わりがない。ボディーアーマーのように重かったり、耐火服のようにゴワつくわけでもない。ゲームのような防御力があるかどうかは不明な以上は過信しないことにしよう。

それにパンツルックが当たり前だった身の上としては腰回りが寂しく感じられ、頼りなく感じてしまう。なるほど、これも男女の性差というものか。

ほぼゲームでの装備を再現したわけだが、足りない装備がある。

RPGの世界を再現しているという事はバトル、つまり敵との戦闘を想定した装備『武器』がなければならない。

ここが『エバーエーアデ』の世界そのままなら、外の世界には魔獣や無法者といった脅威がゴロゴロしていることになる。自衛の手段は用意して然るべきだ。

『ルナ・ルクス』のメインとなる武器は銃器になるわけだが、この広い部屋の中でそれらしき物が見当たらない。標的用のマンシルエイトなら見つかったが、弾も銃器も見当たらない。

「見つかったのはサブアームに使っているナイフが数本、か」

少し家探ししてみte見つかったナイフを手独り言を漏らす。

ナイフは大小の二本に刃のない投擲用が六本とゲームでの装備そのままだ。ゲームと違うところは、ナイフを研ぐための砥石とオイルがセットで見つかったところだ。それだったらメインの銃器があつても不思議ではないのだが、やはり違ふのだろうか。

もう少しちゃんと調べてみようかと考える、前に人に聞くという手段を思いついた。

そう、言葉を喋る黒猫ジンに聞いてみるというのはどうだろうか？ 彼だつて「何かあれば呼んでくれ」と言っていたし、ここで声をかけても問題ない気がする。

だけど、この広い場所で外にいるだろうジンに呼びかけるには声が大きくなる。大声は記憶にある限りここ十年は出してない。それより探し出して声をかける方がいいか。

ジンへの声のかけ方で迷っていたら向こうの方から声がかつてきた。しかも予想外の方法で。

『何か用があるようだな主。それほどに切羽詰まつた事が起こつた

のか』

「うわっ！」

頭の中に例の渋い声が響く。余りにも唐突に声が聞こえたため、手に持ったナイフを落としてしまった。

さつくりと木製のテーブルに突き刺さる様子を見て、足に刺さらなくて良かったと頭の片隅で思う。冷汗を感じながらも、今重要なのはジンのこの声だ。

「ジン、この声って何？ 頭の中に響くようなんだけど」

『む、念会話 テレパス も忘れているとは……たしかに無理からぬ状態か。ならば頭の中で会話したい相手を思い描き、声を出す感覚で頭の中で話してみるといい』

言われて早速実行してみる。もともと独り言体質だし、この体が感覚を覚えているというのもあるのだろう。ほどなく感じが掴める。

『これで、いいのかな？ 問題ない？』

『ああ、聞こえる。この程度の距離なら肉声でも十分聞こえるが、この方がよいだろうな』

肉声で聞こえる訳ではないせいか若干ざらついた音質だが、聞き取りに問題はない。

思ったのだが、この念会話というものはゲームのチャットシステムがリアルに変化したものだと考えられる。

ゲーム『エバーエーアド』ではこのシステムで遠く離れた相手とも会話が出来るようになっており、またプレイヤー同士の意思疎通のツールとして日常的に使われているものだった。ヘッドセットのマイクで話しかけていたものがこういう形をとるとは、思いもしなかった。

このことで知り合いのプレイヤーに呼びかけてみる、という事を思いつくがその前に当初の案件から片付けよう。

『よく用があるって分かったね』

『この身は主の使い魔だ。離れていてもある程度は感情が伝わってくる。特にこちらに用がある時などはすぐに分かるようになっていく』

『そ、そうなんだ。ええっと、それで用なんだけど。私がメインで使っている武装はどこにいったか知らないかな』

『そこもか。ソファアの下にバッグが幾つかあるだろう。その中にあるウェストバッグの中身が主の武装だ』

気になる会話内容があったが、言われてすぐにソファアの下を検めることにした。革製の頑丈そうなバッグが大小いくつもあり、どれもゲームで見覚えがあるものだ。
ゲームの設定がここでも適用されるならこの中身に自分のほとんどの財産が詰まっていることになる。

『あ、そうか。そういえばそうだったね。ありがとう』

『礼にはおよばないさ。それより、こちらでも変化があった。身支度を済ませたら外に来てほしい』

『何かあった？』

『急ぎではないのだが、我々の身に危険が及ぶかもしれない事態だ。詳しい事は見た方が早いだろう。待っている』

『分かった』

念会話を終了してバッグを取り出す。どうも事態の変化はこちらの理解と納得を待ってくれそうにない。

喚くのも泣くのも後回し、今は直面する事態に対応していくのが正解なんだろう。

ジンに言われたバッグを取り出す。腰に巻くタイプで、この位の大きさなら背中側で保持するものだ。

これも見覚えがある。いつも戦闘時にルナが腰に巻いているウェストバッグだ。

ジッパーを開き、中身を覗けば小さくミニチュア化した品々が見える。その中から目当ての品を指でつまみ、取り出してみる。

するとバッグの口付近で急速に巨大化していき、見た目には騙し絵のような様子が展開されて元の大きさになっていく。指で摘まんでいた品物は両手で保持するべき兵器へと変化したのだ。

このバッグ、取り立てて特別な名称はないがその機能は秀逸の一言に尽きるものだ。

バッグの口に入る物品ならどのような大きさのものでもしまい込むことができ、質量保存の法則に喧嘩を売るがごとくバッグの重量に変化はない。既定の質量内ならどんな形状でも何個でも入るようになっており、当然許容量が大きいものなら値が張るようになっていく。

プレイヤーならば一個は必ずもっており、他のゲームで言うところの『インベントリ』という扱いをしている。

ベテランなら数個のバッグを持ち、用途によって使い分けをしているのが普通になる。ルナとしての自分も幾つかのバッグを持ち、武器用、採取用、保存用などと使い分けしている。今自分が取り出したものは武器用。メインに使っている武器弾薬をこの中に詰め込んだものになる。

ゲームでの設定がそのままに現実として目の前に現れたというのに驚きが薄いのは、もうすでに感覚が麻痺しだしているからかもしれない。

そして、両手にもった武器を改めて見る。ルナがメインで使って

いる武器の一つ、ライフル銃だ。

昨今のポリマーやらグラスファイバーで構成された銃器とは正反對の鉄と木で作られた古めかしいスタイル。米軍が昔使っていた『スプリングフィールドM14』がモデルになっている。と言うかそのものだ。

『スプリングフィールド・タイプ14』がこれのゲーム中での名称になる。

本体部分の上にスコープがマウントされており、下には本体安定のための二脚が折りたたまれてくっ付いている。ゲームでは遠距離用に使っていた『ルナ』の、そしてこれからは自分の得物となるだろう銃器だ。

日本人の大半は銃器に馴染みが薄いが、自分は違う。これまでの経験を換算すると十数年は銃器に触れてきている。このモデルになったM14もつい最近扱ったことがある。

だから不思議に感じる。妙に軽いのだ。弾倉を取り外し、薬室の中身を確認して弾がないことは確認した。けれど弾のあるなしだけでは説明のつかない軽さを感じている。

オリジナルのM14の重量は五キロ強、スコープと二脚付ならば尚更重くなり、今の華奢に見える体では持ち続けるだけでも大変なのに。

オモチャみたいなものと疑えば、そうではない。ほのかに香るガンオイルの匂い、ボルトを動かすと聞こえる金属音、この質感はオモチャで出せるようなものではない。

「体……もしかしてこの体だからか？」

ふと、思い至る。

高レベルキャラクターの『ルナ』は当然としてステータス値が高いものになる。自分としては筋力をそれほど重視せず、敏捷に重点

を置いた育て方をしていたのだが、それでも筋力の値は中々のものになっていった。そのゲームでこの体に反映されているとなると、華奢な外見を裏切るとんでもない腕力の持ち主という結論が出てしまう。

リングくらいなら軽く握りつぶせるかもな、などと今の状態に恐ろしささえ覚えつつ次の得物を取り出す。

取り出したのは二挺の拳銃。

これまた古めかしいもので、特徴的な細い木製のグリップとトリガーの前に着脱できる弾倉が配置されているシルエット。モーゼル拳銃が元になっているのは少し銃器に詳しい人間だったら誰でも分かる。

ゲーム内の名称だつて『モーゼル・タイプ712』とされ、隠す気はないようだ。

ゲーム『エバーエアーデ』に出てくる銃器は全体的に古いタイプが主体だ。グロック拳銃やAUGライフルのような新素材を使った銃器は一切出てこない。参考年代も一番下ったところでベトナム戦争時代ぐらいだろうか。ただし、米軍が使うM16のような小口径高速弾を使う小銃が出てこない辺り、制作者の偏った趣味などが感じられてしまう。

二挺のモーゼルを構えてみる。

プロの観点からすると二挺拳銃というものは論外だ。両手保持が原則の拳銃を片手ずつ二挺持つなど命中性が著しく落ちるだけ、弾をばら撒くにしてもサブマシンガンを持てばいいわけで意味合いはない。一度射撃場で挑戦してみた事があるが、二挺それぞれに意識がいかないし、弾数も数えられないし、当たらないと悪いことづくめ。

インストラクターの人からは「そういう事はジョン・ウー映画の

中だけにしておけ」と呆れられた覚えがある。

それが今はどうだ？ 明瞭に意識が二挺のモデルに行き渡り、二挺の銃口がどこを向いているか理解できる。左右の銃がそれぞれ別の生き物のように動く。まるで手の延長というより、標的を狙う二機の機械みたいだ。こんな感覚は今まで経験したことがない。

「『二挺拳銃』のスキルか、これ」

RPGのプレイヤーキャラが修めていき、戦闘時や非戦闘時などの場面で発揮される技術全般がスキルになる。

大半のRPGで導入されており、『エバーエーアデ』もその例に漏れないシステムだ。スキルは大別して修めているだけで発揮されるパッシブと、ポイントを消費して発揮されるアクティブの二種類があり、『二挺拳銃』のスキルは前者パッシブに属する。

その内容はゲーム内ではハンドガンに種別される武器を両手に装備出来るようになる、というもので近距離での火力を上げたかったり見た目のカッコよさを重視したいガンプレイヤーはこのスキル習得を目指すことが多い。

自分もその一人だった。二挺拳銃なんて現実では非合理極まりないことをよく知っているだけに憧れがあり、それこそジョン・ウー映画よろしくなアクションを『ルナ』にさせたくて習得したスキルだった。

「それが、現実でもこうなるとは……いや、これが本当に現実のものかまだ疑いの余地は残した方がいいな」

本当に『ルナ』が修めたスキルが使えるとなると、『魔法』すら使えてしまう事になる。ますます現実とゲームの境界があいまいになっていく感触が濃くなった。

試しにゲームでやるようにメニュー画面を呼び出すというのをやってみる。ゲームパッドのボタンを押すイメージで念じてみる。

——反応なし。

このような事態に陥る話を題材とする小説などでは普通にメニュー画面が視界に現れるものだが、自分の場合は違ったようだ。やり方が悪いのか、そもそもこれが現実だからなのかは分からない。

「……あ、と。いつまでもジンを待たせるのは良くないな」

ところ構わず思索にふけるのは悪い癖だ。昔からこのことで人から怒られてきた覚えがある。今度もまたジンに叱られるのは願ひ下げだ。

「どうにも、自覚なしに混乱しているという事か」

軽く自嘲し、遅れた分を取り戻すように素早く装備を整える。ウェストバッグを腰に巻き、中から拳銃のレッグホルスターを取り出して両方の太ももに装着、弾の込められた弾倉も取り出してモゼルとライフルにそれぞれ装填、ボルトは引かず薬室にはまだ入れない。二挺のモゼルをホルスターに差し入れ、予備の弾倉はバッグのベルト部分にマガジン入れを取り付けて収納、サブアームのナイフも鞘に入れてベルトに装着する。指抜きの革手袋をはめ、ライフルを革スリングで肩に担げば準備完了になる。

姿見で不備はないか最後の確認。鏡に映った自分の姿は『ルナ』の戦闘場面で見かけるものだ。

モニター越しかったものが今確かに血肉をもって目の前にあると

というのは、ゲームファンとしては嬉しく、リアリスタな部分の自分としては笑止千万な事態で、夢見がちな部分ではこれが全て夢だったらと妄言をつぶやく。

全部ひっくるめて複雑な気分だ。鏡に映るルナの顔も笑い泣きみたいな複雑な表情をしている。ああ、今の自分も笑いたいのか泣きたいのか分からないよ。

表現不可能な気持ちを抱えたまま、出口に向かう。きっとこんな混乱なんかこれからも増えていくと思いながら。

外に出てみて一番に感じた事は日差しが強いということだ。

建物の中では感じることのなかった灼熱感が扉を潜ると一気に襲いかかって来て、思わず腕で顔を庇う。

太陽は高く上っており、朝方からだいぶ時間が経っていることを示している。空には雲ひとつなく、見渡す限りの青空が広がっていた。

空気は乾燥し、大地もまた乾燥している。渴き切った土の臭いが風にのって通り過ぎていき、目を下に向ければ一面の荒野が広がっていた。いや、ここまでくると砂漠と表現した方が適切だろう。けどこれは日本人の殆どがイメージするような鳥取砂丘のような砂砂漠ではなく、岩と砂礫、少々の下草が生える礫砂漠だ。

ゲーム『エバーエーアド』の舞台となる『ハイマート大陸』のモデルは北米大陸そのものだ。北はアラスカ、南はメキシコ国境まで、東はニューファンドランド島、西はアリューシャン列島まで、ハワイやグリーンランドは存在しない。その上南米大陸がない分、大陸全体が緯度の低い位置にあってフロリダ半島に当たる部分が赤道近くに位置するという地理になっている。

『ルナ』の拠点があるのは『ジアトー』と呼ばれる大きな街の町はずれにあり、そこにあった廃工場を買い取って住めるようにリフォームしたものだ。

その『ジアトー』という街は、アメリカ大陸に当てはめるとシアトルに位置する。ただし、先にいったように緯度が下がっているため、気候としてはカルフォニアぐらいに乾燥し、暑い土地になっている。そういう設定がゲーム内ではなされていた。

そんな設定を現実に証明するかのように太陽はぎらついている。ゲーム世界が現実になったのだと脳内の一部でささやき声がするが、何もかもを鵜呑みにするにはまだ早い。

ともあれ、湿度が高くないのが救いだ。カラツと乾いた空気と吹き抜ける風は体感温度を下げてくれる。今着ている余裕ある長袖のワンピースはこの気候では間違った選択ではないだろう。直射日光で肌が焼けるのを防ぎ、ジャケットの前を開けるとそれなりに風通しがよい。色が熱を吸収しやすい黒である事を除けば悪くない服装だ。

振り返り、今出てきた建物を見やる。学校の体育館ほどはある廃工場が前身で、今は『ルナ』の住処だ。リフォームの手は内部が主で、外側には最低限の措置しかされていない。だから事情を知らない人からすればここは廃工場のオブジェクトにしか見えない。人気を避ける癖がある自分に見るとかなりの優良物件だった。

『ジン、待たせてゴメン。身支度を済ませてきたんだけど、どこにいる？』

『街側の方にいる。来てほしい。どうにもきな臭い事態だ』

念会話でジンとやり取りを交わすが、遅れたことを咎めることなく来て欲しいと言う。ここまで言うとなれば余程の事か。

この住処は小高い丘の上であり街全体を臨むことができる。それがこの物件の売りでもあった。街とのアクセスが悪くなるのを承知の上なら住みよい場所だ。

建物の裏手に回り、街を臨める場所に行くとジンが呼んだ理由がすぐに理解できた。

いや、これはないだろう。本当、勘弁してほしい。

「これは……戦闘が起こっているのか？」

「だろうな。見ての通りだ。念のため身は伏せた方がいいだろう」

「あ、ああ……そうだな」

昔取ったなんとやらで匍匐体勢をとってジンのいる茂みに這い進む。

ジアトーの街の状況は一目で分かるものだった。一言ずばりで『戦闘状況』だ。

モデル元になったシアトルよりはるかに小規模な都市となっているジアトーだったが、レンガや石造りの建物が立ち並ぶ海沿いの風光明媚な街並みはモニターを通してでも目を楽しませる美しさがあったものだった。

だった……今では過去形だ。砲弾か爆発物のせいかこの場所から見える限りでも数えきれない建物が損壊している。

壁に大穴が開くのは序の口、屋根がなくなっているもの、五階建てが四階建てになっていたりというのもチラホラ。完全に倒壊して瓦礫の山になっているのだってザラだ。

市街地のあちこちからは銃声が聞こえ、時折大きな爆発音がこの距離まで響いてくる。そして爆音に交じって人の悲鳴が街のあちこちから上がり、逃げ惑う人影がここからも見えた。

「こんな大きな戦闘音、中にいる時には気付かなかった」

「無理ない話だ。街から聞こえる騒音を嫌った主ルナが建物全体に防音措置を施したのだから」

「普通に暮らす分にはそれが正解だろうけど、今はまずいよ。その措置ってどうにか出来るものか？」

「無論だ。主ルナが張った結界だからな。主が解除すればいい」
「結界って。やはり『魔法』はあるのか」

こんな会話でも当たり前に非日常の単語が出てくる。

精神的頭痛をこらえ、街の状況を詳しく見ることにする。伏せた体勢のままライフルを構えて二脚を展開、スコープのキャップを取って伏射姿勢をとった。薬室に弾はまだ入れない。

スコープの向こう側、レティクルが捉える光景は街を俯瞰した時よりも酷く、凄惨なものだった。

「……気持ち悪い」

「あまり見続けるものではない。程々で切り上げた方がよいぞ」

ジンが気遣うような声音で言葉をかけてくれたが、見えるものを前にすれば耳を素通りしてしまう。

通りに面した商店で大規模な略奪。様々な装備に身を固めた一団が店から品物を奪っていき、追いつがる数人の店員を銃で撃ち殺したり、戦斧で叩き切ったり、魔法らしき物で燃やし殺したりと人数分のバリエーションで殺害している。

さらに店にも魔法と考える火球が撃ち込まれ爆発炎上、それを見た一団は大いに盛り上がっている様子で大口を開けて笑っているのがここからでも見えた。

別の場所にスコープを向けてみる。大きな通りの真ん中で分かり

やすい馬鹿が一人いた。身の丈ほどの大剣を振り回し、通りにいる人々を次から次へと切り殺していく。街の治安を預かる官憲らしき人たちが出張っているようだが、彼らも馬鹿の暴走は止められないらしく切り殺されていき、路上に血しぶきが飛び散る。

次々と人を斬り殺していくその馬鹿の顔は満面の笑み。

また別の場所に目を向ける。爆風などの影響を受けて窓ガラスが割れた建物の中では複数人の男が裸の女性数人を囲んでいた。

なにが行われているかは一目瞭然。下種なことに犯された女性を面白半分で殺しているみたいで、その部屋の所々に血だまりも確認できた。

女性たちにナイフを突き立て犯している男たちの顔もこの上なく愉快で嬉しそうなものだ。

奪い、殺し、犯す。

およそ考えられる悪徳がスコープを移動させる毎に映る。胸の辺りに不定形のドロドロとしたものがせりあがって、今にも吐きそうな気分だ。

狩猟でクマやイノシシ、シカ、ウサギなどを刃物で捌いて血や内臓などを直視してもこういう気分になった経験はなかった。

いつそこから馬鹿をやっている者どもに必殺の弾丸を撃ち込んでやりたくなるが、それがいかに危険なことかも分かっている。実質退路が確保できていない状態で騒ぎ立てるのは自殺行為に他ならない。

それにこの悪徳ごつた煮の街を見て分かったことがある。

「あいつら、私と同じプレイヤーか。しかも街中でのPK行為禁止というルールは存在しないし、街そのものの破壊もありか」

彼らが身に纏っている装備の数々はゲーム内で見覚えがあるものも多く、モニターとリアルの差はあっても特徴的な部分があつて覚えやすい。

ここまで聞こえる大声の中にも「エバーエーアデ、サイコー」などとゲームタイトルを叫ぶものがあることからして、あれらは間違いなくプレイヤー達なんだろう。

ネットゲームが始まって以来、悪質なプレイヤーは必ずいる。そのために制作側や運営側は様々なルール、取締りを行ってきた。

『エバーエーアデ』でもルールはちゃんと敷かれており、その一つに街エリアでの戦闘は禁止というものがあつた。違反した場合はNPCのシェリフが駆けつけてプレイヤーを拘束し、悪質ならばアカウントを停止という措置がとられる。

だが、この地獄風景を見る限りはゲームでの知識を捨ててかかった方が良くかも知れない。

ゲームでは破壊できないはずの建物は壊され、攻撃対象にならないNPC扱いだろう人々が殺害され、プレイヤーでは勝てないはずのシェリフもどんどん殺され、殺された人々は消えることなく、血と内臓を巻き散らかして死体をさらす。街から立ち昇る煙に混じって死臭もこの場所まで臭うようになってきた。

「主の知識にあるものはここでは通用しない。まぎれもなくこれは『現実』なのだからな」

茂みの中で至近距離から聞こえるジンの台詞は突き放すようでいて、「しっかりしろ」と叱咤する言葉にも思える。

そうだ。これはゲームなどではない。厳然とした現実だ。受け止める。一度目を閉じる。

受け止めて、噛み砕き、飲み込め。消化しきれなくなった時が死ぬ時だ。

目を開ければすぐ近くにいた黒猫が自分の前にやって来てこちらを見つめている。

「主ルナ、貴女はどうしたい？」

問いかける金眼はまっすぐに自分を見据える。ゲームでは感じられなかった確かな意思が感じられた。

だからか、自分も捻りなく答えを口にできた。

「私は生きたい。生き抜きたい。何をするにしてもまずこの命がなきゃ始まらないんだから」

いきなりこんなゲーム世界に似た場所に自分のキャラクターそっくりな体で放り込まれ、右も左も分からない今。

いま構えているライフルの銃口を口にくわえて引き金を引けば元の状態に戻るかもしれない。けれど実行に移す気にはならなかった。

目の前の街で行われている惨状を見てなおの事強く思える感情、それは命への執着だ。

ここにある体、『ルナ・ルクス』としてある体が自分のものとして生きている。脈打ち、息をし、五感でこの世界を感じている。姿形は変わっても生きているんだ、自分は。

この生の実感を自ら捨て去る気にはどうしてもなれない。だってら生き抜く事から始めようと思った。

「その言葉、確かに受け取った。やはり主は主のままだな、安心した」

そう言って嬉しそうに目を細めるジンは大層可愛く見え、この状

態でなければ体を撫でたいところだ。

生き抜く、そう決めた。

それが今はどれだけ難しいか街から上がる阿鼻叫喚の音を聞けば分かってしまう。

音はまだまだ止みそうにない。

1話 発端（後書き）

かなり久方ぶりに筆を執った一作です。

かなり久しぶりなので色々と至らない点があると思われます。その点のご指摘いただけると助かります。

頻繁にネットに繋げない環境ですので、感想を返すのは稀と
思っています。欲しいです。
では

7月29日 改訂

2話 混乱（前書き）

- ・ あい変わらず残酷描写、流血描写が続きます。
- ・ 色々とマズイだろう表現があります。
- ・ 用法用量を守り、正しく読みましょう。

2話 混乱

ガバリと何の前触れもなく、ベッドからばね仕掛けの人形みたく跳ね起きた。

「うえ！ ……ううう？ ああ……」

何か途轍もない夢をみていたような気分だった。

あまりのショックに目が覚めてしまったが、そのショックのためにどんな夢をみていたのか欠片も思い出せない。

口からアホのような声を出して、ボリボリと頭をかいて今の時間を確認するべく枕元に置いた携帯電話に手を伸ばす。

窓の外がかなり明るい。いつも起きている時間より遅くなってしまった？ ケータイの目覚ましはセットしたはずなのに。もしかして学校に遅刻か？

などなど胡乱になっている頭の中身をそのままに携帯電話を手探りで探す。探すけれどいくら枕もとを手でかき回しても携帯電話の硬質な感触はない。

なら床に落としたか？ と思い、ここで初めてオレは自分が寝ていたこの部屋の様子を知った。

「……なんだこりゃ？ どこ、ここ」

自分が寝ていた場所は家族三人で住んでいる家の六畳間ではなかった。

何処かの古いビジネスホテルの一室とさえいいのか、結構広めの室内にカーペットが敷かれ、生活に必要な家具が置いてあり、出入り口らしい扉とトイレ兼シャワールームに通じる扉。

って、ここ見覚えがあるんだけど？ 壁紙や家具、隅に置かれている武具らしいもの、まるで自分が熱中しているネットゲーム『エバーエーアデ』での自キャラ『マサヨシ』の自室を再現しているみたいだ。

「マジか？」

まさかと思い、布団をはねのけベッドから立ち上がり自分の体を見下ろしてみた。

うお！ 背が高い！？ という感想がまず一つ。オレの身長は一六〇センチ代前半の低身長だったはずなのだが、記憶にある足までの距離が今は遠く感じる。比較対象がこれといってないため分かりにくい、視線も高くなっている気がする。

寝間着らしいハーフパンツと綿の半袖シャツを身に纏っており、両手を見てみれば元のオレのものより筋張っていてゴツクなっている。

「いまのオレ、どうなっているんだ！？ あ、鏡、カガミ」

トイレを兼用するシャワールームに洗面台のある記憶があり、それに従って駆け込み、鏡に今のオレを映し出した。

「これが、オレか？」

戸惑う声が遠くに聞こえる。まるで他人の声だ。いや、実際今になって自覚したが元の自分の声よりも野太くなっている今の声は他人の声そのものだ。

その声に見合うように容姿も変わっており、二〇代半ばぐらいの筋骨逞しい大男の姿が鏡の中にあった。

身長は大雑把に換算すれば二メートル近くはあり、肩幅は広く、胸板も厚い。シャツをめくってみれば腹筋が六つくらいに割れていた。六パックというヤツだ。

濃い茶色の髪は短く刈り込んでおり、顔は彫りの深い西洋系。ただし若干幼く見え、目元口元を中心に元の自分の雰囲気が残っているように思えた。ハリウッド映画の肉体派男優に元の自分の顔のエッセンスを四分の一ほど混ぜ込めばこうなるかもしれない。これが『マサヨシ』になったオレということなのだろう。

シャワールームから出て、改めてこの部屋を見渡す。

やっぱりゲーム『エバーエーアデ』でプレイしてきた自室そのままだ。バッグを吊るしたラックにも、武器防具一式をまとめて入れているチェストも、全部ゲームの通りなんだろう。

けれどモニター越しには感じられない五感に訴える臨場感がゲームではないとオレに分からせようとしている。

「待てよ。ゲームの通りだとして、他のみんなは？」

はたと気づく。

オレがこんなふうに『エバーエーアデ』の世界らしき場所にやってきたということは、他のプレイヤー連中もここに来ている可能性だってある。

特に気になったのは同じチームを組んでいるメンバー達のことだ。

他のMMORPGでもそうであるように、『エバーエーアデ』でも気の合ったプレイヤー同士でチームを組み、複数人数で冒険に臨むことができるシステムになっている。

チームを組むとチーム用の集合住宅に拠点を構えられるようにな

り、そこを起点に同じチームの仲間から冒険に出るメンバーを募り、クエストに出発するのがチームに加入したプレイヤーの基本的なプレイスタンスとなっている。

今いるこの住居だってゲームの設定がそのまま正しければ、オレが加入しているチーム『銀月同盟』が所有している集合住宅の一室ということになる。

外に出て他の連中の事を確かめなければ、そんな気持ちが一気に強くなった。

寝間着のパンツとシャツという姿のまま外に出るのはさすがにマズイと思い、部屋を漁って出てきた綿の長パンツとGジャンに似ているジャケットをシャツの上から羽織り、ブーツを履いて外への扉を開いた。

熱せられた石の臭いと乾いた土、そして潮の香りが風につて吹き込んできた。

扉の外、集合住宅の石造りの廊下に出てみると街の臭いが鼻の中に入り込んでくる。自分の部屋は四階にあり、それなりに高い場所から『ジアトー』の街の様子を眺めることができた。

海が近い石造りの街並み、アスファルトではなくレンガで舗装された道、自動車やバイクが走っている中で馬車や馬が平然と道を行く。二十一世紀に入った日本では見ることもない光景がオレの視界全面に飛びこんできた。

モニター越しではない、余りにも臨場感のあり過ぎる風景に頭がクラクラしてくる。

「ねえ、その君。もしかしてマサヨシかい？」

「……え？」

頭がどうにかなったせいか横からかけられた声にとっさに反応できなかった。けれども顔を向けてみると、オレの部屋の隣から出て

きた男が目を見開いてこちらを凝視している。

見た目は若く、スマートな印象の男性。身長はこつちより幾分低いが十分に長身に入る背丈。こちらがゴリマツチョなら男性はホソマツチョというところだろうか。教育番組に出てくる体操のお兄さんを洋風にしたらこんな感じかもしれない。

でも……あれ？ オレは男性の顔に見知った顔の印象を重ねた。うん、似ている。それにオレの隣の部屋から出てきたという事はまず間違いない。

「タカ！？ 隆士……いや、この場合はタカヨシか。あー、どつちで呼んだら良いんだ」

「どつちでもいいよ。じゃあ、やっぱり君は正義、マサか」

「うん、何かスゴク体が変わってしまったけどな。やっぱりコレ『エバーエーアデ』かな？」

「ネット小説の読み過ぎ、って言いたいけど否定できないか。この体だってタカヨシのものにそっくりだし」

やっぱり細川隆士、オレのダチだった。

中学、高校と同じ学校で同じクラス。付き合いも長く、クサイ言い方をするなら親友と言える仲だ。ネットゲームの楽しさを教えてくれたのもコイツで、『エバーエーアデ』を紹介してくれたのもコイツになる。ネームエントリーの時、話し合って『マサヨシ』『タカヨシ』と語呂良く名前を合わせており、チーム内でも名コンビだと思われている。

そんな深い付き合いのあるダチだ。だからだろうか、さっきまで感じてたクラクラ感はなくなり、すっと落ち着いた気分になった。

「ここもジアトーの街でいいんだよな？」

「多分ね。そっか、リアルで見るとこんな感じなのか」

何やらしみじみと外の街並みを見つめているタカ。

タカにつられる様に改めて見ると日本にはない異国情緒が感じられる街で、観光パンフレットに写真が載っているもおかしくない。こんな事がなければ街一周の観光ぐらいはしたくなる。

けれどもタカ？　今は非常時ですよ。

「おい、タカ。眺めんのはいいけど、今は他のメンツの様子を確かめてみないか？」

「ん、そうだった。そうだな、まずはリーダーに連絡をとってみようか」

オレ達がこうしてこの場所で目が覚めたんだ、銀月同盟のメンバーが他にも揃っていることは十分に考えられる。

ここはタカの言うようにチームのまとめ役をやっているリーダーに連絡をとってみるのが最初の一手だろう。

銀月同盟の創設者であり、チームリーダー・サイトーさん。高レベルプレイヤーの彼がドツシリと構えて皆を纏めているお陰で、チーム内で数多く存在するチームの中でも銀月同盟は堅実な働きを見せる有名な一団になっていた。

彼に会う事が出来るなら多少は今の状況が良くなる。そんな気分さえオレは持っていた。

サイトーさんの部屋は二階、ここから二つ下だ。

早速向かおうと階段に足を向けたその時、またも異変が起こった。

『発、こちらは銀月同盟リーダー・サイトー。銀月同盟のメンバーへ、この異変に対処するためメンバー全員は一階の集会所に集合すること。なお、返信は不許可。以上』

突然に頭の中から聞こえる声。踏み出した足が思わず滑ってしま

い、転びそうになってしまっ

「なんだこりゃ!？」

「うーん? ……これは多分、チャット機能がリアルになったものじゃないかな? もしかしてだけど」

動揺するオレに対してやたらと冷静なタカ。でも良かった、これはオレだけに聞こえる幻聴の類とかではないらしい。

鼓膜を通さず直接脳に響くようなこの声、タカの言葉が正しければチャット機能が形を変えたものという。

だとするなら、聞こえた声の主はサイトーさんか。リーダーがこの異常事態を前にしてみんなを呼んだのだ。それにしても、サイトーさんは普段もつと気さくで柔らかい話し方をする人のはずだったが、あんな軍隊じみた言い方をするという事は彼も大概に混乱しているということかもしれない。

「じゃあ、行ってみようぜ。リーダーのお呼びだ」

「うん、一階の集会所だな」

滑った足を戻してもう一度階段へと急ぐ。

何もかもがいきなり、どうしてこうなったとかの理由も分からない。だけど、今は足を動かすしかない。

オレはタカと並んで廊下を駆けていった。

朝日に照らされているその建物は、この街ジアトーの為政者達が住まう場所だった。

ジアトー市庁舎。重厚な石造りの建築物は秩序の所在を知らしめ、街に住まう人々に公平さの在り方を示す威厳ある雰囲気放っている。

た。

働いている職員たちは一人一人程度の差こそあれ、街を運営している身としてそれなりに誇りをもっていたはずだった。

この街の長たる市長も市民に選ばれた誇りをそれなりに持ち、この街を良くしていこうという考えもあつたはずだった。

それらがみな過去形で語られなければならないのは、市庁舎にいる大半の人間が無残に命を落としているからだ。

壁や床、天井を問わず血しぶきがかかり、市庁舎の内装を前衛的な赤いアートに染め上げている。

床にはゴロゴロと不揃いの死体が転がっており、五体満足に見える死体は一体もなかった。首がなく、手足が欠け、胴体が上と下でスッパリ切れているもの、拳句の果てには原型を留めず挽き肉になっているものまである。

死に方も様々。焼死、爆死、感電死、出血死、ショック死、呪いで死んだというものすらある。この様子は子供が遊び飽きたおもちゃを放り捨てる様によく似ていた。

庁舎にいた彼ら職員は無邪気な子供の残酷な遊びに付き合わされたアリやカエルだったのだ。

「すっげーな！ エバーエーアデでの力がみんな使えるぜ。装備の効果もリアルだ」

「おう！ 魔法も習得したやつが一通り使えるし、使い魔や召喚獣も呼べる。なんかカンドー、リアル魔法使いになれるとはね」

「でもって、無敵の俺様ちゃん達は圧政を敷く市長をぶっ殺したのでした。アイアムヒーロー」

血の臭いが充満しだした庁舎の一室に惨劇を起こした人間が集まって談笑していた。

彼らはゲーム『エバーエーアデ』のプレイヤー達である。気の合

う連中でチームを組み、少々素行が悪いながらも深刻な問題とならず今日までゲームをプレイしてきた人々だ。高レベルのプレイヤーが彼らの大半を占め、その装備品も手間と暇、そして少々の手間と行為で手に入れたものが多い。

彼らに共通することは現実の現代日本に倦んでいた事だ。人それぞれに抑圧された気持ちのはけ口を求めてネットゲームにやってきて、それでも満足しきれない彼ら。

そんなある日、ネットゲームの世界がリアルな感触をもって目の前に現れた。しかも自分が手塩にかけて育ててきたキャラクターの能力をそのまま受け継いでだ。

最初こそ戸惑いの連続だったが、やがては大きな喜びに取って代わる。

今まで夢の中でしかなかった魔法が使える。常人のはるか上をいく身体能力。現代日本では厳しく規制されている武器の数々、しかも常識にはない特殊効果さえある。

超人願望、変身願望、破壊願望がいとも容易く叶えられる世界。しかも本来なら彼らの行動を規制すべき官憲は全く歯が立たないものだった。

阻むものは一つもない。後はきっかけ一つで簡単に行動に移せた。

「よし、じゃあ目標は分かりやすく世界征服でもいつとく？」

「いいねー」

その部屋は市長室だった。本来なら市民に選ばれた市長とその秘書が駐在している部屋になるのだが、それも昔のこと。現在は彼らプレイヤー達が殺戮の余韻に浸って成果を自慢しあう場になっていた。

この部屋の主だった市長は、自分自身のデスクを飾る奇怪なオブジェに成り果てていた。彼らの一人に首を綺麗に刎ねられ、さらし

首の罪人のようにデスクの上に乗っている。その体は、別の一人が召喚した召喚獣のエサになってしまい、今もぼりぼりむしゃむしゃと食事中だ。

市長を補佐する女性秘書も彼らがやって来た当初この場にいた。そして今は彼らの都合のよいダッチワイフにされている。この部屋の一画で彼らに代わる代わる犯され、彼女の瞳にはすでに正気の光はない。反応も薄くなっており、その内に飽きた誰かによって殺されるのは明白だった。

このようにまともな神経をもった者がいれば顔を背けなくなる場所ので愉快そうにはほほ笑み、彼らの所業を満足そうに見ている男がいる。

市長用の革張りの椅子に座っている彼は、座っていても長身だと分かる長い脚を優雅に組んで長めでセットされた金髪を手でかき上げる。現実でも彼のクセだが、手に伝わる感触が異なるせいかな少し不慣れな手つきになった。

「みんな、市庁舎制圧おつです。手始めに僕たちの目標は市街征服ってことにしませんか？」

「いいねー、それってどんなエクセルサーガ？」

「じゃあ、リーダーのストさんはイルパラッツォ？ 面白そう。アタシ、エルガーラ役希望ね」

「お前なんてメンチで充分だろ」

ワイワイ賑やかに話す気の合った彼の仲間たち。

彼らを纏めていく男、ストライフはこんな仲間たちの雰囲気を非常に気に入っていた。リアルでは引き籠もりのゲーム廃人の上をいく廃神だった彼。ネットゲームの世界こそが全てで、自室の液晶ディスプレイに映されていることが真実だったのだ。

ネット上で出会った彼らは一緒に冒険をする仲間。彼らと付き合い合

い、信頼を得て、気付けば高レベルプレイヤーのリーダーとして仲間を引っ張る立場になっていた。

認められた。その事が嬉しく、ネット世界にのめり込んだ理由であつた。

そんな彼らと共に今度はリアルの世界を蹂躪していく。なんとも心躍る話ではないか。

「警察署制圧も別メンバーに頼んでいますし……うん、ここは一つ大きな勢力を呼び込んでみようか」

「え？ 大きな勢力つて、どっかの大手チームでも参戦させるんですか？」

「違うよ、もつと巨大な勢力。これは僕とリーでやってみるから任せてくれないかな。それまでみんな好きに暴れていいからさ」

「ふーん？ 我に策アリかなリーダー。いいよー任せた」

「アタシはまだ試していない魔法をバンバン使いたいからいいよ、召喚獣も一通り呼んでパーティーね」

「では、某 それがし と殺戮した人数を競ってみるか？ 庁舎の人間を斬っただけでは物足りないのではな」

「いいねー マンハント勝負もしたいな」

今の彼らは基本的に人を殺戮することに酔って、楽しんでいる。

現実の自分にはない、超人の能力で人が面白いように壊れていくのが楽しくて仕方ないのだ。

そんな無邪気で残酷な殺戮集団という空気をストライフはとても楽しいと感じていた。

血の匂い、臓物の臭い、若干の精液の臭い。人間なんて一皮剥けばこんなにも臭いがプンプン漂うものだ。それが今はとても芳しい。

これから立てていく血塗れの計画を頭の中で楽しみ、市長の生首を軽く撫でるストライフは深い充足を得ていた。

話し合っただけでは埒が明かず、一先ずは偵察の為に何人かのチームを数個編成して外の街、シアターの様子を窺う。

これが銀月同盟の出した一先ずの目標だった。いや、これは目標とは言えないか。とりあえず何をやる？ という言葉で出てきた話を実行に移したに過ぎない。

チームリーダーのサイトーさんの呼びかけで集会所には銀月同盟の全員、三十名ばかりのメンバーが揃うことは出来た。

みんな取りも取らずといった格好がほとんどで、中には下着姿の女子がいてドギマギしてしまった。

やっぱり全員体に変容したことに戸惑い、人間じゃない種族になっていた奴は頭を抱えて精神的な重症だった。

男から女、女から男とリアルと性別が違った奴らも深刻そうだ。

それからするとただ単にゴリマッチョ化しただけのオレはまだ恵まれた方かもしれない。

戸惑いが一段落したら、今度はこうなった原因の議論だ。

そりゃ昔に比べたらコンピュータの技術は格段に良くなったが、それでもヴァーチャルリアルはまだ漫画や小説の世界のものだ。それなのにオレ達はこうしてゲーム『エバーエーアデ』そっくりな世界に自キャラそっくりな姿で存在している。

ゲーム会社の陰謀か！？ 異世界落ち！？ 古式ゆかしく宇宙人の誘拐！？ そんな推測を言い合っただけで議論は進まない。

サイトーさんはここで話を打ち切るべく、外の偵察を提案してきてみんなに了承された。こういうのも鶴の一声というのだろう。

外への偵察にはそれなりにレベルの高い中堅レベルから高レベル

のプレイヤーが出張る事になり、オレとタカもそのメンバーとしてサイトーさんに声を掛けてもらった。

普段からオレ達二人の名コンビ振りを評価されたのか、オレとタカは離さずにもう一名を加えて三人での偵察行にしてもらえた。でもって、現在に至る。

「うわあ、綺麗な街。こんな事がなければ本当に観光したいな」

「うん、賛成。けれど今はチームのみんなのために街の安全を確かめるのが優先事項ですよ」

「うい了解」

タカ、オレ、そしてもう一人の三人で連れ立って道を歩く。

そのもう一人というのはコソットというフェルパー族になった女性プレイヤーだ。リアルでの面識はないけれどオレ達は何度となく一緒にクエストをこなしてきた仲で、実際の人となりもそこそこ分かってる人だ。

ネカマとかではなく本物の女性プレイヤーで実は専業主婦をやっている人妻な方らしい。専業主婦って忙しい時は忙しいけれど、暇な時間も結構あるのだとか。その暇な時間を使ってネットゲームを始め、このゲームにはまったそう。コソットさんみたいなネットゲにはまる主婦もかなりの数いるそうで、ママさんチームも結成されている話は聞いたことがある。

話がそれたが、現実では高校生であるオレとタカにしてみるとコソットさんは年上の女性。当初はどう接したものかと思ったものだが、気さくな彼女からオレ達の方に寄ってきて、あれこれと楽しい話題を振ったり主婦のくせにかなりのゲーマーな部分を見せて、知らない内にこうして溶け込んでいる。

そんな彼女の見た目は一〇代半ばの猫耳少女にしか見えない。本人はやけくそ気味に「わーい、若返った！」なんて言っているが、

フェルパー族の特徴である猫型の耳と尻尾の存在には困惑しているようだった。

ゲーム『エバーエーアデ』では、キャラクターメイキングに性別、体格、外見年齢、髪や瞳の色、種族というのが選べるようになっていた。

大抵のゲームであつたらこのメイキングに深い要素はあまりない。遊びなれたゲームプレイヤーになればなるほど、手を抜くか凝り性になるかのどちらかになる。

けれど『エバーエーアデ』では少し違う。まず他のゲームにはある『クラス』や『職業』といったスキル、装備を制限するものは存在しない。

ガチガチの戦士系に見える装備に身を固めたプレイヤーが魔法を撃つことが得意だったり、その逆でいかにも魔法系に見えるプレイヤーが大きい剣を振り回したりなんていう装備のコーディネートが可能になっている。

勿論、装備を着用するにあたって要求されるパラメーターは存在し、満たしていなければ何らかのペナルティが課せられたり、そもそも装備出来なかつたりする。でも自由度が高いことは確かで、それがゲームでの売りの一つでもあつた。

そんな自由度の高いゲームでキャラクター育成の基本的な指針となるのがメイキング時の性別、種族といった最初期の設定なのだ。他のゲームでもその設定が初期のパラメーターを決定したり、育成時のパラメーターの伸びやすさが決定したりするものがあるが、このゲームではより強調されたものになっている。

だからプレイヤーはゲームを始める段階からある程度の成長計画を立てることが求められる。

ゲームでの設定がそのままに当てはまるならだけど、種族的に言えばオレとタカは『人間』。パラメーターの伸び方が各種バランス

良く、割り振ったポイント次第でどんな戦い方も出来るようになるのが特徴。初心者から熟練のプレイヤーまで選ばれる事が多い種族になる。

ココットさんの『フェルパー』は外見のままに猫を起源とする一族のことで、パタメーター的には敏捷さが伸びやすく、軽戦士の戦い方を好む人にはうってつけ。意外なことに魔力のステータスも伸びが良く、ココットさんはそこを活かして戦場を駆け回れる魔法使いとなっている。

以上のように、ゲームでは当たり前のように人間以外の種族のプレイヤーもいたのだが、ここではどうなのか？ 猫耳少女が街を歩いて大丈夫なのか？ と外へ出る際に思っていた。でもそれは杞憂というものらしい。通行人を見ても『エルフ』やら『ドワーフ』の人もいるので、ココットさんの外見に関してはここでも一切問題のないことなんだろう。

重大な問題は他のところにある。

「座り込んでいる人ってみんなプレイヤーでいいのかな」

「でしよっね。待ってればいずれ戻れる、と考えているのかも」「覇気のない話だぜ」

レンガで舗装された街路の片隅で数人ずつ固まって座り込み、ぼんやりとしている人々が何グループもいた。

ココットさんが言うようにこいつ等はまず間違はなく『エバーエーアデ』のプレイヤーだろう。いきなり何の前触れもなくこの世界に放り込まれ、何をしたら良いか分からず、一人になるのも心細い。そんな気持ちを抱えた奴らが寄り添ってあんなグループができたところだろうが、本当に覇気どころか気力が全く窥えない連中ばかりだ。

待っていたところで元に戻る保証なんてどこにもない、だったら

動かないでどうするとオレは思うのだ。

「マサ、あの連中を悪くは言えないよ。僕達だってサイトーさんってリーダーがいなければ同盟の何人かがあなっていたかも知れないんだ」

「そう、かもな」

オレが余程座り込んでいる奴らを嫌っていると思ったのか、タカがたしなめる様な事を言ってきた。

むう、確かに集会所で見たメンバーの様子を見るにああいう風になりそうな人もいたな。そこにサイトーさんが精神的な重石となったのかも。それを考えるとリーダーというのは大変だ。

オレ達三人は、この観光パンフレットにでも出てきそうな街を散策し、街や人を観察していき、時折『チャット』で同盟の住居と連絡を取り合う事をして偵察を進めていく。

街の人々は人種や種族の多様さを除けば、日本の都市と変わりない生活を送っている。朝に起きて食事をして仕事に行き、それぞれの仕事に勤しんでいく。そんなどの街にでもあるような光景だ。

時折、「メニューが開けない！これじゃログオフができないよ」「管理会社は何をやっているんだ！」といったプレイヤー達の喚く声も聞こえるが、事情を知らないらしい街の人は奇異な目で見るか、迷惑そうな顔をするかの反応を示していく。

ひどい喚き声をあげている人が街の保安官 シェリフ に連行されていく様子も見ることができ、オレ達も悪目立ちする真似はしないようにしようと決めた。

時間は街路にあつた時計では十時二十分とある。この世界でも地球の時刻が採用されているということだ。太陽も高くなり、どんどん暑くなるのが分かる。そういえばジアトーの街の周囲って荒野だ

か砂漠だがで、結構暑い気候という設定があったな。

モニター越しじゃ分からなかった暑さがこうして感じられるとは、これが夢とかだったらリアルな夢を見る自分自身に拍手を送りたい。こっちが暑さで参り始め、横目で見るとタカもちよつと顔色が悪い。対してココットさんは全く平気そうだ。汗すらかいていない。

「ううん……やっぱり何か武装を持ってくるんだったかな」

そんな事を言っただけ思案顔をしている彼女。

武装、か。それについてはオレもちよつと後悔し始めている。

偵察に出るに当たって、装備をしていくか？ という話があつた。集まりで出た。武装することで身の安全を図れるが、これだと周囲に威圧的で警官とかに目を付けられるだろう。武器を日常的に持ち歩く習慣がない日本人ならではの抵抗感があつたのだ。

結局はサイトーさん他数名の人が各自の判断に任せたらと言いだし、決定された。すると、ほとんどの偵察メンバーは丸腰か、隠し持てる小さな武器を携帯して外に出るという結果になつたのだ。街中での様子見なのだし、問題はないと思われていたのだ。

それはオレ達も例外じゃない。

オレのゲームでの基本的な戦闘スタイルは重戦士で、魔法や銃弾すら弾く全身甲冑で身を包み仲間の盾としての役割を得意とする訳だが、今は集会所にいた時のままジャケットとチノパン姿だ。タカもココットさんも普段ゲームで見た武器防具を一切持たず、武器と言えるのはタカが「念のため」と言っただけ隠し持っているナイフくらいだ。

準備のために部屋に戻りゲームで『マサヨシ』が使っていた武器を見つけたが、持つて出る気にはなれなかった。多分だが、法治国家日本という現在の環境が大仰な武装を嫌つたとなるのか？ あるいはゲームでのルール『街中でのPK禁止』というものがあつた安

心感からか。

外に出てしばらくはナイフ一本ですら持っていてはマズイだろう、
って気分だったが、今は違った。

ごく平然と鉄砲を肩に担いだおっさん達が二、三人で歩いている
し、腰に剣を差している奴もいた。入った店の壁には自衛用と思し
き銃がかかっている。

プレイヤーではない街の市民が当たり前のように武装している光
景は日本人のオレには新鮮な光景だった。同時に、タカが持ってい
るナイフが急に心もとない代物に見えてくる。

ココットさんの言葉は今のオレ達全員の考えかもしれない。

「じゃあ、まだ戻るのも何ですし武器買ってみますか。幸い僕達は
当面のお金なら不自由ないですし」

「そうだね。わたしだって術専門って訳じゃないし、マサくんもそ
れでいいわね？」

「うっす。すぐに丸腰状態から脱出だ。今はゲームスタート時より
も無防備なんだしな」

タカの提案で武器を買う。悪くない話だと思った。

オレ達の金はバックに入っていて、ゲームで最後に所持していた
金額がそのままそこにあった。店で金が使えることも確認済み、そ
の成果のチョコバー三本はすでに腹の中。

中堅どころのオレらだったなら贅沢を言わなきゃ人数分の武器を揃
える事は余裕だ。

そうと決まったら早速移動。確かゲームでの知識が正しければこ
の通りの裏手に武器を扱っている店があったはず。

タカもココットさんもその店で良いと賛成してくれた。店がなか
ったら人に聞くとして、一先ずはそこを目指すことにする。

けれど、どうもこの判断は少し遅かったのかもしれない。

花火や爆竹が出す音がすぐ近くで聞こえた。と、思っていたらオレ達のすぐ前を歩いていた通行人がいきなり倒れた。

倒れた事で広がった視界の先に拳銃を片手に持った男がいる。ええっと、もしかしてコイツが人を撃った？

「へっへっへへえへ」 死んだ死んだ。これで経験値どんくらい入るんだ？」

そんな事をのたまって片手に持ったビンに口をつけてラッパ飲みする男。ビンの中身は間違いなく酒だ。でもって、正気を失ったプレイヤーでもある事が確定だ。

つか、酔っていたとはいえ道行く人を平気でやりやがったよ。

「んつく。酔えるゲームとは面白いもんだ。しかもやりたい放題だ……」

酔いでふらつく男の足元。こいつ、今の状態をゲームでしかないとはい込んでいる。しかもやりたい放題とか言っている。

目の前で起きた異常な事にオレ達三人が三人とも体が固まってしまった。なのに街の人たちは適確に動く。あっという間に距離をとり、逃げていくのだ。

だから男の視界に入るのもオレ達だけ。濁った眼に捉えられる。

「ん？ プレイヤーか？ うっしゃ！ やったる！」

酔っ払いとは思えない素早さで拳銃をオレ達に向ける男。この反

応からしてゲームの時からPK行為をしてきた奴なんだな」と呑気にも思ってしまった、何にも行動が出来なかった。

運動会のスタートピストルみたいな音が三度。

レンガ敷きの地面に倒れたのはコcottさんだった。ここでもいい加減に呆けたオレの体もようやく動けるようになった。

「コcottさんっ!」

「うつしやつ! フェルパー娘撃破」

倒れたコcottさんに手を伸ばそうと身を動かす、その前にまた男が銃を二発コcottさんに撃ちこんだ。景気づけのつもりなんだろう。昔から倒した魔物の死体に攻撃をするヤツはいるし、こいつもその一人のようだ。

この二発でコcottさんの頭の形が崩れて、血じゃない何かがトロトロと出てきた。あ、確かめるまでもなく死んでいるやコレは。

「次はお前たちじゃ!」

男が銃をオレに向ける。いやに現実味がない。これが終わったら部屋のベッドで目が覚めて、やな夢を見たもんだ、とか言うのだからうな。

男の銃の引き金が引かれる。

——カチッ

「あん? なんて弾でねーんだ? まさか弾込めるのは手動とかか?」

カチカチと手に持った拳銃をいじる男。こいつの銃はリボルバータイプの六連発だったようだ。

ゲームだと弾切れになると自動的に弾込め動作をして続けざまに

撃てるが、ここはやっぱり現実。キチンと自分の手で弾を込めないとだめのようなのだ。

そんな男の情けない姿を見て、オレは初めてふつつつと沸く怒りを感じた。

こんなのがココットさんを殺したのか。

足元を見る。相変わらずココットさんが倒れたままで、体から出てくる血とかが地面に広がっていく。ゲームでは死亡扱いのプレイヤーはその場から消えて、プレイを開始した街に戻されるようになっている。けれどココットさんは消えない。何時までも死亡状態のままだ。

ここじゃ死んだら終わりなんだ。

「おまえーーーーっ！！！」

ココットさんを見ていた分、出遅れた。すでにタカがナイフ片手に男へ向かって駆けだしていた。

ものすごく速い。元の隆士は陸上部でもないし、何か格闘技を習っていたわけでもない。けれどゲーム内での『タカヨシ』はカタナを手にして走り回り、斬りまくる戦い方をしているキャラだ。敏捷さと筋力に比重を置いたパラメーターはこの世界でも適用されているのかもしれない。

弾丸のような踏み込み、そして上から下への斬り下ろし。あまりにスピードが速くて傍で見ているオレでもナイフがキラリと光ったようにしか見えない。

レンガ敷きの地面に重い物が落ちる音。目で追ってみれば男が持っていたりボルバー拳銃が落ちたのが見える。それも男の手がくっ付いたままになっている。

「あ、ぎ……熱い……痛い。なんで？」

手首を切り落とされて血が勢いよく出てくる腕、訳が分からないという顔で地面に落ちた自分の手と切られたところを見比べる男が妙におかしいものを感じられた。

思わずタカGJなんて言いそうになる。

怒れるタカはまだ物足りず、男に止めを刺そうとナイフの切っ先を相手の首に向ける。

だけどその前に男は死んだ。地面に自分の首を落として。

最初は男が顔を俯けたかと思ったが、首から上が体を離れて地面に落ちるところでやっと斬り落とされたものだとして理解した。

斬り落とされた体は赤い血を噴水みたいに辺りにばら撒く。返り血がタカにかかり、血の臭いで一杯になる。なんか小学校のときの体育の授業でやった鉄棒みたいな臭いがした。

タカがやったのかと思うけれど違う。血を噴き出しつつ倒れる首なし死体の背後に刀を持った男が立っていた。

「これで某 それがし の人斬りスコアは七十と三。クククッ……アルトのスコアはまだ六十であるが、召喚獣はまだ呼んでいないから油断できないな」

返り血を浴びる第二の男。黒い髪を伸ばし、頭の後ろで括り、袴に陣羽織とコテコテのサムライルックをしている。

この男がココットさんを殺した男の首を斬りおとしたのは間違いない。けれど、礼を言ったり気を抜いたりはできなかった。

刀男の目が物欲しそうな感じでタカを見つめるからだ。これって、うほっいい男……とかじゃない。

まだ斬り足りないという顔だ。

「タカ！ 逃げろっ！」

「はっ、え？」

「ふははっ！ これで七十と四！」

目の前で血の噴水を見てしまったからか、茫然としていたタカに刀男が刀を突き出した。オレは声を上げた、でも遅い、遅かった。タカの背中に刀が生えた。

時代劇のようにブスリなんて効果音が聞こえないから何が起こったのか理解できるまで数秒の時間が必要だった。

「がはあ……あああ」

タカが刺された。

刃を引き抜かれ、傷口と口から血を出して崩れ落ちるタカ。刀男は血に染まった刀の刀身をペロリと舐め、酔っぱらったような顔をしている。なんて分かりやすい殺人狂。

五分としない内に知り合いが撃たれて刺されて殺される。とても現実のものとは思えない。さっきまでこの世界を認める気になっていた自分が遠いものに見える。

血に酔った刀男は次の獲物だとばかりにオレに目を向ける。

こっちを見る目は人を人と思っていない感じがした。そんな目を向けられているのにオレの口は自動的に言葉を出している。

「なんで、お前はこんなにあっさり人を殺すんだよ。おかしいだら、変じゃないか」

「うん？ その有様で某に言葉を放つか。面白い、その質問に答えてから斬ってやろう。とは言え、そう大層な理由などない。お前は食べ物を食べる時、なぜ食べるのかいちいち疑問に思うのか？ 息をするのもなぜとか考えるか？ それと同じさ、某にとって人斬りは今や生理現象に等しい当然の行為！ ああ、この芳しい血の香が

某の滋養なのだ」

深呼吸して血の臭いを嗅ぐ変態刀男。訳わかんねえよコイツ。食べ物を食べることと人を殺すことが同じって、理解できない。

同じ言葉話していても理解しあえない人種。目の前の変態はそう定義するしかない。

こんな変態に殺されるのかオレは。怒りに続いて今度は嫌悪の感情もこみ上げてくる。何とかして一泡吹かせてやりたい気持ちが凍結気味だった頭の回転に加速装置を付けて回りだし、頭脳が導くままに腰に巻いたバックに手を入れた。

確かに今のオレは武器を持っていない。だけどバックの中身にあるアイテムは何時もの狩りに出かける定番が詰め込まれている。バックの中を探る手が目的の物を捕える。

「では某の妖刀の滋養としてやろう。なに、すぐに楽になれる」
「お断り、だ！」

バックに入れた手を抜き出して取り出した物を勢いよく地面に叩きつけた。

クラッカーが破裂したぐらいの爆発、何より目の前が真っ白になるぐらいの光が目飛び込んでくる。うわっ、ゲームでのエフェクトより強烈だ。

カメラのフラッシュを何倍も眩しくした光を出す閃光弾。ゲームだと魔獣用だったが、ここではそんなもの関係ない。

「ぐお！？ なん、だ？」
「おりやつ！」

予想外の眩しさだったがそれなりに準備の出来ていたオレ、まったくの不意打ちで目を潰された変態刀男。どっちがすぐに動けるか

なんて誰にでも分かる。

任侠映画で見たヤクザの喧嘩キックを真似て思いきり変態男の股間目がけて蹴りを叩きこんでやった。

「おふうう」

情けない声をあげてその場にうずくまる変態。オレの蹴りは見事ヤツの切ない箇所クリーンヒットしたようだ。

このままコイツをフルボッコしてやるか？ という考えが湧きあがる。でもそれ以上にこんな危険人物の傍にいるのはダメだと警告が出た。

そうだ、今は情けなくうずくまってプルプルと震えているがコイツは人を何人斬っても構わないと思っている殺人狂だ。すぐに復活して今度こそ殺しにかかってくる。

逃げる！ 自分の中から出た言葉にオレはすぐさま従った。

変態に背を向けて逃げ出す、どう見ても死んだだろうコcottさんや刺されてどうなったか分からないタカ。二人の事が頭にちらついていたが逃げる足は緩めない、緩めてしまったらあの変態に追いつかれてしまう。今は逃げ切って銀月同盟のみんなに助けを求めよう。変態はその時にきっちりしめ上げればいいはずだ。

仲間の助けを求めてオレは街を走った。

ずずん、と軽い地震が辺りを揺らして悲鳴が上がる。何回も繰り返し聞こえる爆竹のような音はリアル銃声だ。

昼前に起こった出来事から数時間、午前中の悲劇なんて前座でしただけと言わんばかりに街中に破壊が撒き散らされている。

観光用のパンフレットに載ってもいいような景色をしていた街が

今では戦場映画に出てくるような廃墟の集まりになっていた。数時間の内にあつという間にこうなったのだ。

刀男から逃げて走っている最中、同盟の仲間連中に起こった出来事を『チャット』で伝えようと思い、リーダーのサイトーさんの顔を思い浮かべる。伝える相手の顔を思うだけで意思を伝えられるこの感覚はとても不思議なものだ。でも今はその不思議さがひたすらにありがたい。

さっそく連絡、と思っていたらサイトーさんから一方的な連絡が飛んできた。

『銀月同盟リーダー・サイトーから外部に偵察に出ている各員に通知。同盟の本拠地が無法者の襲撃を受けている。各員は街に潜伏して機を見て逃げることに。間違ってもこっちに来るんじゃない返り討ちに遭うだけだ！ 敵勢力は高レベルプレイヤーの集団と思われる。すでに何名か……死んだ。リーダー権限で銀月同盟の解散を宣言し、各員は街から退避するように。以上、返信は不許可』

思わず足を止めて同盟の本拠地がある方向を見た。黒い煙が上がっている。距離と方向からいって間違いなく同盟本拠地のある場所だ。

これはあれか、ココットさんやタカみたいな事があそこでも起こっている。この世界にはあの酔っ払いや刀男以外にも変態なプレイヤーが沢山いるのか？

「タガが外れすぎだろう、常考」

いや、もうこんな世界にはオレが思っている常識なんていないのか。

じゃあ、こんな世界に迷い込んだオレはどこに逃げればいいんだ？

ベッドで目が覚めてから変わり過ぎた世界、変化はオレの対応を待ってくれない。

突如後ろで大きな爆発音が上がった。花火大会で特等席に座ったような大音量が振り向くよりもその場に伏せることを選択させる。

その場に伏せて首だけで後ろを窺ってみると、白い軽鎧を着て同色のマントを羽織ったピンク色の髪をした女の子が通りにある店に火の玉を投げ込んでいた。

「あははっ！ この店の宝石はみーんなアタシのもの！ トウースゴーレムのみんな、楽しく略奪だよ」

見た目はとても可愛いと思える少女が指で燃え盛る店を示すと、彼女の周囲にいた骨格標本みたいな物体が何体も動き店の中に入っていく。

たしかアレは召喚獣モンスター『トウースゴーレム』だと思う。名前の通り魔獣の歯をベースにして作られるゴーレムで、『エバーエーアデ』の世界ではレベルが高いプレイヤーが良く使っているのを見たことがある。

コイツも殺人変態の一人だ。店から飛び出て来た店員が火のついた体をゴロゴロと地面に転がしているところをゴーレムに殺させて悦んでいる。それもすごく無邪気に、楽しそうに。事情を知らなければ女の子の顔を見惚れてしまいそうになるぐらいだ。

「ん」 これでどのくらい殺したのかな？ あんまりカウントしてないや。まいつか、どうせシンちゃんも細かくカウントしてくれるだろうし、気にしない方向でテキトーに魔法を撃っていきますか」

実にお気楽極楽太平楽なことをのたまって道行く人に様々な魔法を浴びせかけていく女の子。火炎、雷撃、氷撃、呪殺、石化、毒殺

とバリエーション豊かに人々を虐殺していくのだ。

リアルな目でCGより鮮明な魔法をこの目で見ている。でも感動に浸る気にはなれない。

街の人だつてアホじゃない。武器を持って抵抗したり、かなりの速さで逃げを打つ人もいる。それらすべてがこの少女には無駄だ。

銃弾はなにやら透明で強固な魔法の壁で防がれ、接近してくる人はこれ幸いと魔法を叩きこむ。逃げる人にも誘導性が高い魔法の弾を撃ちこんで逃がさない。

オレはこの女の子の魔法が出す騒音に紛れ、這いつくばった姿勢のまま路地裏に入り込んだ。

殺戮の悦にでも浸っていたのか、女の子はすぐ近くにいるオレに気付くことはなく、無事に路地裏に入れた。

ここにきてオレの運は不幸から幸に移ったのか、路地裏には隠れるには手頃な金属製のゴミコンテナが置いてあった。ガタイが良くなった今のオレでも十分入るサイズだ。

蓋を開けてみるとゴミは少ないが、今までに溜まった臭いが鼻を刺激する。生ゴミの溜まった三角コーナーの臭いをキツクすればこうなる。どうする？ 本当に入るのか？

表の通りを窺って見ると、あの魔法乱射少女はまだまだ暴れている。いつ見つかるか分かったものじゃない。決断は早かった。

手早くコンテナに足をつ込み、体を入れて蓋を閉める。視界は真っ暗、鼻を刺激するゴミの臭気、触れるのは金属のゴミコンテナの内壁。これでは周囲が静かになるまで隠れ続けていようと心に決めた。

そして現在に至ってしまうまでに数時間、何を考える事もなくゴミコンテナに籠っていた。

時折近くで大爆発が起こり、建物が崩れて瓦礫がコンテナに降り

注いで潰されるかと思ったりと閉じこもるだけでも精神をすり減らす時間が過ぎていく。

ほどなく周囲が静かに、少なくとも身近に危険を感じる音が聞こえなくなってからコンテナから外に出た。

街の風景は一変していた。石造りの建物は軒並み破壊されて、レンガで舗装された道には大穴があいて、道端に置かれた車は焼け焦げて真っ黒、地下の水道管が破裂したのか水が噴き出ている。戦争映画に出てくる爆撃を受けた街の風景があった。

これだけの範囲の破壊行為、あの魔法乱射少女一人でやれる所業ではないと思う。他にも何人ものタガが外れた連中がいなければ出来ない真似だろう。

ゲーム『エバーエーアデ』にあるような壮麗さも甘さもない、どこまでも泥臭くてシビアな『もう一つの現実』が目の前にあった。

そう感じると、今更のようにコcottさんとタカを失ったのだと頭が理解して、遅れて気持ちに納得した。そうだ、オレはあの二人を見捨てたんだ。

泣いてしまうのは簡単だけれど自分自身が許さない。それは酷く侮辱的行為のように感じられたからだ。

「オレ、これからどうしよう……」

泣くのも許されず、行くあてもなくなり、やることもなくなった。オレの中身はからっぽになってしまった。もう座り込んでいた奴らの事は言えない。

行くあてもないくせにオレの足は廃墟になりかけているジアトーの街をさまよい始めていた。

2話 混乱（後書き）

連続で2話目を投稿させて頂きました。
月に2話ぐらいのペースで投稿していこうと思います。
次は7月を予定しております。
では

7月29日 改訂

3話 夜闇（前書き）

- ・ 暴力的描写があります
- ・ 地雷要素などが変わらず埋設されています
- ・ 用法、用量を守り正しく読みましょう

3話 夜闇

広い屋内を利用して、三〇メートルの距離をとりライフルを立った姿勢で構える。

肩、腕、頬でしっかり保持してスコープの下にあるアイアンサイトでマンシルエットに狙いをつけ、力まず滑らかに引き金を絞る。オリジナルと同じ7・62ミリ×51ライフル弾が爆ぜ、屋内では眩しく感じるほどの発射炎を銃口から出して標的に弾丸が突き刺さる。反動とか色々気になる部分はあるが、今は委細構わず続けて四発撃ち込む。

五発の弾を撃ち込み、狙った中心からやや左に弾着が集中しているのを確認してアイアンサイトの調整を行う。スコープは距離四〇〇で零点規正を終えているため、これが終われば一段落つける。

調整を終えてもう五発。今度は満足できる集弾率だ。本職の狙撃手ならばもっと繊細な調整を行うのだろうが、急場だとこんなものだろう。

一息ついたところで、耳を保護するために耳穴に詰めた空薬莖を引っっこ抜いて薬莖入れに放り込んだ。

手持ちの銃器の調整と修正はこれで終わった。

初めて使う銃器には照準をつけるためのサイトを調整する作業がある。使う人それぞれの体格、癖、利き目などで照準のつけ方が異なるのが主な理由だからで、カスタムメイドでもなければ必ずやっておきたい事だ。とつさの時に弾が外れました、では笑うに笑えない。

次に意識を周辺の空間に向ける。ジンに教わった事を思い出し、

目に見えないスイッチの感触を確かめ、それ切る感覚で自分の拠点にかかっていた遮音結界を解いた。感触でいったらパソコンでプログラムを終了させる感じた。

「これで、解けたのか？」

「ああ。耳をすませてみるといい、外の音が聞こえるはずだ」
「——確かに」

ジンに言われ耳を澄ませれば、外で吹く風の音に枯れ草が地面を擦って舞う音、ほど近いジアトーの街からの音が耳に入ってくる。

昼間の騒々しさはもう聞こえなくなり、今度は逆に廃墟のように静まりかえったジアトーの街。時折思い出したように銃声や爆発音、紫電が弾けるような音が聞こえて魂切る声がそれに続く。

嫌な音が耳に入る。『魔法』を使っているという驚きよりもそちらの方が気になり、顔を顰めてしまう。

あれから数時間が経過している。自分以外の『エバー・エアデ』のプレイヤー達が暴走している様子を見て取り、しばらくは安全なこの拠点に籠もる事を決めた。街外れで人の注目を集めにくい廃墟を拠点としたゲーム時代の決断を今は心底良かったと思っている。もちろんただ引き籠もるだけではなく、自分自身の能力を確認することもこの数時間に充てていた。

最初に実感したようにこの身体、『ルナ・ルクス』としての身体能力は凄まじい。

腕力、脚力、腹筋、背筋と基本的な筋肉トレーニングをしてみてもその力を計ってみたのだが、計りきれなかった。腹筋や、腕立て、スクワットと一〇〇回以上休まずやっても疲労感を覚えない。単調な運動に嫌気がさしてやめてしまったが、それまでに各三〇〇回ぐらいは回数を重ねて疲労を感じない事からして持久力も常識の外な

んだろっ。

垂直跳びをやってみると、危うく天井にぶつかりそうになって鉄骨の梁を掴むことで難を逃れるなんて事もあった。元が廃工場なだけあって天井は高く、一〇メートルはあった天井にだ。床にトランポリンでも仕込まれているのかと思った。

さっきまで調整で撃っていた銃器だって重量をほとんど感じないし、反動だってもの凄く軽い。そのお陰かいつもよりも弾の集まりがよかった。

何よりの怪異で、凄まじいのは『魔法』の存在だ。

数々の創作物に出てくる『魔法』というもの。一般的に呪文をムニヤムニヤ唱えて杖から炎の玉を出したりするステレオタイプなイメージが強いが、ゲーム時代ではメニュー画面から目的の魔法を選んで決定したり、戦闘時ではショートカット登録したものをボタン一つで出していた。

それが今はどうなっているかと思い、試してみた。メニュー画面やショートカット登録というものはない。代わりにどういう魔法を使いたいか頭で思い浮かべると図形と数式で描かれた術式というべきものが脳裏に浮かび、さらに強く願うと意図した場所に魔法が発現する。

その際にわずかだが体から何かが抜けていく感触があったのはマジックポイントが消費されたということなんだろっ。『ルナ』が習得していない魔法に関してはそもそも脳裏に浮かばないように出来ている。

『ルナ』というキャラクターを自分は魔法使い《マジックユーザー》としてあまり育てておらず、魔法は戦闘を補助することを目的としたサポート系とトラップ系を中心に習得したもので、使うことが出来る魔法も本職の人に比べると地味なものが多い。それでも魔法という今までにないものを扱う感覚は新鮮だった。

こうして小休止を挟んで数時間、窓の外が暗くなっていくまで自分の能力を把握することに努めたわけだが、分かれば分かるほどに非常識で超常的な力を持ってしまったと思ひ知らされる。

この力を他のプレイヤー達も持っていることはまず間違いない事で、ならば街を見たときのあいつた暴走もなるほど頷ける。超人願望が思わぬ形で満たされて制止するべき組織や人物がいなければああいう具合にハジけてしまうのだろう。ただ、頷けるだけで同調などしたくはないが。

それに驚きはまだ終わらない。

「感覚が広がっている。外は時間からして暗くなるはずなのに明かりなしで平気だし、音も色々と拾える。夜が近づくほど鋭くなっていく感じがする。これが」

「そうだ、主の月詠人としての感覚だ。今夜の月相は三日月だがそれでも主ならかなりの力を感じるはずだ」

今体で感じている事もジンは的確に察して説明してくれる。

ゲーム時代では、キャラクターメイキングで選べる種族の一つに月詠人というのがある。俗っぽく言えば吸血鬼のことだ。

人間のように平均的なパラメーター成長を見せる万能タイプの種族であり、人間よりもパラメーターの伸びが高く設定されて、その上で月相、月の満ち欠けで能力の上昇補正がかかるという特性を持っている強力な種族の一つだ。

こんな強力なキャラであれば当然短所があるというもので、太陽が出ている間は逆にパラメーターにマイナス補正がかかるようになっている。夜限定の強キャラということで、少々使い勝手が悪いのがゲーム上での月詠人の評判だった。

自分の場合はそのマイナス面は高レベルパラメーターと装備である程度補える欠点と割り切って、『ルナ』を使い続けてきた。

それが自分の体になるところも実感があるものか、とそう思う。

昼間とは全然違う圧倒的開放感と全能感が総身にみなぎる。今まで分厚く身動きの取れない拘束服を着ていたものが太陽が西の海に沈むと同時に解き放たれた、などという例えがこの感触に一番近い。昼の内にやった身体測定もどきであるような結果を叩き出したのだ、今やればどんな恐ろしい記録が出来るのやら。

自分は目を覚ませば女の子になっていたどころか、人間すら辞めていたのだ。

空薬莢の始末、的の片づけといった射撃の後片付けをそこそこに終わらせると今度はお腹から「くう」などと音が漏れてきた。吸血鬼でもお腹は空くらいしい。

「空腹か主」

「うん、そうみたいだ。ずっと気を張っていたからかな、今になるまで気付かなかった」

「食料ならそれなりに備蓄がある。シンクの横の床下が食料庫になっている。適当なものでも出して腹を満たせばいい。——ついでに私の分もあるとなお嬉しい」

少し意外なセリフを耳にして、ジンの顔をマジマジと見てみると少しバツが悪そうに目を逸らした。あ、彼もお腹が減っていると。

「悪いね、今まで気を遣ってくれたんだ」

「別段大して気に病むものではない。私が主を気にかけるのは使い魔として当然だからな」

「そうか、だったら使い魔の体調に気を配るのも主の役目だな。食事はすぐ用意するよ」

「……むむ」

黙り込んでソファで丸まった黒猫を横目に、教えられた場所を調べて床板を外してみると床下貯蔵庫となっており、缶詰や瓶詰め、ベーコンに燻製食品、ドライフルーツといった日持ちする食品を発見した。レトルト食品がなく、缶詰や瓶詰めのパッケージが古臭いデザインに感じる。新鮮な野菜や果物が欲しいところだけど卵があるだけでもありがたい。

ふと思う。ここまで他人と面と向かって会話するのは久しぶりだな、と。

最近で一番人と話したのは、アメリカでの射撃トレーニングの時にインストラクターと英語で交わした事務的なやり取りぐらいか。

いつからか人と関わる事が酷く億劫に感じられるようになってきて、それでも人との関わりを捨てきれずネットゲームに夢中になり、やっぱりそれでも他者との関わりが嫌でチームには入らず一匹狼を気取る。我ながらなんて面倒な性分なのだろうかと思ってしまう。

今だってここまでマトモに会話が出来ているのも、ジンが見た目黒猫だからだ。喋る猫という非現実性がこの口を軽くしている。これが普通に人と向かい合って言葉を交わすというのなら、自分の口数は今の半分ほどに落ちることが簡単に想像できてしまう。

ジアターの街に行かないのも危険を避けるためだが、大勢の人の中にいたくないという感情も数割混ざり込んでいるからだ。

今後の予定はすでに大まかにはある。もう少し街が沈静化するのを待ってから街を離れるつもりだ。ジンも街を離れることは賛成しているし、数日中にはどこかもっと腰を落ち着ける所に移動していることだろう。移動のツールアイテムもあるしこの場所でも一人暮らしだ、荷物は多くない。

ゲーム時代ではこの廃工場を拠点として二年程過ごしている。今の自分とはかく、ジンには名残惜しい気持ちがあるのだろうか？ 本日の夕食にするコンビーフの缶を取り出しつつそんなことを思

った。

――。

「っ！？ なに」

それなりに腹を満たした夕食の後、後片付けも終わりシンク近くにある囲炉裏に似たところで炭火を焚いて外の寒さをしのいでいたら外から異質な音が聞こえてきた。

傍らに置いたライフルを手元に引き寄せ、立ち上がる。ジンもすでにこの音は聞こえているのか、自分が突然立ち上がったことに驚きはしていない。

「近いな。それにこちらに来る」

「うん。この音はエンジン音、空冷の四サイクル四気筒……オートバイか。それが二台」

「妙に詳しいな主」

「趣味の一つだったからね」

ジンが妙な感心の仕方をしているが、趣味でバイクをいじっていればエンジン音はそれなりに聞き分けられる。その上に今のこの体の聴覚はかなり良い。確定情報と違っていいだろう。

それにしても、と些細なことから気付いた事があって傍らの黒猫を見やる。

この黒猫ジンは自身の主の異変を察しているのは今更確認をするまでもないことだ。異変の詳細も知っている風で、でなければこちらでの常識を丁寧に教えてくれることはないだろう。

それでも自分の趣味とかといった詳細なプロフィールまでは彼の知るところではないようだ。

『ルナ』と今の自分との主従関係といったことで突っ込んだことを聞くのはもう少し事態が安定してからだと自分の中で決めている。狡い考えだが今は味方が欲しい。形だけでも従ってくれるなら今はよしとしている。

「主、どうした？」

「うっん、何でも。少し様子を見てくる、オートバイの割に妙に遅い感じがして気になるから。ジンは後詰めを」

「承知した」

訝るジンの視線に誤魔化しで応えて、外へ向かう。ちよつと見のつもりがガン見になっていたようだ。

それに気になるのは嘘ではない。最初に聞こえた時と今聞こえる時とで距離を考えると、かなりのノロノロ運転でこちらに向かっている。ギアを一速か二速にしてトロトロと走らせている感じが耳に入ってくる。そんな走らせ方をして何をしているのだろうか。

扉の前でライフルのボルトハンドルを握り前後に操作。金属の擦れるどこか澄んだ音とともに弾倉から薬室へカートリッジが装填される。

これで鉄の塊だったものが人を殺傷する兵器に変わった。

今までに無く緊張する。手に汗をかいてグローブが湿り始めているのが分かる。木製のストックを握ると汗が中に染み込んでいくような錯覚。心臓の鼓動が速くなり、こめかみ辺りにも血流が脈打っている。

今両手にもっている武器で人を殺すことがある。獵でやってきた鹿や熊相手とは違う殺人への後ろめたさが体を緊張させている。

いや、何も殺すとは限らないじゃないか、落ち着け。そう思い直

して扉を静かに開けた。

昼の暑さは嘘の様に消えて、今は逆に刺すような肌寒さが体を包んでいた。吐く息が白い。

砂漠の気候は昼と夜での激しい温度差が特徴的だ。遮るものや保温するものがないため、太陽が出ればあつという間に熱くなり、沈めばあつという間に冷え込んでしまう。ジアトー周辺の気候もその例に漏れず、夜の肌寒さを炭火を焚いてしのいでいたのだ。

音の聞こえる方向はやはり街の方角。身を低くして素早くそちらへ移動した。昼に街を見渡した場所に着いてみれば、すぐにバイクは見つかる。

明かりがほとんど見えない墓標のような——いや、今は正しく墓標か——ジアトーの街で、バイクが出しているヘッドライトの明かりはとても目立つ。二台のバイクが出している二本の明かりに照らし出されている人影もすぐに見分けがついた。

背の高い、ガッシリした体格の男性がヨタヨタと頼りない足取りで街外れ、つまりこちらに来ようとしている。それをバイクに乗った二人が阻んでいる様子だが、その二人は明らかに遊び感覚で男性をいたぶっている。

金属パイプのようなもので叩き、バイクに跨ったまま蹴りを放ち、グルグルと男性の周りを回って威圧する。やっている事は暴走族に近い。

なるほど、妙に遅い気がしたのは男性の歩調に合わせているからか。

こちらの所在に気が付いている様子はない。男性がこちらに逃げたのを追っているだけなんだろう。

なら自分はどうするべきかと少し考える。

彼らとの距離は直線で一五〇メートル程。夜闇で身を屈めている姿勢をとっている事もあって、誰もこちらの存在を感知していない。このまま何もしなければライダー二人組が男性をそれなりにいたぶって何処となりへ連行していくのだろう。あるいはこの場でリンチして殺してしまう。

自分は男性を助けるべきか、それとも自己の保身のために見殺しにするべきなのか？ 二つの考えで迷っていたら、ライダー二人の方が早々に結論を出してしまった。

金属パイプをその場に捨てて、持ち替えるように腰から拳銃を取り出して――撃った。

バイクのエンジン音とは違う短く鋭い銃声が耳に聞こえた時には、男性が地面に転がりのたうっていた。肩を撃たれたらしく手で肩を押えて地面を転がり、獣のような叫び声を出している。

一方でライダー二人は「あつれー、頭狙ったのに当たんねー」「下手くそ」などと言いつつ笑い合っている。

バイクで走りながらの射撃は専門の軍人でも曲芸の一種だ。大抵の場合は停まるか降りるかしてから射撃する。それに弾が狙いから外れたのは男性の運の良さもあるのだろう。

それにしても、あの二人は正気ではない。いや、街の惨状を見た時にそんなことは分かっていたはずだ。あんな事はまともな人では出来ない。

それを近距離で見せつけられるところも気分が悪くなるのか。今度は肉眼でそれを見ってしまうのか。

助ける事は出来る。昼とは違い目撃者は限られるために自分の存在を知られる機会はない。

屈んだ姿勢から地面にあぐらをかくように座ってライフルを構え、座り撃ちの姿勢をとる。

夜になると異常なぐらいに視界が開けて一キロ先でさえもスコ-

プは必要なくなる。つくづく恐ろしい視力だ。キャップは外さずに下のアイアンサイトでライダー二人に照準をつける。さっそくサイトの調整をした成果がでた訳だ。

バイクの速度は自転車ほどでリードは難しくない。自分の腕なら必中の確信がある。

けれど……いや、今は迷いは駄目なんだ。

あの二人が今も男性に拳銃を向けて撃ちそうじゃないか。立っていた時と違って、地面に転がる今度は当たりやすいだろう。迷うのも悩むのも後回しだ。

軽く息を吸い、吐き、止める。静かに真っ直ぐ引き金を引いた。

手元で火薬が爆ぜる自分とってお馴染みの音、肩を蹴りつける反動は想像以上に軽い。ボルトが燃焼ガスで前後して薬莢を吐き出して次弾をくわえ込む。この時にすでにライダー二人の内の一人が頭から血を吹き出している。狙った部位は頭部、それも脳幹。

次の一人も同じ場所を狙い、撃つ。鼻に命中した弾丸が後頭部に抜けて血の花を咲かせたのが見える。二人とも痛みを感じる間もない即死のはずだ。二発目の空薬莢が地面に転がる時になって、死体になった二つの体はバイクと一緒に崩れ落ちた。

「……はああ」

やってしまった。人助けとはいえ、二人の人間を殺した。我知らず、ため息が出ていた。

「主」

いつの間にか後詰めを任せたジンが傍にいる。その視線と声は例の「しっかりしろ」という意味を持っていた。そうだ、まだ完全に

終わってはいない。推理小説の犯人だって一番知恵を絞るのは死体の始末だ。事を終えた後の方がむしろメインと考えていいかもしれない。

ジンの声に気を張り直して、周囲へ目を向ける。街の方角から人がやって来る気配はない。今この瞬間でも暴走したプレイヤー達が街のどこかで悪事を働いていることを考えれば銃声の一つや二つ、注意を引くことはない。皮肉な事にこれは好都合なことだ。

倒れている男性に目を向ける。一〇〇メートル以上離れた暗闇でも今なら相手の様子を確認出来る。

彼は肩に被弾した他に各所に打撃を受けている。そのダメージが表面化したのか、今はぐったりと気絶している。

「ジン、ついてきて。死体の始末とあの男を運ぶから」
「承知」

ライフルに安全装置を掛けて立ち上がり、二体の死体と一人の男性の場所へ向かう。

元から口数が少ない自分とジンだが、この間の沈黙は酷く重いものに感じられた。

もついい加減認めよう。今向き合っているこれは『エバーエアーデ』というタイトルのゲームなどではない。紛れもないもう一つの現実なのだ。お腹も空くし、眠くなるし、痛みを感じるし、殺されれば今見えるライダー二人のように死体になる。フワフワした気持ちじゃ生きていけない。

心のどこかで認めたがつていない気持ちにケリをつけよう。生きるためにこれからも誰かを殺す。そう割り切ろう。

「ジン」

「なんだ？」

「生きるのも大変だね」

「当然だ」

生き抜いてやる、ジンに言った気持ちに嘘はない。けれどその困難さが少し自分を弱気にさせていた。

見慣れない場所で目覚めるのはこれで二度目で、二日連続だった。目が覚めればあれは全部夢の出来事で何時ものように親に飯を作ってもらい、いつもの様に登校して隆士とだべりながら「昨日、なんかトンデモない夢を見ちまった」などと笑い飛ばせるものだと願っていた。

それが叶わない願いなんだなと、こうして目が覚めてみれば分かっていた。

オレの体はいまだ『マサヨシ』のゴリマッチョの体で、体のあちこちにアザとかが見えるのは……あんまり覚えていないけど、タチの悪い連中にボコボコにされたからだと思う。

それに、ゴミのコンテナに隠れていたから結構クサイ事になっていたはずだけど今は臭わない。

ああ、そうだ。タカやコcottさんが目の前で気のふれたようなキチ。イに殺されて、必死に逃げて逃げた先でもキチ。イはいて街中が滅茶苦茶になっていく。隠れてやり過ごし、後はフラフラと街を歩いていて、何か昔の暴走族みたいな奴に絡まれて、逃げて、叩かれて――あとはどうなったんだっけ？

あれは辺りがだいぶ暗くなった時のことだったと思う。今は明るい。窓から差し込む太陽の光がしっかりと見える。窓に目がいったついでに周囲の様子も見渡してみる。

まるで廃業した町工場だった。高い天井に鉄骨の柱と梁、床はコ

ンクリートの打ちっぱなし。そこに家財道具が詰め込まれて無理に居住空間に仕立てられている。オレが横になっていたのもその詰め込まれた家具一つだろうソファード。

他に目立つ家具は流し場らしいシンクにテーブル、囲炉裏らしいものに椅子と本棚、あとはすぐ傍にいるやたらとデカイ黒ヒヨウ？ヒヨウって家具じゃないよな。

「目が覚めたようだな。どこか痛む場所はあるか？」

「あー……あちこち痛むけど、とりわけ痛い場所とかはないな」

「それは重畳。せつかく主が助けたというのにポツクリ死んでしまつては意味がないからな、色々と」

何か黒ヒヨウがナチュラルに話しかけて来たので、こつちもナチュラルに返してしまつたよ。しかもやけにダンディな声を出しやがる。

ここで今更に驚くのも悔しいので、このまま普通に話を続けることにした。

「で、だけど。月並みな聞き方で悪いんだが、ここはどこだ？」

「ふむ、その聞き方をするという事はこの場所を目指したのも単なる偶然か。いやなに、ここは貴様があのバカ共に追い立てられた先にある街外れの一軒家だ。見ての通り元は廃工場だったのだが、今は主が住みかとしている」

うん、大体分かった。あの暴走族もどきの二人に金属パイプで叩かれながら逃げ回って、街外れに来た記憶はうつすらとだけである。そう言えば、気になるワードがさつきから出ているな。

「主？」

「我が造物主で、仕えるべき主人だ。そら、そこにいる」

黒ヒヨウが視線で示した先、テーブルとセットになっている椅子に小柄な人影はあった。こちらに背を向けているが、体格からすると女の子っぽいのは分かる。

起き上がって、顔を見ようとすると急に黒ヒヨウが立ち上がって「グルル」などと唸りだした。

「不用意に近付くなよ。緊急時だったから助けたものの、貴様とて主を害する輩かもしれんだ。指一本でも触れてみる、その無駄にデカイ図体をミンチにしてやる」

「うげ」

動物園でライオンとか猛獣を安心して見ていられるのって、頑丈な檻があるからだだよ。至近距離で何も隔てるものがない状態で猛獣と一緒に、なんて恐怖体験なんだよ。しかもこっちは武器ひとつないステゴロだ。武器なしでモンスターと戦闘なんて冗談みたいな状態、これも今更のように思い知らされる怖さだ。

オレが下手な怪談より背筋にゾクゾクくる体験している最中なのにその『主』という人は何も言わずに背を向けて座ったまま。

待てよ、妙に規則正しく聞こえる息づかいに、緩やかに上下する肩。もしかして寝てる？

「主はついさっきまで貴様のケガを見ていた。本来のベッドはそのソファーだ」

「……起きるよオレ」

「そうしたまえ」

追い立てられたオレは掛けられた毛布を丁寧に取って、ソファーから完全に立ち退いた。

立ち上がったことで視界が高くなり、周囲の様子も良く見えるよ

うになった。改めてみてもこの場所はやはり廃工場の印象しかない。こんな場所を住居にするとはこの黒ヒヨウの『主』も変わり者なんだなと思ってしまう。

見れば黒ヒヨウが自分のご主人さまに近づき、体からツタみたいなのを生やした！？ 触手！？

そんなアホな事に衝撃を受けるこっちにお構いなしで、黒ヒヨウは生やした黒い触手らしいもので丁寧に『主』の体を抱き上げた。ああ、なるほど腕の代わりなんだなアレって。

それと、ここに到ってようやくこの黒ヒヨウの正体に気付いた。コイツ使い魔だ。ゲームでは高レベルのプレイヤーが戦闘の補助とかアイテム製作の手伝い、素材調達とかをやらせてたスキルで製作できるNPC。チームではリーダーのサイトーさんを始め上位の何人がぐらいしか使い魔を所有していない。

そうなれば、この抱き上げられている『主』という子もプレイヤーの一人か。

「ん……あ、ジン」

「ぬ、起こしてしまったな。すまない」

「いや、いい。下ろして、起きているんでしょ」

「ああ、すぐそこにいる」

「分かった、下ろして」

どうやら黒ヒヨウが抱き上げた動きで目が覚めたようだ。聞こえる声は幼い、それでいてハスキーがかつてどこやら色気がある音色。触手に支えられてしっかりと立ち上がるその娘の背丈は今のオレの背よりもはるかに低い。一五、六歳に見える女の子、黒いワンピースに黒のニーソ、髪も黒い。見詰めてくる瞳だけが金色をして、やたらと印象に残る。

「……」
「……」

見つめ合ったままオレも相手も動かない。オレは何をどう言っただいのか分からないし、向こうは何か困ったような顔をしだした。ヤベ、気まずい。

「ああと！ その！ 助けてくれてありがとう！ オレの名前はマサヨシっていうんだ！ あんたの名前は！？」

耐えがたい沈黙から思わず声を張り上げてしまった。

いきなりの大声に驚いた女の子は金色の目を大きく開いて身を反らしている。その隣ではあの黒ヒヨウが今にも飛びかかって来そうな感じ。マズイ、さらに気まずい。しかも黒ヒヨウがヤバイし。

「うん、マサヨシ君か。私はルナ、ルナ・ルクス。大声で驚いたけど善良そうな人で良かったよ」

ぎこちなく笑顔の形に顔を動かして見上げるルナさん。何か落ちて着いた雰囲気を持っているものでオレの中でいきなり『さん』付けが決定された。

多分、コソットさんと同じで中の人が年上だったりするのだろう。目付きが悪いけれど気にならない位のキレイな女の子だ。今のオレ達の肉体は元の特徴も反映されるからこの人も元から結構な美人なんだろうな……

ルナさんの顔を見てつらつらと湧き出る思考。動きを止めたオレに向こうから手が伸びて、はたと気付けばお互い息がかかる至近に距離が縮まっていた。

「うわえっ！？ る、ルナさん、一体どうしたんすか」

「ケガ。君はあちこち殴られている上に撃たれたんだ。手当てはしたけど様子は見ておきたい」

「撃たれた！？」

女の子が至近距離にいることに驚けばいいのか、撃たれたことに驚けばいいのかも分からない。ルナさんは驚くこっちにお構いなしでオレのシャツをめくり上げてアザに触れてくる。

見下ろせばそこに黒い艶やかな髪、そこからふわりと漂う匂いは夜の空気みたいだ。ゴミの中にいたオレとは大違いで良い匂いだ。

だからって鼻の下は伸ばせない。あの黒ヒョウ、もの凄く睨みつけてくる。下手にお触りしようものならアイツの朝食にされそうだ。ルナさんはルナさんで、恥ずかしいとか頓着とかはないようで医者みたいな手つきでオレのケガの様子を見ている。シャツも完全にまくり上げられて、ほとんど上半身裸だ。経験とかはないのだがこういうときの女の子ってもう少し戸惑うとかの反応があるような気がするんだけどな。

「九ミリパラベラムのホローポイント弾が当たった割には傷が浅く済んだな。やはり魔法は尋常ではない」

肩に出来た引き攣れた肉の盛り上がり手に手を当てるルナさん。すると彼女の掌がぼうと光り、肩の傷らしい部分が目に見えて小さくなっていく。

これはゲームでの回復呪紋でいいのか？ ゲーム時代のオレは魔法のスキルはほとんど習得せずにいたものだから詳しくない。実体験で理解する魔法というものに体は固まる。動いちゃダメだよな。

「これでいいか。傷は問題ないようだし、弾も取り出してある。よければあげる」

そつけない口調でそんなことを言って、オレの手にキノコみたいな形でつぶれた金属片を渡してきた。これが弾丸？　なんか思っていたのと違う。てっきりドングリの形をしたものと思っていた。

事が済んだらさつさとオレの体を離れてシンクのある方向に足を向けるルナさん。漆黒のワンピースの裾を翻す様子はリアルなことなのに現実味が薄い。むしろ漫画的であり、つい最近読んだコミックの登場人物みたいだ。

オレだけがドギマギしているのが酷く不公平な気になってくる。こっちの気を知っているとは思えない様子で台所につくと、こちらを振り返ってまたぎこちない笑みを向けてきた。

「マサヨシ君、朝食にしないか？　保存食中心のメニューで申し訳ないけど、腹は膨れる」

缶詰を手にした彼女の言葉で昨日からロクなものを食べていなかった事を思い出した。人間一食二食抜いても平気って本当だったんだ。空腹なんか感じず、お腹に違和感があるだけ。空腹を通り越して腹痛になりかけている。食べた方がいいよな。

「ゴチになります」

クラッカーを主食にして、インスタントの袋ラーメンがスープ代わり、缶詰のコンビーフと豆で調理した煮物料理がメインディッシュというのがルナさんから出された朝食だった。なんかミリメシな内容だ。別に美味しいから構わないけど、早くも米が恋しくなってきた。

こんなもの『エバーエーアデ』の世界ではなかった代物だ。考え

てみれば当たり前、アレはゲームの世界で娯楽。こっちは嫌になるぐらいに現実の世界だ。

メシひとつでもオレが置かれている“今”を理解させられる。

朝食はルナさんとテーブルを挟んで食べた。

食事中の彼女は終始言葉少なく、食器のすれる音が大きく聞こえるほどもくもくと食べる人だ。

ついでに例の黒ヒョウが黒猫にダウンサイズして食卓に参加していた。聞けば、戦闘体型と通常体型とで使い分けができる伸縮自在の体をしているのだとか。

食事中に色々と話してみたが、ルナさんは無口な人のようである必要以外はあまり喋りたがらない。こっちから話しかければきちんと答えるけれど話を膨らまそうという気はないみたいで、結果としてオレがほとんど一方的に話しているような形になっていた。

それでもルナさんの事情は理解できた。彼女は運が良く、そして慎重な人のようだ。

「それで、外に出ずに引き籠もって能力と装備の確認をしていたと」

「ああ」

「そして、オレが襲われているのを見て――」

「あの二人を射殺したよ」

「……」

女の子の口から出る台詞とは思えないけど、彼女の太ももの拳銃やテーブルに立て掛けられたライフルを見ると冗談ではないと理解させられる。

「遺体は埋めてオートバイはこっちに持ってきている」

指差す方向、部屋の隅に目をやれば二台のバイクが並んで置いて

ある。暗い時は分からなかったが、こうして見てみると型がかなり古臭い。戦争映画に出てくるバイクみたいだ。そのシート周辺は黒っぽいペイントがされているけど、あれは血が固まったものらしい。こんな娘がやったのか。などと思い、改めてテーブルで対面に座るルナさんに目を向けた。

高校生をやっているオレよりも落ち着いた物腰やら雰囲気が見えて伝わってくる。大学生、いや社会人なのかもしれない。だとすれば女の子とか少女とかの言い方は正しくないのだろうけど、見た目は元のオレよりも下にしか見えない。『マサヨシ』としての体をもっている今だにより顕著に体格差がハッキリしている。ココットさんみたいに明るいキャラ性は彼女にはないから余計に対応に困ってしまう。

何も言えずにいるオレが見ている間に食事が終わったルナさんは、テーブルを立てて使い終わった食器をシンクに入れ、そしてオレに背中を向けたまま話を続けた。

「怖がるのも軽蔑するのも構わない。それを食べ終わったら安全な場所を見繕って街を出ると良い。シアトーの街はここから見る限りだけど、もうダメだろうし」

「や、いやいや！ ルナさんの事は怖がってませんし軽蔑もしてませんっすよ、その、言うの遅れてしまいましたけど助けてくれてありがとうございます」

テーブルから立ち上がって、ここまで言うのが遅れてしまった言葉を思い出して頭を下げる。

彼女が振り向いてこちらを見ている気配を感じる。

そうだった。こんな簡単な言葉さえ忘れていたんだオレは。タ力が訳分からないうちに死んでしまいココットさんも死んで、多分銀月同盟のメンバーも。体も心も追い詰められたオレがいざ誰かに助

けられたとなるとどう振る舞ったらいいいのか分からない。

大声を出してしまったたり、何やかやと一方的に話しかけてしまったりだ。

それでも怒るといったこともなく、こんなことまで言っている。確かに人を殺してしまったというのは大変な事なんだけど、この人が動いてくれないければオレは死んでいた。軽蔑なんて出来るわけもない。

「え……と。どういたしまして？」

「主、この場面でその言葉は少し違うと思うのだが」

「自分でもそう思ったんだけど他に適当な言葉が出てこなかった。マサヨシ君頭上げて、私はそんなに礼を言われるような事はしていない」

「でも、助けてもらったのはホントっすから」

「ああ、そうだけど……」

顔を上げてみれば困った顔をするルナさん。小声で「困ったな」なんて言う言葉も耳に入る。

その表情で彼女の大人びている雰囲気が一気に飛んで、見た目通りの年下の女子の様に見える。今感じたことだけど、ルナさんって対人スキルがとて低いんじゃないだろうか。ノリが悪いようにも見えるし、会話がぶつ切りだ。

ネトゲしている人の数パーセントは引き籠もりか廃人って人がいると聞くが、もしかしたらこの人もその一人だったのかも。だからリアルでの会話に慣れていないとかが想像できてしまう。

なら、オレが頑張って会話を引っ張った方がいいのか？ 人の話を聞かないって人じゃないし、反応だって返してくれる。

「とにかく、礼は言わせて下さい」

「うん。分かった」

「え……と」
「……」

こんな状態で会話を続けるのはどんな無理ゲーだろうか。引つ張れそうにない会話はまた途切れてしまった。

話が途切れたところでルナさんはシンクに出した食器を洗いだし、黒猫はソファで丸まりだした。オレの周辺にはいなかったタイプの人だな。どう話をしていいのかわからないや。

こちらがまごまごしていると、食器を洗い終わったルナさんはこちらに顔を向けて口を開いた。

「それで、これからどうするか考えているかい」

「え、これから？」

「ああ、これから」

黒猫の隣に座り、オレを見上げる彼女に視線を合わせるためこっちも椅子を引き寄せて座る。ぎしと椅子が軋んだ。

これからか、聞き方は唐突だが言われるまで考えてもなかった事だ。

目が覚めて見ればゲームの世界で、体も自分のキャラ、街の様子はあつという間に戦場、深く考える暇なんてここまで一度もなかった。けれどこうして機会が与えられてみると、今すぐにでもやつておかなければいけない事が次々と頭に浮かんでくる。

オレの口は浮かんでくる考えのままに開いていく。

「同じチームの仲間の顔が見たいですね。それに身を守るものが欲しいです。街もあんな状態だからどうか他のところに行きたいところですね」

「でも君の話を実現するには一度あの街に戻る必要があるように思える」

「ですよね」

着の身着のままでここまで来てしまったオレ、あの無法地帯になった街では身を守るためにはどうしても武器が欲しいところだ。『マサヨシ』がゲーム時代に使っていたものなら気兼ねなく使えるだろうが、生憎と銀月同盟の拠点の自室に置きっぱなし。

同盟との連絡はテレパシーじみたチャットの力を使って安否を確かめられるかもしれないが、それよりも直接顔を合わせて話をしたい。拠点の状態も気がかりだ。

さらにはこんな街に長居はしたくなく、出て行くにも対応の準備が必要になると思う。ここがゲームではないなら食料や水、移動のための足が必要になるだろう。

総合してみると、ルナさんが言うように一度街に戻って物資を調達したりする必要がある気がする。

またあそこに戻るのかと思うと鬱になる。不思議と恐怖とか悲しみとかは湧かないが、気分がとてつもなく盛り下がってくるのだ。

下がったテンションを戻したく考え事をしていて落ちていた顔を上げてみると、ルナさんも何やら考え中だ。隣にいる黒猫を撫でながら彼女の金色の目は宙をさまよっている。撫でられている猫はノドなんか鳴らしていやがる。オレとの態度の差が激しいな。

それほど待つこともなく、ルナさんの目は現実に焦点を結んでオレを見る。

「よし、君が街に戻るなら武装を整えるまでの間は私が護衛につこう」

「え」

「なんだと」

割と凄いことを口にしてきたルナさん。黒猫の方は何か固まって

いるし、驚いているのか？

「主、あの惨状を見ただろう。街中にバカ共が蠢くのが今のジヤト
ーだ。早々に街を離れるのが正解だというのに何を好き好んでこの
デカ物に付き合う。やめておきたまえ」

さり気にオレをこき下ろして反対意見を飛ばす黒猫。

こいつにこき下ろされるのはム力つくが、オレもついてくるのは
どうかと思う。あの街で一部でも惨劇を見た立場から言わせて貰う
ならば、近づかないのが一番賢い。

オレの場合はそれでも銀月同盟の仲間のことは気になるし、実利
の部分でも『マサヨシ』の装備は手に入れておきたい。そこにルナ
さんを付き合わせるのは気が引ける。

なのに、彼女はさらりと主張する。

「ロクな装備もなく戻るのは自殺行為だ。なにより、一回助けてし
まったからには一区切りつくまで面倒を見なければいけない気がす
るのだけど、どうだろうか」

「主、犬猫の話みたく聞こえるのは気のせいかな？」

「ジンだって、せっかく助けた人が死んでしまうのは不義理すぎて
夢見が悪くならない？」

「ふむ……寝つきが悪くなる程度には気になるな」

「なら安眠のために一働きしてもらえないかな」

「ふう、もとより使い魔の身。主に苦言は呈しても背くことはな
いさ。デカ物、感謝するんだな」

主従であつさりと相談がまとまってしまい、最後は黒猫がオレに
向かって偉そうに言葉を放ってくれる。ルナさん、黒猫相手なら喋
るな。やっぱり使い魔だからか？

それよりなにより、オレの意見がまったく挟まれていない事は問

題ではないのだろうか？

「あの、オレの意見は？」

「おおまかな方針は任せるけど、来るなとかいう意見なら却下させてもらう。それと、街に入るなら夜がいいと思う」

「夜か、夜ね。分かった」

護衛としてついて来る話はもう決定と。そう言いたいのかルナさん。

でも何か、昨日で荒みだした気持ちが今は癒されているという気分になれる。

そうしてこんな妙な会話からオレとルナさん、オマケの黒猫でジアトーの街に戻る事が押し切られるように決定してしまったのだった。

ジアトーの街より北に一〇〇キロメートル。それぐらいの距離ですでに別の国に入った事になる。

アードラーライヒ帝国——ハイマート大陸の北の大部分を版図に収める北の雄、帝政の巨大国家だ。

そしてジアトーから一番手近にある帝国の街はヴィクトリア・ハーフェンという港町になる。人口五千にも満たない町は、町の住人よりも国境を警備する軍人の方が見かけやすい。

すぐ南にはジアトーの街が所属している国家デナリ首長国があり、そこからの犯罪者、亜人種の侵入と脱出を防ぐのがここに住んでいる軍人たちの仕事になるのだ。

ここ数日、この町の軍人達の任務に新しい項目が増えた。

この五千未満の街で唯一の宿、そこを警備せよというものだ。誰

が入り誰が出てきたかは口外無用、宿に近づく人間は追っ払え、ついでに任務が終わればこの事は墓穴まで持って行けという如何にも怪しさ溢れる内容だった。

それでもアードラー軍人であることを誇りに愚直に任務をこなすのが彼らだった。大方中央の偉いさんが酔狂でここまでやって来ているのだらう、その程度に詮索を留めて彼らは勤めを果たすことに邁進していった。

「一人一人の兵卒にいたるまでキチンと統制が行き届いている。素晴らしいですねこの国の軍は」

「ストライフ君といったかな」

「はい、家名はありませんので気軽に呼んでください」

「リー君からも先だつて聞いたが、ジアトーを手軽に占領できるようにすると」

「ええ」

ヴィクトリア・ハーフェン唯一の宿。その二階の角部屋で四人の男が顔を突き合わせていた。

最初に話をしていた二人の内一人は、昨日までジアトーの市庁舎を制圧していた金髪の男性ストライフ。彼は部屋の窓から下を見下ろし、警備任務に就く軍人達の動きを観察していた。

あれからストライフは精力的に動き回り、プレイヤー、非プレイヤーを問わず様々な人物と会談を持ち、この場所に非公式ながらも目的の人物と接触できるようになっていた。

ストライフと言葉を交わすもう一人、部屋の椅子に座る彼が目的の人物になる。

のりの利いた黒い軍服を身にまとう五〇代の男性。胸についた徽章、醸し出る威圧感からいかにも高級将校であることが分かる彼は、帝国の陸軍に所属する将官であった。

「少将、帝国が首長国の人種混在を苦々しく思っているのは分かります。その浄化のために戦争を仕掛けようとしているのも。リーは色々なところに顔が利くやつでしてね、あなた方が数日中でも仕掛けようとしているのは察知していました」

「ふん。我が帝国の諜報部は何をやっているんだか」

戦争を仕掛けようとしているのを一般人に悟られている。その事実に少将と呼ばれた男は機嫌悪そうに自分の後ろに控えている副官を見やった。その副官も同じ考えか、軽く頭を振って同意を示している。彼が見据えるのは窓際に立ったストライフの横に立つ赤毛の男性。そこらの庶民と変わりない服装をしている彼こそリーと呼ばれる男性で、両者の顔合わせに動いた人物である。

副官の男性が見据えているのに彼は目を閉じたまま真意が窺えない表情でたたずんでいる。

リーの無言の代わりのようにストライフが言葉を続ける。

「実際、あの街はもう無政府状態で混乱しております。ある程度は外と連絡はつくでしょうが、首長国が軍を動かすまでに時間はかかりかかるでしょう。なにせ要請を出す行政機関が丸ごと潰れてしまいましたから。街の住民の多少の抵抗はあるでしょう、しかし組織だった動きはもう出来ないようになっていきます」

「それで、軍がもたもたしている間にこちらが進出させて制圧してしまえ、と」

「ええ、占領統治など面倒事はこちらにまかせていただければ帝国支配の橋頭保が簡単に手に入ります」

「……ふむう」

人類至上主義を掲げるアードラーライヒ帝国は人間以外の種族を排斥することを国是として、人としての純血を保つことを第一義としている。

それがすぐ南のデナリ首長国と相容れない原因である。この国は様々な種族が混在して、人間にはない特殊な能力をもって貴重な労働力としている国であるからだ。

帝国の元首、皇帝は種族浄化を掲げ、大陸の純血化を進めている。分かりやすく言えば人間以外の虐殺である。国内での浄化はほぼ完了を見ており、次なる目標に首長国を見据えているのが今の帝国だった。

その戦争前夜といえる時期に非常に美味しい提案をストライフは持ってきたことになる。

労せずして首長国への足がかりが手に入る。街の支配権という餌をやっておけば、ストライフの配下が帝国軍のお世話をしてくれるそうだ。

「国境の警備隊も今は静かなものです。まさに据え膳ですが、少将は如何します？」

「乗せられている気分はあるが、いいだろう。一番槍は我らが取る」
「將軍、よろしいので？」

「ああ、裏はとつてあるのだろうか？　ならば連中が動き出す前にこちらがあつた街を抑える。やっている事はいつもの戦争と変わらんさ、今回は親切的な協力者がいるというだけだな」

「それはどういたしまして」

少将の皮肉げな言葉にもストライフはにこやかに言葉を返す。にこやかにもなる。彼の提案は受け入れられ彼の野望は一步前進したのだから。

この日のこの会談で一つの街の行く末が決定づけられた。そしてそれはこの世界に迷い込んだ多数のプレイヤー達にも言えることだった。

3話 夜闇（後書き）

1ヶ月に二話は自分には少し厳しかったデス。
次は8月に出します。
では

7月29日 改訂

4話 潜入（前書き）

- ・ 前話までと比べ短めです。
- ・ 用法用量を守り、正しく読みましょう。

4話 潜入

この世界に来てしまつて二日目の夜。荒野の空気は昨日と変わらず冷え込んでいた。

白い息は空に昇り、月にかかった後は溶けて消える。地上がとも暗いせいで半月にも満たないのに月明かりはやけに眩しく見える。見上げた顔にそつと手をかざした。

「月が明るい。街から見られてなければいいのだけど」

「そうっすね。でも、オレについて来て本当にいいんですか？」

「今更じゃないか、それ」

「……そうっすね」

ジアトーの街に戻るといふマサヨシ君の護衛役を自分は強引に買つて出ていた。昼の間に行動計画を簡単に立てて、食事と仮眠をとつて体調を整えて日没を待ち出発、徒歩でジアトーの市街地に向かつている。

自分達二人と一匹の出で立ちはずいぶん変わらない。

自分は最初に着替えた時のままのワンピースに皮ジャケ、防寒にマフラーを首に巻いたぐらい。マサヨシ君も着の身着のままどこに行き着いたため格好は変わらない。彼のシャツとジャケットは血こそ落ちたが銃弾で穴が開いたまま、自分とサイズが違いすぎて替えがないためそのままだ。荒野の夜としてはあまりにも寒いため予備のマフラーを貸してあげる事にした。

このマフラーはゲーム時代ではアクセサリー扱いとされ、装備すると耐寒性と敏捷のパラメーターが上がるようになっていた。その

性能はこちらでも反映されているようで、マフラーひとつで不思議なほど寒さが和らいでいるのが実感できる。これは色違いのバリエーションがあり、自分は黒でマサヨシ君には赤を渡している。

しかし魔法の事といい装備品の効果といい、半端にゲーム時代での設定が今の現実反映されているせいで戸惑うことが多すぎる。

ジンの方は最初から巨体化してもらい、警戒態勢で目的地まで一緒に行くことになった。

車両のわだちがうつすらと街へ伸びるだけの道を二人並んで歩き、その背中をジンに任せる。

二人分のブーツが荒野の冷えた砂礫を踏みしめ、小石がはね飛ばされる音が耳に入る。一方でジンの足音は猫足なだけにほとんど聞こえない。その黒い体毛も相まって影みたいだ。

自分の拠点から市街地までは目算で十キロ。歩きでは一時間強ほどの距離だけど、それは平時の話。今の街は暴徒の巣窟になっている。この道も安全とは限らないため、警戒しながらの歩みは自然と遅くなる。

自分の月詠人としての鋭い感覚はこの非常時にとてもありがたい存在だが、どこまで頼れるか全く不明だ。

今見える視界は昼間のように明るく、けれど太陽が出ている時みたいにギラギラと眩しいものではない。聞こえる音は小さくても拾え、砂漠に生息する生き物の動く音を捉える。肌で感じる風は針のように細かく感じられてしまう。

あまりにも鋭く広い感覚は自分のものだという感覚を希薄にさせる。それが頼りなさを感じさせる原因にもなり、つまるところ自分が胸の内に抱えているモヤモヤした感触の源泉ということだ。

『ここからは念会話でコミュニケーションをとろう。夜は声が響く』

『了解つす』

昼の内に決めていた通り、ある程度街中に近付いたところで声による会話を止めて念会話に切り替えた。

夜に出す声は思っている以上に響くもので、戦争手記とかでも敵の会話が離れてても聞こえるといった話があった。だから軍隊では声を出さずに意思のやりとりをするためハンドサインなどが作られている。けれどこれも相手が見える範囲でないと意味がないし、細かいニュアンスが伝わらない。

それがここでは念会話という大変便利なものがある。送信相手をイメージして頭の中で言葉を作れば相手に伝わる。周囲に漏れる事はないし、肉声のように細かい部分まで伝えられる。夜間の会話にはうってつけだ。

とは言っても、これから危険な街へ行くのにお喋りに興じながらというのはありえない。お互い肉声でも念会話でも無言で黙々と足を動かしていく。

横に並ぶ相手を見上げてみると、マサヨシ君の方は何か言いたげだ。けれど言葉にするのも躊躇われるのか口をへの字にして閉ざしている。

何を言いたいのか人付き合い歴の少ない自分でも察しはつく。「どうしてオレに付き合ってくれるのか？」といった感じだろう。先程聞いてきた言葉もこの内容が含まれているように思われる。

一度助けた相手だから最後まで面倒をみる。ジンに対して言った言葉だけど嘘は言っていない。

助けた人が危険な場所に行こうとしているのを見捨てるのは本当に寝覚めが悪く、気がかりな事だ。初対面の人を相手に随分とお人好しな事を考えてしまっているし、ここまで自分が人の事を気にするのも驚くことである。それでも不思議と後悔はない。

自分はもつと冷血漢な人間だと自己分析していた。街に戻ろうと考えるマサヨシ君のことを放っておくか、それ以前に暴走族じみた連中に襲われているのを放置しておくかぐらいはやっていそうだと振り返って見ればそう思う。

それがそうならなかったのは……さて、なぜなのだろうか？

マサヨシ君は見た目非常に恵まれた体格をしている。二メートル近い身長に分厚い筋肉で出来た天然の鎧。二〇代ぐらいに見える顔立ちは全体的に線が極太のたくましい印象だ。元々の自分の体と比べるまでもなく剛健な身体をもったマサヨシ君は弱そうな要素はかけらもないように見える。

護衛役より強そうに見えてしまう護衛対象もまた珍しい。武器のあるなしで護衛するとかいう話なら、彼に手持ちの武器を貸せば済む話のように思えてしまう。どうして自分は保護者気取りになっているのだろうか？

その消化不良の疑問がまたモヤモヤの原因になって、胸の中で^{おり}溺^れのように沈殿していく。

「なんなんだろうな、この気分」

『どうかしたんすか？』

『あ、うん。大した事じゃないよ』

声に出していたらしい。独り言体質はここでも発揮されている。気をつけないと不用意な発言をしてしまいそうだと。

『それより、もう市街地に入るけど物陰を移動しながら動く。軍隊とかでやっているようなあの動きだ』

『うつす。戦争映画とかで見たような感じでいいんすかね』

『どんな映画を参考にするかによる。そうだね』スターリンググラー
ド』を見たことは？』

『あるけど、オレにジュード・ロウやエド・ハリスみたいな感じでいけてことつすか』
『そう』

映画のキャストをそらんじることが出来るなんて、結構な映画好きなのか。

知らなかった相手の側面が見える度、澱は溜まっていく。もう赤の他人ではありえない不可視の重さが加わっていく。当面はこの消化不良の感傷を抱えて行動していくしかないのだろう。そんな未来が見えたような気がした。

市街地の墓標じみた廃墟はもう目の前にある。夜はまだ始まったばかりだ。

街に入る際、マサヨシ君には武器を渡している。『ルナ』がバツクアップ用に持っている小型のリボルバー拳銃と、建物突入用になっている斧の二つだ。いくら護衛を買って出たといっても護衛対象も自衛できないと不味かろうという判断だ。

斧を片手に持ち、拳銃を腰に差して自分の後ろについて来るマサヨシ君。その動きはたどたどしく、どこか危なっかしい。でも、人の心配をしていられるほどこちらも余裕があるわけでもなかった。

身を低くし、開けた場所を避けて廃墟になった建物の影に沿って歩き、周囲の気配を窺い狙撃に備え、街角に出るたびそつと顔を出して様子を窺う。じれったくなるような手順を踏んで街中を進んでいく。

自分は少々特殊な経歴と趣味を持っている以外は大した事がないと思っている。どこかの軍隊の特殊部隊に所属していたとか、元傭兵とかといったことはない。

いまやっている事も読む機会があつた米軍の市街戦マニュアルや、日本の書店でも手に入る軍事系雑字本に書かれてあつたことを思い出し、必死になって真似ているだけだ。本職の軍人から見ればきつと粗が多いことだろう。でも少しぐらいは効果が見込めると信じて実践していくしかない。付け焼き刃でも無いよりはましだ。

肩にスリングで担いでいる銃器は市街戦という近距離での戦いを考えてショットガンを選んだ。レバーアクションのショットガン『ウインチェスターM1887』をモデルにした『ウインチェスター・タイプ87』がコレの名称になる。

分らないという人には、映画『ターミネーター2』でアーノルド・シュワルツェネッガーが振り回していた銃と言えば分かるだろう。彼が劇中で振り回していたのは銃身と銃床を切り詰めたソードオフで、自分のはフルサイズだ。弾倉は全弾一粒弾のスラッグ、即応弾に鹿撃ち用のバックショットを用意してベルトのポーチに入れている。

装備の面ではひとまず万全、後は心構え。これはよろしくない。

ここまで様々に精神的負荷があり過ぎるイベントが立て続けに起こり、今はこうして慣れないスニーキングミッションで神経をすり減らしている。昔プレイしたゲームに敵本拠地に潜入する工作員やら暗殺者というものがあつたが、今なら彼らを心から尊敬できそうだ。こんな事は鋼鉄の精神でもないと言っていけない。

周囲に耳を澄まし、視界を大きくとって人影を探り、臭いで違和感を気取り、肌で空気の流れを読む。

感覚をフルに使って肉体をリーダーと化す作業はかなりしんどい。幸いこの身体のポテンシャルは高く、肉体としての疲労はまったく感じない。これだけでも結構助けられているし、使い魔のジンもいる。しかし持続してかかる精神へのプレッシャーは動きを鈍くして

いく。

銃を扱ってきた事はあつても銃で人命のやり取りをしたのも昨夜の一件が始めてだ。

いくら気持ちの上で覚悟を決めたとか言つても実践に移すのはやはり簡単なことではなかった。口では何とでも言えるというやつだ。それでもマサヨシ君という他人がすぐそばで自分を見ている。彼の護衛を買つて出た以上は無様はさせない。

そんな具合で外面は何とか繕えているものの、内面は緊張しどうしで足を進めているのが現状の自分ということになる。まったく、マサヨシ君の事は笑えない。

『それで、銀月同盟の拠点までは後どれほどかな？』

『えつと……あちこち壊れていて分らないところがあるけど、この先の丁字路を右に曲がつて道なりに行けば左に大きめの建物が見えてくるからそこを目指せば大丈夫つす』

『普通に行けば三〇分もかからない距離かな』

『そうつす』

『普通じゃないからもつとかかるんだろうけど、夜が明ける前には着きたいな』

『そんなにかかんないすよ』

マサヨシ君の案内の下、ジアトーの市街地を歩いて行く。彼は月詠人の自分と違い夜目が利かないため、前と後ろを自分とジンで固めて案内役に専念してもらっている。それがマサヨシ君の男心には少々気に入らないみたいで、念会話によつて頭に響く語氣がこころなしか不満のニュアンスがこめられている。

本人も気付かない程度のもんだろうが、やはり見た目が年下に見えるか弱そうな女の子に護衛されるのは男としていい気分ではないのだろう。振り返つて見た表情もどことなく渋い。

そんな彼に無理やり付き合った自分が悪役になったような気分がして苦笑しかけた時、耳に気になる音が入った。いや、これは音ではなく声だ。

弛みかけていた緊張の糸が再び張り詰める。

『マサヨシ君、止まって。人の声がする』

『え？ 人。味方が』

『分からない。分からない以上は静かにしてやり過ぎそう』

声の出どころは沿って歩いているレンガの壁の向こうからになる。大きな屋敷の敷地を囲むレンガ塀の向こうから男声と女声の二種類の人の声が聞こえてくる。距離もそれほど離れてはいない。マサヨシ君に言ったように今この街には暴徒と化したプレイヤーが数多く潜んでいる。敵か味方が分からない以上は静かにやり過ぎす方が無難だ。

レンガ塀には無数の弾痕があり、中には砲弾でも当たったように大きく破壊されている箇所がある。声も大穴が開いている場所からだ。

肩にかけたウィンチェスターを手に持ち、後ろを見やる。マサヨシ君は手に持った斧を両手に握りしめて緊張しており、ジンは触腕を展開して戦闘態勢になっている。二人とも緊張状態なのが分かったし、多分自分もそうなっているのだろう。やり過ぎすと決めたのだ、静かに声の主を窺うとしよう。

ジンには周囲の警戒を頼み、レンガ塀に開いた大穴から顔を半分だして向こう側を窺ってみた。マサヨシ君も自分の頭より上から顔を出して同じ事をしている。当然といえば当然だが、彼も声の主は気になるようだ。

向こうに見える人影は二人。屋敷の中庭だった場所で一人が石の

ベンチ腰掛け、一人が傍に立っているのが見える。

ベンチに腰掛けているのは若い女性で十代半ばの可愛い感じに見える女の子。白いマントに軽鎧、なによりピンク色の髪が特徴的。傍に立っているのも特徴あふれる人物で、陣羽織に袴と一本にまとめた長い黒髪でいかにもな侍スタイルをしている二十代後半のやせた男性だ。

外見的特徴が激しく主張されている二人組みだが、プレイヤーならあの位の派手さはよく見られる。注意が向いたのは彼らの身に着けている装備品だ。

男が腰に差しているのは刀、女の子が手で弄んでいる杖、二人が身にまとっている軽鎧と陣羽織、いずれも記憶が正しければ高レベルプレイヤー垂涎の高性能レア装備のはずだ。

ゲームでの能力がどこまでこの世界に反映されているか分からないし、彼らが善良な人間とは限らないため接触はしたくない。改めて結論をつけた。

彼らはこちらの存在に気付いた様子がない。だから当初の予定どおりこのまま彼らをやり過ごそうかと考えていると、頭上のマサヨシ君の様子がおかしい。高性能になった耳には彼の呼吸が早まる様子や、筋肉が強張る収縮音が聞こえてくる。早い話、体が震えている。

『マサヨシ君、どうかしたのか？ 彼らについて思い当たることがあるのかい？』

彼の目線はあの二人に固定されている。表情筋までも強張ったのか、見上げた彼の顔は無表情だ。

どう考えてもあの二人に原因がある。

こちらの問いかけに、しばらく間があってマサヨシ君の思念が返ってきた。

『あいつらがこの街をぶっ壊した連中です。ピンク髪の女が魔法撃ちまくって建物壊してましたし、あの侍野郎は辻斬りです。友達も刺されました』

『……そうか。あいつらが』

つまりこの街で今一番遭いたくない手合いを見つけてしまったのか。

それにしてもマサヨシ君の言葉は返答に困る。自分はスコープ越しにこの街の惨状を見てきたが、現場にいたマサヨシ君はその惨状を体感してきたのだ。震えるなどいうのも無理な相談というもの。かける言葉がない。

気の利いた事が言えないため、マサヨシ君よりあの惨状を作り出した彼らの方に意識が向いた。

耳を澄まし二人の会話を拾う。こちらに気付いた様子がない彼らは念会話ではなく肉声で話しており、この距離なら音が拾える。

「でだけど、スコアはどうなったの？ とーぜんこの魔法美少女アルトリーゼちゃんの勝ちよね」

「……お主に花を持たせる気などさらさらないが、確かに殺害スコアは某が二〇〇と五つ、お主が三百十一でお主の勝ちだ。まったく我ながら早まったものだ。召喚魔法が使えるとなれば単純に手数が増えるから最初から勝負にならん。しかし、今思っただが数が少なくないか？ 召喚魔法で軍勢でも喚んで千や二千の人間を血祭りに上げていそうな気がするのだが」

「あゝ、それね。あたしも最初はそう考えたのだけど、それやっちゃとMPがガシガシ削られちゃうのよ。とっさの時にMP切れなんて笑えないでしょ？ それにあたしは人を焼くものやってたけど略奪もやってたのよ。人斬りマニアな震電と違って女の子ですものゝ、宝飾店とか服飾店とかから根こそぎ、ね」

「ふむ、略奪に際して相手の靴まで奪うのは女子の仕業と聞く。お主が根こそぎと言うのだ、何も残さないのだろうな」

「とーぜん！　でさ、勝利者であるあたしに何か賞品とかあるよね？」

「お主の強欲さには勝てんな」

聞こえる会話は非常に和やかなムードだ。あくまでムードだけで、内容自体は血生臭い。

内容をそのまま信じるなら彼らはこの街の人間を相手にマンハントを行い、殺した人の数を競っていたというのだ。おそらくはマサヨシ君の友人が刺されたのもスコアのの一つとして数えられるためなんだろう。

獵友会で仕留めた獲物の自慢話とかは聞かされたことはあるが、彼らの会話はそれに似ている。殺した人間をまるでシカやイノシシと同じに見なしており、人と思っていない。正直に言って獵友会の自慢話よりも聞いていて気分が悪くなる。

ただどこで彼らに喧嘩を売るというのも悪手だ。

会話に出てきた二人の名前に思い当たりがあった。アルトリーゼと震電、どちらも『エバーエーアデ』において高レベルプレイヤーとして名前が知られている。

ピンク髪の少女、アルトリーゼは魔法系の主だったスキルを制覇した魔法使いとしてはハイエンドなキャラクターの一人。侍スタイルの男性、震電は敏捷さに重きを置いた剣士として高レベルなキャラクターの一人として数々の大型イベントで活躍している。

何より、彼らが所属しているチームが有名どころだ。

『Mr So And So』——略称S・A・Sと称する彼らが所属するチームは全員が高レベルプレイヤー、所属するには一定以上のレベルが必要という制限まである精鋭主義で有名なチームだ

った。チート行為など少々素行が悪い噂はあったが、それでも大型イベントには必ず顔を出し、上位に名前を連ねるだけの実力を有しているとされていた。

ここで彼らにマサヨシ君の友人の復讐を名分に襲撃をかけるのは簡単だろう。浅い所見だが、この距離からウインチェスターでスラッグを不意打ちで浴びせれば仕留められる自信はある。

だが、彼らの後ろには高レベルプレイヤーで揃えたチームが控えている。チームと仲違いをしてあの二人だけで行動している事も考えられるが、希望的観測だ。

高レベルに育て上げられたキャラクターのステータスが反映された肉体は元の世界の常識からは計り知れないがあるし、装備品が持つ特殊効果や威力、具現化したスキルの実際の威力なども加味すればもう未知数の強さになっているだろう。

その上でこの混乱で彼らにも相応に戦闘経験は積まれているはずだ。自分と違い人を殺すのに一切の躊躇がない連中だ、考えるに恐ろしい。

やはりここはやり過ごすのが一番の手段という結論に行き着いた自分。けれど友人の仇を前にしたマサヨシ君は納得しないだろう、そう思い再び頭上を窺ってみるが彼の姿はなかった。頭を巡らし振り向いてみれば、レンガの壁に寄りかかってうな垂れている彼がいる。もう体に震えはないようだが酷く落ち込んでいるのが自分でも分かる。

『マサヨシ君、大丈夫かい？』

こういつ時だけ人付き合いのなさが悔やまれる。もう少し声のかけ様というものがあるはずなのに当たり障りのない事しか言えない。けれどここで声をかけてあげなければ駄目な気がする。今のマサ

ヨシ君の様子は自分でもそう思わせるほどの危うい雰囲気を持っていた。

『オレは情けない臆病者^{チキン}つす。タカ、友達の仇がすぐそこにいるっていうのに仇討ちよりも逃げる事に考えが回って、拳句体も口々に動かないから逃げる事さえまならない。笑っちゃいますよね、映画とかだと真っ先に死んじゃうモブその一ですよ』

「……」

まいった。どう返答したらいいのかわからない。

いきなりこの場で「かたきだあ！」と言って襲い掛かっていかないのありがたいけど、こういうのもどう返したらいいやら……まいった。

今は耐えるとき、と言って励ますか、逃げてもいいんだよ、と慰めるべきなのか対人関係の薄い自分にはリアクションが選択できない。でもこちらから声をかけた以上は何か返してあげないといけない。

結局、思念として出たのはまたも当たり障りがないものだった。

『マサヨシ君、行こうか。今は自分自身の安全を図る時だ。そういうのは一度落ち着いてから考えよう』

『……うつす』

結論の先送り。いつ再び会えるかわからない相手に対してあまり良いとは言えない提案だけど、こちらはソフトもハードも万全ではない。彼らを相手取るにはまだ早すぎるというものだ。

『歩ける？ 彼らを避けて路地を迂回したいのだけど、いける？』

『大丈夫です、なんとか。行きましょう』

『分かった。ジン、悪いが彼の面倒を見てくれないか』

『承知』

二人組のいる屋敷から離れて迂回路を探すことに決めて落ち込んでいるマサヨシ君はジンに任せ、自分はウィンチェスターを手に路地に入っていく。

告白してしまうが、今のマサヨシ君を自分は正面から向き合うことは出来そうになかった。生々しい人の感情に触れる事を怖がった自分の臆病さからきているこの行動に自嘲してしまう。彼は自身自身をチキンと言ったが、それはこっちにも言えることだった。

夜なのにやけに明瞭に見える空の下、己の不甲斐なさを再確認してしまった。

あの二人組には最後まで気付かれることなく、他のバカ共にも見つかることなく移動は順調に進んで無事目的地に到着できた。

昨日の昼に目にした自分たちの城、銀月同盟の拠点はいまやすっかりと様変わりしている。

『派手にやられたなあ』

『これは中も相当荒れていると見たほうがいいか』

オレの呟き思念にルナさんは冷静なコメントを返してくる。けれど見上げる拠点の有様はルナさんの言葉も頷かせるものだ。

元の外観はライオン。マンションとかで見られる少しお洒落な感じの建物だったのだが、今はあちこちに大穴が開いて一目で荒れ果てているのが分かる。所々焦げていたり、融けていたりするところを見ると魔法とかの攻撃を受けたのかもしれない。

ここまでの攻撃を受けちゃリーダーが逃げると言ってもおかしく

ないか。

『大丈夫かい？　また気分が悪くなったりとかしないか？』

『ありがとうございます。大丈夫です、こうなっているかもって予想だけはしてましたから』

表情の変化は少ないが、氣遣ってくれているのは分かるルナさんの言葉はありがたい。実際、覚悟らしきものはしていた。だからさつきみたいな無様な姿をさらさずに済んでいる。

確かに夕力を殺したあいつと戦うにしても装備を整えなくては話にならない。そのためにここに戻って来たんだ。ルナさんの言うように一度落ち着いてからの話だ。

第一、オレは臆病者だ。^{チキン}あのとき戦うよりも逃げることを選んでしまったし、さつきなんかは逃げることさえ出来なかった。これじゃあ落ち着いてからも戦うことなんて出来そうにない。

いま見える拠点の有様もこんな沈んだ気分には拍車をかけてくれる。この様子ではオレの装備一式が無事な望みは薄いなあ。

『ともかく、中に入っちゃいましょう。外で夜を明かすよりはマシです』

『そうだね。君の部屋は？』

『四階の三号室です』

『ん、了解。まだ中に敵が潜んでいるかもしれない、警戒しよう』

ルナさんが西部劇で見るような銃を構えながら拠点に入って行き、オレもそれに続いていき、後ろから黒ヒョウがついて来る。

市街地に入ってからずっとこんな隊列のままだけど、見た目は年下に見える女子に危険な先頭を任せるのは複雑な気分だ。例え頼もしさで比べようもなく勝っていても何とも言えないモヤモヤが腹の辺りに溜まる気がする。

昼に市街地に入る時、自衛用の武器として斧と拳銃を渡された。その時に聞かれたのが「銃を扱った経験は？」という質問だ。あんな台詞、映画の中でしか聞いたことがない。

ごく一般的な日本の中流家庭に生まれた身としては当然答えはノーである。ルナさんも「だろうね」と言って手取り足取り銃の扱いを教えてくれたが、そうすると彼女は相当に銃の扱いに長けた人なんだろうか。ナゾのある人だ。

屋内に入っていくオレの手には斧、腰に拳銃を差して気分はホラー映画に出てくる殺人鬼の気分。

銃よりも斧を持っている方がしっくりくるのは、きっとこの『マサヨシ』というキャラが接近戦用にパラメーターが振られているせいだと思う。

ゲームの『エバーエーアデ』では装備に設定されているステータスを満たせば、どんなキャラでもそれを装備できるようになっていた。けれどやはり熟練度は設定されているし、それを装備してレベルアップしていくとその系統に適したパラメーターになっていくようになっていく。

昨日今日で武器をもったキャラと、その武器をずっと使いこなしてきたキャラでは同じ武器でも与えるダメージが違っていたのだ。

ゲームのことがここに反映されているなら、今まで銃を使ってこなかった『マサヨシ』が斧の方を頼みにする心理は当然の流れなんだと思う。

斧ならメインに使っていたし、握っていても拳銃なんかより頼もしさを感じる。銃みたいにチマチマした感じはしないし、扱いも単純で威圧感もある。うん、オレは斧でいいや。装備整えたらルナさんに銃を返そう。

つらつらとそんな事を考えながら、室内を進んでいく。

月明かりや生き残った街灯の明かり、あとは今も燃え盛る建物の炎の明かりが開放型の廊下から差し込んでくるが、外よりも暗いことは確かで歩くには少し不自由がある。けれどここで明かりを灯すのはマズイくらいは分かる。廊下から差し込む光だけを頼りに進んでいくしかない。

廊下を進み、階段を四階分上がっていき、また廊下をすすむ。オレの、いや『マサヨシ』の部屋までは慎重に進んでも数分で着いてしまえる距離だ。この短い距離と時間でも拠点の受けた被害の大きさが目に飛び込んできた。

壁は幾つも小さな穴やヘコミ、焦げた跡や融けた部分もある。中にはなんの冗談か巨大なスプーンで抉ったような場所もあった。

床にはがれきが散乱して、小さな金属の筒が幾つも落ちている。拾ってみるとそれは使い終わった銃の弾、空薬莖。ここで銃撃戦があったわけだ。今はホコリ臭いけど、ここも昨日は硝煙の臭いで一杯だったのかもしれない。

不思議だ。こんな風に考える余裕があるなんて思ってもみなかった。緊張があり過ぎてオレの中で何かが一周して平静な感じになっってしまったのだろうか？

奇妙な可笑しさがこみあげてきて、小さく「くくくつ」とやっている、後ろの黒ヒヨウから声（思念か？）がかかってきた。

『おい、貴様。あまりの事態にとうとうオカシクなってしまったのか？ 予め言うておくが変な気は起こしてくれるなよ。そして何より主を巻き込んでくれるな』

『失礼な。大丈夫だって。ただ、さっきと違って今は妙に考える余裕があるなあって、その辺りが変に可笑しくなってるさ』

『ふむん。その余裕、日が出てからも続けばいいのだがな』

『は？ どういうことさ？』

『少し考えれば分かるだろう？　ここは昨日戦場だった。多くの人命が失われた場所だ。今は暗いし、場所も離れているがかなり濃い血の臭いがする』

『……サイトーさん達かも』

『それがこの拠点のメンバーを指すのだったらおそらくはな。街を脱出するのだから吊っている時間はないだろう』

緩みかけた精神に冷たい水をぶっかけてくれた黒ヒョウ。妙に優雅に揺れる尻尾が憎らしく見える。

オレの鼻じゃここから血の臭いなんて分からない。精々が瓦礫の出すホコリっぽい臭いぐらいだ。けれどここに数多くの遺体があると黒ヒョウは言う。

昨日のサイトーさんが出した最後の念会話のことを思い出す。あの時点で相当な被害があったと思うし、思い返せばサイトーさん自身も苦しそうな調子があったから深手を負っていたかもしれない。きっと明日の朝にはみんなの遺体とご対面なのだろう。またも気が沈む。

『覚悟だけはしておく』

『そうしてくれ』

黒ヒョウにそんな事を言われても足は進んでいく。オレの目や鼻には廃墟の一つに過ぎないことも奴には戦場跡に感じられる。それが少し悔しい事と思いながら。

ここまでの道のりと比べたらあつという間の時間でオレの部屋の前に辿り着く。

四階の被害は建物の中でもそれほどではなく、オレの部屋も外か

ら見た限りは無事っぽい。変なところで運があるものだと思分の運勢について考えてしまいそうだ。

「……っ」

ルナさんと黒ヒョウの視線に促されて、腰のバッグから部屋の鍵を出して鍵穴に差し込む。鍵を回すとあっさり解錠、周囲の廃墟ぶりからすると信じられないほどの無傷っぷりだ。

ノブを回して金属製の扉を開けば、昨日見た『マサヨシ』の部屋がほぼそのままの状態でそこにあった。

『なんとも、運がいい』

『そうだね、いくら攻撃側にムラがあつたといつてもここまで無事というのはちよつと珍しいか』

『被害らしい被害は窓ガラスが割れている程度か。貴様、何か憑いているとかか？』

『そんなの無いし！ ほら、入りましょう』

アホな事を言ってくれる黒ヒョウとルナさんを押し込むように部屋に入れる。

街の周囲は荒野だ。凍える夜は屋内の暖かさで寒さをしのいでいくしかない。窓のカーテンは明るさを諦めて閉めることにして、床に散乱したガラスはひとつひとつ拾って部屋の隅に纏めておく。他になにか被害を受けたものはないか点検していき、ゲームでの装備がキチンとあるか確認してみた。

CG処理された画像のみの存在が今は目の前に圧倒的質感で存在を主張している。

鈍い金属の光沢が凄みを匂わす戦斧に重量感もタップリな長柄の槍斧が装備を入れておくロッカーに収まっていた。昨日ここを出る

ときにも見たが、もう一度見ても存在感がありすぎる代物だ。

ゲームでの『マサヨシ』は主にこの二種類の武装を使い分けて振り回していた。今度はオレがその真似をするわけだ。そうしなければここでは身を守れない。

「マサヨシ君、装備は見つかった？」

「ええ、見つかったつす。あ、借りた武器返しますね」

「別に貰ったままでもいいんだけど、荷物になるか。分かった」

ルナさんから渡された斧と拳銃を返す。結局使わなかったけど、今回はそれがベストなことだ。ゲームと違って、これからは戦うことは避けなくちゃいけないらしいしな。

ロツカーから防具も出す。全身を覆う帷子と金属板で構成されたそれは、魔法を吸収して銃弾すら弾く現実にはあり得ない防御力をもつとされる鎧だ。ゲームでは重装甲装備の一種、『城塞甲冑・ギガント』と割とストレートな名前がこの鎧にはあった。

「はあ、ギガントとは。随分と凄いの使っていたんだね」

「デカブツにはお似合いな代物だな。良い盾役になりそうだ」

「おいこら、その黒いの。なんか言ったか」

「いや別段」

失礼なことをのたまう黒いのは無視するとして、部屋の中を物珍しげに見るルナさんに目が向かう。

部屋に入った時から会話は肉声になっている。やっぱり慣れない念での会話より、慣れた方法が一番らしく頭の重みが取れる感じがした。脳の辺りにでも負担がかかっていたのかな？

ともかく、ルナさんという女の子を部屋に入れるのはオレの人生初な訳でして、少し緊張してきた。

メンバーはルナさんの住み処にいる時と変わらないけど、あっち

は彼女に失礼だけど廃工場だ。歴とした住居という空間にこうして
いると違った緊張感が生まれようもの。やばい、また会話がなくな
るかもしれない。

ああ、そうだ。その前にコレ着なくちゃいけないか。

「えっと、これどうやって装備するんだ？ ゲームだとボタン一つ
なのに」

今までの人生で全身甲冑を着るというある意味素晴らしい経験は
オレにはない。中世を舞台にした騎士が出てくる映画を何本か見た
事はあるけど、いずれも着たり脱いだりするのは大変そうで従者な
どの手伝いが必要なければダメという話もあった。このギガントもあち
こちにベルトやホックらしき部分が見えるけど、一人で脱ぎ着する
のは難しそうだ。

オレの言葉からルナさんもその事を察してくれたみたいで、「装
備するなら手伝おう」と言ってくれる。嬉しいけれど女の子に着替
えを手伝ってもらうのは、昔に母親が着替えを手伝っていた時みた
いで恥し過ぎる話ではないだろうか。

そんなこっちの理由を察してくれたか分からないが、黒ヒヨウが
助け舟を出してくれた。

「ギガントほどの鎧ともなれば自らの意思を持っているものだ。所
有者が身に纏いたいと鎧に念じれば応えてくれる」

「念ずるって、こうかな——って、うあああああ！」

黒ヒヨウの言葉通りに鎧を手を持ったまま「着たいな」という
のを念会話の感覚でやってみたら、鎧が爆発するように広がってオ
レに覆いかぶさってきた。

まるつきり大口を開けたワニかカバさもなきやサメだ。バクンッ
と目の前が真っ暗になり、食われたような感じに口から悲鳴が出る。

直後、体全体が少し重く感じられた。

「おおお、これは凄いな。こっちの鎧ってみんなこんな風に自動で着脱ができるものなのか？」

「いいや、こういう真似が出来るのは名のある鎧ぐらいなものだ。器物に宿る意思が持主の求めに応じるという理屈でな。おい、いつまで目を閉じている。眠いのかね」

「えう？」

黒ヒヨウの声に目を閉じていたと分かり、目に力を入れてまぶたを開ければさつきと変わらない室内。違いは手に持った鎧がなく、全身が若干重く感じられることと、視界に入っている自分の腕が装甲に鎧われていることだ。

視線を下げてみると鈍い輝きをもった金属の装甲に覆われた自分の体がある。あ、なんか既視感。昨日もこんな感じだったな。

「ちょっと、鏡見てきます。ルナさんはテキトーにくつろいでて下さい」

「了解した。今日はここで夜を明かすことになるな」

「ベッドが汗臭くて横になる気にならん。主、ここは床に布団でも敷いて休むとしようか」

「臭いうんぬんはともかく、私たちは外様な訳だから床なのは賛成。マサヨシ君、布団借りるよ」

「うつす」

ルナさんの声について生返事をしてしまいがち、バスルームの鏡の前に向かう。歩く度、金属板が小さく鳴ってこすれる。映画で見た騎士や鎧武者よりもガチャガチャと音がしない辺りが妙にリアルだ。

鏡に映ったのはディスプレイで見た『マサヨシ』そのものの姿だ

った。アニメが実写になると酷くガツカリとさせられることがあるけれど、これにはそんな事はなかった。むしろ深い充足感が胸から湧いて出てくる。

全身甲冑の厳つい巨体が見る者を圧倒する。ゲーム画面越しでは感じられなかった圧迫感を覚える。自分の体だと認識するようになつてこれだ、見る者に与えるプレッシャーは相当なものになりそうだ。兜の面体も獣を意識した感じだし、見た感じは金属のクマだ。オレつてやつぱり現金なものだなあ。さっきまであんなに落ち込んでいたのに、こうして新しいオモチャで一気に気分がよくなる。シリアスが長続きしないともしよう。

自分の現金さに苦笑しつつバスルームから出ると、ルナさんが床に布団を敷いてくつろいでいた。

具体的には組んだ腕を枕に仰向けになつて膝を立てている。そんな事をすればスカートの中身が――ああ、黒とは下着まで大人っぽいや。

「うん？　どうかした？」

「いえいえいえいえつ、何でもありませんよ？　あ、そうだ。ここまで護衛してくれたルナさんには何かお礼しないと」

非常に無垢な感じで向けられた視線に耐えられません。そして何とかごまかそうと考え、すぐに出てきた提案に飛びついた。

兜の面体を上げて視界を広く取ると、近くにあったアイテム保管用の棚に手を突っ込む。

とっさに考えたにしては良い案に思える。何しろリアルで命の恩人だ。この人がいなければオレは間違いなく死んでいたし、そうじゃなくてもロクでもない目に遭っていただろう。

この機会に何か形として残るお礼をしておきたいな。ルナさんは高レベルの人っぽいし、ちょっと貴重な物程度じゃお礼にならない

かも。

何かお礼になりそうなもの、とテンパりながら柵を引つかき回す
オレの行動をルナさんの手が止めた。

「いいよ、今はお礼なんて考えている時じゃないから」
「ルナさん？」

手甲に包まれたオレの手をルナさんの白く細い手が掴んで止める。
見た目に反してパワフルで、掴まれた手が動かない。

「そうというのは街を脱出して、お互い無事だった時に落ち着いた先
でしょう。これから君に助けられる事だってあるだろうし、その時
は私が君にお礼する事になる」

「あー、そつすね。気が早すぎました。ルナさんにお礼されるよう
ガンバります」

「そうか」

パツと手が離れ、また床に敷いた布団に座るルナさん。うん、今
度は見えないからヨシ。

その横で猫状態になって丸まっていた黒いのが睨んでいるけど、
気にしたら負けだ。

ルナさんが掴んだ部分をさする。軽く金属のこすれる音と感触が
伝わる。ゲームでの設定がここでも反映されているなら魔法や銃弾
すら通じない装甲を纏っていることになる。この重量感ある感触が
何とも頼もしく感じられる。そうだ、オレはもう守られるだけでは
ない。そんな風に確信させるだけのものがここにあった。

まずはルナさんにお礼をされるだけの事をしよう。今後のオレの
秘かな目標はこうして出来上がった。

4話 潜入（後書き）

予定よりも大幅に遅れての投稿でした。待っていた方がいたらゴメンなさい。

そして、感想を下さった方に感謝を捧げます。ありがとうございます。望む声がある限りやっていこうと思います。
では。

5話 慟哭（前書き）

- ・残虐な描写があります。
- ・少々マニア（銃器マニア系）な内容があります。
- ・今回も地雷要素が敷設されております。
- ・以上のことを踏まえ、用法・用量を守り正しく読みましょう。

5話 慟哭

半地下の大部屋には三十人を超える女子たちが声をひそめて話している。まるで授業が始まる前の女子校の教室に似ているけれど、私を含めてみんなが置かれている状況は厳しい。

「それで、ミーナちゃんだけどこっちにいるのを確認した？——
そう、良かった。すぐに連れて来て。ここで一纏まりになるほうが安全だから」

「ライアさん、食料の在庫確認してきました。はつきり言って厳しいですねえ、明日の夕食分で底をつきます」

「そんなに少なかったの。仕方ないわ、非常時ということでのこの辺りの店から調達してきなさい。もちろん、日のある内に数人のグループでやること」

「ドロボーかあ、気が進まないなあ」

「空腹を抱えたくないでしょ」

「はい」

すぐ近くでチームリーダーのライアさんが指示を飛ばして、チームに入って一か月で新人のミリさんが報告を持ってきている。

ここは私が所属するチーム『幻獣楽団』の拠点。ゲーム『エバーエアデ』ではここを拠点に色々なクエストに出発したり、仲間内で情報を交換したり、何もなくても駄弁ってお喋りに興じてしまうこともあった。

あくまでゲームの中のお話。しかし、私がこの目で見て、この耳で聞いて、この鼻で嗅いでいるのは紛れもないリアル。ゲームでの設定が現実のものになっているとは一体どんな喜劇^{ひげき}か。

どうも私は考え込んでいたらしい。こっちの姿を見たライアさんが話しかけてきた。

「水鈴ちゃん？ 大丈夫？」

「え？ ええ、はい、大丈夫です。ちょっと考え事をしてました」

「なら良いけど。外から何か報告は入っている？」

「いえ、今のところは。夜ももう遅くなっていますし、今日のところは偵察に出したメンバーを引き揚げるべきではないでしょうか」

「そうね。引き揚げの連絡は私がやっておくから、貴女はもう休みなさい」

「すいません」

ライアさんに気を遣わせてしまった。けれど休憩が欲しかったのも本当のことと、リーダーの言葉にありがたく甘えさせてもらう。

ゲームの世界が現実のものとなったことに端を発するここ数日の大混乱。それに対応してメンバーをまとめ上げ、周囲の様子を探る偵察活動を行い、『幻獣楽団』のメンバーは自己防衛のために動いてきた。

その中で私は、外に出たメンバーから受けた情報をまとめて、リーダーのライアさんに報告として上げる役割を受け持っていた。

チャット機能に変形したような念会話で入ってくる街の様子は、聞いているだけでも顔をしかめなくなるような内容ばかりだ。

けれど偵察の成果は確かにあって、ここで起こった混乱のことが少しずつ分かってきた。

例えば、現実の世界からこの『エバーエーアデ』の世界に自分のキャラクターの肉体で転移してくるのに『個人差』があると分かった。

私がこっちに転移してきたのは三日前、いやもうじき日付が変わるので四日前か。『幻獣楽団』のほとんどのメンバーもこの辺りに

なるが、中にはさらに前からこちらに来てしまった人や、私の後から来た人もいた。分かっている限りだが最大でも一週間前、最近では昨日になってこちらに来た人がいるなど個人によって時間差が生じている。

それに私がさっきまで偵察メンバーの報告を受けていた念会話も万能の通信機能という訳ではない。

ある程度以上の遠距離通信はできそうになく、通信できる相手もお互いに知った仲でないとダメ。それもゲームの時ではなく、こちらに来てからのこと。顔を知った相手に、一方的に通信を送りつけることは出来ないということになる。

「ふう……」

大きく息を吐いて、ズクンと重くなる頭に手を当てた。どうも念会話というものは脳辺りに負荷でもかかるのか、長時間通信していると頭痛に似た感触を感じるようになってくる。

ライアさんはその辺りのことも考えて休むように言ってくれたのだろう。本当に気遣いの人だと思う。

頭に当てた手を動かしていき、早く頭痛がなくなるようにマッサージしつつ、大部屋から私個人に割り当てられた個室へ向かう。

手が髪とは違う手触りの部分を探り当てた。見なくても分かる。

頭の上にある三角形の獣毛に覆われた耳、これが今の私の耳だ。

折悪く、大部屋の壁にかかっている大鏡に自分の姿が映った。

考えてみれば、どんな拠点にも必ず一枚は鏡がある。まさかゲームの製作者はこれを意図していたのか？ いえ、考え過ぎね。気落ちしているとどんな事でも疑わしく思え、疑心暗鬼に陥ってしまう。今の私は巫女姿の狐耳少女、と一言で説明出来てしまうなりをしている。

えんじ色の袴に白衣といった純和風の着物に、足元は編上げのブーツという和洋折衷じみた姿。白衣の背中と両袖には陰陽の太極図が描かれているから、巫女というより大陸系の道士という方が正解かもしれない。

銀色の髪の上に三角形の獣の耳、お尻からは銀色のフサフサした尻尾が何本も出ている。これら耳と尻尾はこっちの思った通りに動くし、手が触れた感触もある。イミテーションでも飾りでもなく、これが私の体の一部になっていることを如実に伝えている。

ゲーム時代の知識でいうなら、妖狐族が私の種族になる。術に長け、獣人系ならではの身体能力も程々にあり、動きまわれる魔術師系の育て方が理想的と言われる。

キャラクターが育てば、最初は一本だった尻尾が数を増やしていき、最終的には九本になるのも特徴のひとつ。私の尻尾の本数も九本。これでも長く『水鈴』を育ててきたつもりだ。私自身がその水鈴になるとは思ってもよらないことだったけど。

この拠点にいる他のメンバーもみんな種族こそ異なるが、獣人系統で統一されており、みんな女性という点で共通している。『幻獣楽団』とはつまり、獣人系女子限定で結成されたチームなのだ。

リーダーのリアさんが、「女性のプレイヤーがもっと可愛い恰好で楽しめるチームを作りたい」と言いだして結成されたチームであり、ゲーム内で話題になったこともあった。

ネットゲームをプレイする男女比の傾向として、ポップな絵柄のライト級ゲームの方が女性プレイヤーが多く、頭身の高いリアルな絵柄で硬派なゲームほど男性が多いのが一般的だ。

『エバーエーアデ』の絵柄はリアル系のため、やはり男性の占める割合は多い。比率にしたら女性一に対して男性は二ぐらいだろうか。人気の高いゲームであるため、それでも比率は縮まっている。

そういった環境では女性は自衛のため地味な装備をしたり、男性

キャラを作ってオナベプレイをしていることもある。けれど本心では可愛い恰好、ファンタジーっぽい出で立ちをしたいと考えている人は多いはず。ライアさんのチーム結成の考えは、可愛い格好をしたい女子にその場を与える事を意図していた。

お陰で結成して数カ月でメンバーの数は膨れ上がり、大所帯チームの一つとなってしまう。

結成メンバーの一人である私としては、もう少しじんまりとしたチームの方が好きだった。特にこんな具合にゲームだった世界が現実として襲いかかってくるような非常事態だとなおさら強く思ってしまう。

声をかけてくれるメンバーに適当に声を返しつつ、大部屋からメンバー個人用の個室に入り電灯を灯す。夜も遅く暗いこともあるが、ここは昼でも暗いため灯りは欠かせない。電気が生きていたのは嬉しいことだ。

上階が雑居ビルとなっている地下式の拠点が『幻獣楽団』の本拠地となっている。入口は非常に分かりにくい場所にあり、メンバーにならなければ場所を明かされない。女子の自衛策の一つだったんだけど、今回の混乱ではそれが功を奏して拠点が襲撃されるということは一切なかった。

反面、地下にあるせいで広い面積を取る事はできないため、個室の広さは狭く畳換算で三畳ぐらい。上等なカプセルホテルほどの広さしかなかったりする。

けれども、私個人に限ってはこの狭さが心地よかった。四方を壁に囲まれていると閉塞感よりも安心感を覚える方なのだ。

部屋に入るなりブーツを履いたまま、個室の中で一番面積を取っているベッドに倒れ込むように飛びこんだ。袴や白衣がシワになるけど、それに気にする精神的な余裕はなかった。とにかく横になりたかった。

「あ〜う〜……ケモミミ少女って見る分には可愛いけど、自分があると大変かも。おまけに持っている服全部和服だし、面倒」

ボソリと愚痴を呟いてみる。

唯でさえ女は身だしなみに気を遣うのに、慣れない和服の上に尻尾や耳の手入れまで加わる。しかも私は尻尾が九本だ。普段行動するときは尻尾を一本にまとめることは可能だけど、手入れするときはやっぱり九本全部を相手にしなくてはダメらしい。

普通の髪とは違って、犬猫用のブラシで丁寧に漉いていくのが望ましく、ノミやダニが住み着かないように気を配らなければいけない。

漫画やアニメに出ていたキャラクターもリアルな視点で見るとこんな苦勞をしていたのかもしれない。そんな益体もないことを考え、ゴロリと体をベッドの上で転がす。

地下にあるせいか布団が少し湿っている。今は干す時間も余裕もない。これは魔法とかでどうにか出来ないかしら？

「あ……」

身体を転がしたことで目に入ったもの、それを見て思わず声が漏れてしまう。

壁にピンで留められた一枚の写真。元はゲーム画面の一場面を静止画で保存するフォト機能によるもので、それを個室の装飾として貼り付けたもの。でも機能云々よりも映っている対象が私の胸に大きなうずきを与えてくる。

映っているのは私ともう一人の獣人系の女の子。人狼族の特徴を持った耳と尻尾、くすんだ金色の体毛。何より印象的なのは満面の笑顔をこちらに向けているところだ。隣で仏頂面をさらしている私とは大違い。

こちらに転移してきた人の顔の造形は元になった人物の要素が強く出る。この笑顔一杯の顔も私が良く知っているものと違いはなかった。

「桜」

まただ、また鬱になりそう。こうなるからみんなに迷惑をかけないよう考えずにいたのに、結局心配で心配で気を揉んでしまう。

こっちではベルという名前でエントリーしている桜は、リアルにおいてもゲームにおいても大の親友……ううん私、鈴岡楓にとって愛しい人だったりする。

中学の時に知り合い、同じ趣味で意気投合し、趣味に関係したイベントにも何度も二人で参加したり、高校も同じで、そのうち友情だけじゃ満足いなくなつて、求めて、求められて……過去を振り返るとかなり恥ずかしいヤツだ私は。でも、桜は私の一番の人というのは間違いない。

人見知りする私とは正反対で、明るく活発で社交的な桜。同じ趣味だとは思えないほど運動ができて、部活動に入らないのが不思議なくらい。本人は「体育会系のノリは苦手です」と言っているけど、あれは私に気を遣っていたと思う。そんな桜に私は好感をもっていた。

ゲームの『エバーエーアデ』に誘ってきたのも彼女からだつた。

私の人見知り克服のためと称していたけど、実は友達紹介キャンペーンで渡される特別装備が彼女の狙いだった。それが後になって分かり、丸一日口を利かないケンカをした過去もあつたけど、今となつては良い思い出に昇華されている。

尻尾を動かし、一本だけ顔の前にふあさ、と持ってくる。お尻の付け根に不器用な手が生えたような感覚で、その指の一本を動かす

感触で尾を操る。

その尻尾は他の尻尾と違い、赤いリボンを巻いている。これがくだんのお友達紹介で手に入る特別装備で、名前もそのまま『友情リボン』と捻りがない。当初はケンカの素だったけど、桜との繋がりが感じられる大切なリボン。ゲームがリアルになったことでそれが一層鮮明に感じられる。

両手を伸ばして、尻尾と一緒に抱きすくめるように触れる。

女の子同士の恋愛なんてままごと、なんて言う人がいるけど私は真剣だ。ままごとでこんなに胸が締め付けられる気分になるはずがない。

「——あいたい」

私がこちらに来てから四日が続いている。でも、桜の姿は見えていない。

彼女の所属するチームは当然ここ、『幻獣楽団』だ。けれど転移してから誰も桜、つまりベルの姿を見た人はいない。先のように個人差で転移してくる時間が違うことも考えられるし、そもそも転移してこないことだって考えられる。

後者だったらすごく寂しい話だけど彼女は安全。でも前者だったらいっ来るのか、どこに来るのかで気を揉んでしまう。

私達がこちらに来た翌日には街で暴動が起こってしまい、ジアト一の街は滅茶苦茶になっている。こんな中にベルが右も左も分からず転移してくるのは危険すぎだ。一刻も早く見つけて保護したい。したいのだけど、ジレンマがある。

右も左も分からないという話は私達にも当てはまる。ゲームと同じところ違つところ、まずそれが分からず右往左往しているところにこの混乱。みんな身を守ることと精一杯で、チームで固まって籠っている今が一番安全だったりする。

この世界はゲームとは違つてとことん現実的な状況になっており、何もしなくても衣食住が必要とされる。それをチームのみんなに行き渡らせるためにリーダーのライアさんをはじめ、メンバーの各員が役割分担で作業をしなければチームは維持していけない。生活する基盤を最低限作つた上で身を守り、偵察をして、脱出プランを練つていく。それが楽団の当面の目標になっている。

そんな中で私だけベルを探しに街へ行きます、なんて言えない。間違はなくベル（桜）は私の一番の人だけど、楽団のみんなも放つてはおけない。人見知りをそこそこ克服した私にとってここは居心地のいいところだし、いまの非常事態の中ではこの場所を守りたいという思いも湧いている。

どちらを優先するか、というジレンマが私の中で渦を巻いていた。ベルが現れたという話は聞かないので楽団のことを優先できるけど、もしどこからかベルの行方について報告がやってきても私は平静でいられるだろうか。

気鬱な気持ちを抱えてベッドの上をまた転がる。眠気は当面やってきそうにない。

今の自分の気持ちを一文字で表せるなら鬱、である。まったく、この文字を考案した人は偉大だ。見るからに複雑でゴチャゴチャした胸の内を見事に文字の形で表している。

そして自分の手の中で分解されている銃器も複雑でゴチャゴチャしている。『モーゼル・タイプ712』はそれほどに厳しい代物であつた。

「モーゼル兄弟にもの申したい。あなた方の作つた銃は複雑すぎま

す」

ネジで留めている部分はグリップの「一か所のみ。後はほとんど寄木細工みたいに部品が複雑に噛み合っている。だからネジ一本外せば特別な工具なしで完全分解まで出来てしまう。それは軍用としては利点だが、いかんせん複雑すぎて分解手順を誤ると、組みあがった銃の横に部品が余ってしまう光景になる。しかも部品が多い分、動作不良　ジャミング　を起こしやすい。

現在のモーゼル拳銃が完全にコレクターアイテムになっていることを思えば、実戦における信頼性は推して知るべしだ。

「こんなことになると思っていたら、モーゼルなんて選ばなかったのに」

自分も他の好事家同様、モーゼル拳銃は好きだし、撃った事もある。現代のポリマー製にはない鉄と木による魅力的なシルエットが美しく、多くの漫画やゲーム、アニメでこの銃が登場するのも頷ける。だから『ルナ』に二挺拳銃で持たせたのだが、ここで裏目に出ってしまった。

実戦はシビアだ。水の中、泥の中、砂埃、低温高温と戦いの場所はどこにでもある。それらの環境に放り込まれてこの銃がきちんと作動するか疑わしい。この点では現在の銃は非常に進んでいる。戦場にどっちか持って行け、とグロックとモーゼル拳銃を並べられたら自分はグロックを迷わず取るだろう。趣味と命は天秤にかけられない。

けれど現状あるのはモーゼルだけ。なら稼働率を維持する努力をしようと、訓練も兼ねて分解清掃を試してみた。けど、ここまで複雑な銃をいじっていると気が塞いで鬱になってしまう。

「手入れも考えて、己の武器を選ぶべきだったな。主」
「ぐうの音もでません」

隣で丸くなっている使い魔に正論を言われてしまい、反論の余地がない自分は肩を落とすしかない。

しかもさらに鬱なことに気難しいのはモーゼル拳銃だけではなく、ウインチェスターもそうだったりする。

散弾銃用の弾薬とウインチェスターのレバーアクションという作動方式の相性は悪く、手入れを怠ったらこれまた作動不良になりやすい。手持ちの銃の内、普通の感覚で扱えそうなのはスプリングフィールドとバックアップ用のリボルバーだけとは涙が出てきそうだ。

もちろんゲーム『エバーエーアデ』の設定が反映されているこの世界のことだ、こちらの銃が自分の知っている銃と同じ性能、同じ整備性とは限らない。でも樂觀視して命を預ける武器の手入れをしない、という馬鹿な話はない。

マイナス思考をしやすいのが自分の悪い癖だが、今はそれがうまく回っている。当面は慎重さを重視していこう。

頭で思考を回しながら、手は銃の分解清掃を進める。バッグに入っていたクリーニングキットで火薬カスや汚れを落としていき、要所に油を差して銃身をブラシで清掃、余分な油はボロ布で拭き取り、一通り終わればこんどは組み立て。すごい人になるとこの分解組み立てを目隠しでやれるが、自分はそこまで至れない。部品の多いモーゼルが相手ならなおさら。ブラインドなんて無茶な話である。

分解に八分、組み立てに五分と時間をかけて一挺のモーゼルを組上げる。不慣れなこともあるが、これがもう一挺ある。

「ひとまず一挺終わり」

息を吐きつつ銃のグリップを握り、不備はないか検める。

外見に異常はない。部屋の白熱電球の明りに照らされたモーゼルは、鉄と木で出来ている銃器ならではの光沢をもって凶暴性を前面に表している。

引き金の前にあるマガジンハウジングには幾何学的な紋様の彫金が施されており、ゲームではこれが魔法行使の際の補助になる設定があった。でもそんな機能は抜きにしても、彫金含めて銃器の外見は美しい。この感覚は博物館に展示されている日本刀を見た時とそっくりだ。悪く言い換えると、骨董品を相棒にこれからの鉄火場を潜っていかなければならないとも言つ。

ボルトを引くなどして作動も見て、不備がないことを確認するともう一挺のモーゼルにとりかかる。と、ここでバスルームからマサヨシ君が出てきた。

今の彼はさつき見た全身鎧の威圧感に溢れる姿から、清潔なシャツにハーフパンツ、首にタオルと実に涼しげだ。その体からは湯気があがり、一目で湯上りと分かる。

「ふう、さっぱり……。あ。すみません、ルナさん。先にシャワー使つてしまつて」

「別に謝る必要はないよ。ここは君の部屋なんだから」

「そうっすか。じゃあ、次シャワー使つて下さい」

「分かった、ありがとう。これが一段落ついたらそうする」

「ええっと、手入れっすか？」

「そう」

床に敷いたマットの上で銃の手入れをしている自分をマサヨシ君は物珍しそうに見ている。

シャワーを浴びたことでさっぱりした身なりになった彼の巨軀からは石鹸の匂いが香る。今までの混乱で汗まみれ、ホコリまみれ、血まみれの拳句にゴミ箱の中に入って隠れていたというマサヨシ君

の体は、拠点に運び込んだ当初かなり臭っていた。彼の名誉のために言わないでいたが、シャワーを浴びてくれたのはありがたい。

ジアトーの市街地では水道が引かれており、ボイラーによる給湯も可能になっていた。電気すら通ってもいた。

それも今回の大暴動により、地下にある水道管は各地で破裂して、ボイラーも流れ弾や魔法で破壊され、電線も寸断してまともに機能できる電化製品はないと思っていた。それがここでは事情が違っている。

軽く調べてみたが、水は拠点の屋上にある大型の水槽に溜められており、ボイラーは浴室に収まる小型のもので、電気は拠点の地下に蓄電池らしきものがあるらしく問題なく電灯が点いた。彼の部屋は見かけだけではなくインフラも無事だったのだ。

これを見たマサヨシ君は「変なところで運が良いや」などと言って苦笑いしていた。

ここを今夜の宿と定めたら、他の部屋からも調達したカーテンで窓を二重に蓋して光が漏れるのを防ぎ、浴室のボイラーに火を入れる。後はこの混乱で汚れた体を洗えば、十分な睡眠をとるばかりだ。そして現在、シャワーを浴び終えたマサヨシ君はモーゼルの分解清掃をしている自分の様子に興味津々で覗き込んで、正直とてもやりにくい。

「おお、なんかガンアクション映画のワンカットみたいすね」

「マサヨシ君、他人事みたいに言っている場合じゃない。君も自分の得物の手入れはするべきだ」

「えっと、やっぱり必要ですか」

「ゲームと違って武器や防具は消耗するよ。使い捨てにするなら話は別だけど、長く使うなら研いだり油を引いたりする事は必要と思う」

「う、うつす」

彼にも思うところはあるのか、こっちの言葉ひとつで身を引いて戦斧と槍斧をロッカーから取り出して手入れを始めた。短い付き合いだけど、マサヨシ君は基本的に素直な人物だと分かるようになってきた。

こうしてしばらく自分のモーゼルをいじる音と、マサヨシ君が油を斧に引く音が部屋を占める。すぐ隣にはジーンが小さく状態で丸くなって目を閉じている。時折、耳が動いているところ見るとまだ起きてはいる。

——不思議な気分だ。さっきまで気鬱に感じていたモーゼルの分解が穏やかな気分で作れている。街の状況は酷いものの、この場所だけ穏やかな雰囲気というのも変な気がする。第一、他人と一つの空間を共有する経験はここ十年近くはなかった。

他者の存在などが煩わしくて半ば引きこもり生活をしてきた身としては、異常事態の中にあるとはいえマサヨシ君という他人を許容している自分が少し信じられない。

案外、自分も人との触れ合いを心のどこかで求めていたのだろうか？

むう、そんな月並みな人間だったか『僕』も。

二挺目のモーゼルは最初の一挺よりも早く組みあがった。

不備がない事を確認して、弾倉を入れてホルスターに収める。他の銃は後日だ。

立ち上がり、さっきのマサヨシ君の言葉に甘えることにする。自分もマサヨシ君ほどではないが、体を清めた方がいい状態だ。『ルナ』の住処からは替えの下着とタオルをバッグに詰めてきているので、このままバスルームに直行しても問題はなさそうだ。

「じゃあ、シャワー浴びてくる」

「了解つす……って、銃をもったまま？」

「用心のためだ。不用意に覗けば風穴があいたりする」

「覗きませんって！」

うん、思った以上に反応が大きいな。少し面白い。

冗談めかしてみたが、用心のためというのは本当だ。入浴中に暴徒の襲撃があった時、手元に武器があるのは望ましい。こんな事を想定しなければうかうか入浴出来ないのがこの街の現状だ。

「その辺りは君の紳士さに期待している。ジン、一緒に入る？」

自分が声をかけたことで目を開けた黒猫姿の使い魔は、気だるい様子のままこつちを見やり、次いでマサヨシ君を見てから首を振った。

「いや、せつかくの主の誘いだが結構だ。このデカブツが血迷わないよう見張っておくさ」

「てめえ、オレに何か恨みでもあんのかよ」

「別段、大したことではない」

マサヨシ君がジンを睨み、ジンがそれを受け流す構図が一瞬でできた。どうにもこの二人は仲が悪いようだ。なぜだろう？

「じゃあ、ジンは後でブラッシングするでしょうか。それとケンカするのは構わないけど、静かに頼む」

静かにするよう二人に言い置いて、バスルームに入った。手近にある鏡にはどこか楽しそうな表情をしている少女が映っている。これが自分だと分かるのに丸一秒かった。

姿もそうだが、楽しそうな顔をしているのが自分だとは思えない。
口元に手をやってみる。

「笑っている？ 私が？」

口角がわずかに上がっているのが分かる。作り笑いではない心からの笑い、なんて何年振りだろうか？ 人とともに会話していない期間よりも長いことは確かだ。

人とともに会話する機会と笑いがある時間が久し振りに自分にやってきた。それがこんな異常事態の下というのも皮肉なものだ。

「神様という奴は、いるとしたらとんだ冷笑家だ」

服を脱ぎにかかる。この時にはもう顔に楽しげな気配はなくなっていた。

いつの間にか寝入ってしまったのか、沈んでいた意識を浮上させたのは扉の向こうから聞こえるライアさん達の言葉だった。

意味の聞き取れない雑多な音の中で一言、ある台詞が私の耳に入り銀毛の狐耳を動かした。

——ベルさんを目撃した子がいる。

「っ！」

瞬間眠気や疲れは吹き飛んで、ベッドから跳ね起き、扉を蹴破る勢いで開けた。

大広間にいた人たちの目は残らず私を見ている。寝起きの姿は恥

ずかしいものだけど、身だしなみ以上に大事なものが私にはある。
ライアさんはさつきと変わらない位置にいた。彼女も驚いた様子
でこっちを見ている。けど、すぐに察したような表情に変わった。
大股で彼女に詰めより、話を聞き出す。

「桜、じゃないベルは見つかったのですか!？」

「落ち着きなさい、って言っても無駄か。ええ、目撃情報が帰還途
中の偵察メンバーから寄せられてきたの。場所は海沿いの倉庫街…

…」

「スイマセン、ライアさんっ！ 後をお願いします」

「えっ……ちょっと待ちなさい！ 水鈴！」

場所を軽く聞いただけで私の足は拠点から外へと飛び出していた。
ライアさんの止める声を当たり前のように無視して。

寝つく前、ベルの報告が入ったら私は平静でいられるのか、とい
う自問にはもう回答が出ている。

平静でいられる訳がなかった。『幻獣楽団』の誰よりも大切な桜
は、私にとって誰よりも優先される存在。本当はジレンマするま
でもないことだった。

「こんなことなら」

こんなことなら楽団を無視してベルを探しに街へと行けば良かった、という思いも湧いて出る。転移した先が楽団の拠点だったため
にライアさんに従ってきたけど、これが街中だったらもっと違って
いたと思う。きっとベルの姿を真っ先に探そうとして……暴徒化し
たプレイヤーに殺される未来しか見えない。

「――」

身の安全を考えたらチームにいて正解だった。でも、ベルの事が知れない状態は苦しい。苦しくて、耐え切れない。

ジレンマという天秤の針は思ったよりも簡単に振り切れていた。

外に飛び出してすぐに感じることは、空気が刺すように冷たいということ。次いで、空気に混じって様々な臭いが鋭敏になった鼻を刺激する。

潮の臭い、瓦礫の土臭さ、そして火薬の臭いと血の臭い、肉が腐った臭い。この臭いがベルに関わるものじゃない事を願って、私は海岸へ体を疾走させる。

あてはあった。今まで転移してきた人達の報告をまとめてきた中で、私の中で一つの仮説が出来ている。

こちらに転移してくる人達は、ゲーム時の最終ログアウト地点からやってくる、というものだ。

『エバーエーデ』では、ゲームのログアウトは街中ならどこでも出来るようになっていた。こちらに転移してくる人達の話の総合してみると、最初に立っていた場所がゲームでログアウトした場所であることが分かった。

拠点を持っている人はその拠点でログアウトするのが一般的で、私が楽団の拠点に転移したのも当然だった。拠点を持っていないフリーの人は、街路とかでログアウトすることがほとんどで、混乱前に道で座り込んでいた人達はそういった人々だった。

ライアさんにもこの仮説は話していて、知り合いを捜す手がかりになっている。私もその方法を探ることにした。

ベルと最後に話をしたのは私だ。

当時、彼女とは街中を移動しながらお喋りをしていたのだが、突然ログアウトすると言い出してきた。

親にゲームを止められそうになっており、今日はこれ以上プレイ

するのは難しいとその場でログアウトしてしまったのだ。確かに桜の親、特に母親は厳しい人だったと覚えがあつて、桜も大変だなあと彼女の境遇に同情なんかしていた。

転移があつたのはその直後だ。彼女が再びログインすることがなかったのなら、その場所にベルはいる。

その場所は海沿いの倉庫街の一画。ライアさんが言っていたことで仮説は確信に変わる。

元の自分では、いえ人間では考えられない速度で身体が疾走する。明かりがほとんど無い夜の街でも明瞭に周囲の事が把握できる。障害なんてない、速く、もっと速くと思はそれだけを言い続ける。

「ブーストスベル
増強呪紋——発動っ」

思考の中で速く動くための方法を選択。脳裏に浮かんだ術式に迷わず力を込めた。転移してから初めて魔法を使っているのに、呼吸をするように当たり前に使っている。

視界を流れる風景の速度が倍になる。脚が燃えるように熱く、気が付けば地面に手について獣のように四肢で走っていた。構わない、桜と会えるなら。

程なく、ベルがログアウトしただろう場所に辿り着いた。急停止して辺りを窺う。見える範囲に人影はない。ベルもいない。

場所は間違っていないはず。画面越しとリアルの差はあっても周囲の倉庫街の特徴に差はない。

レンガで出来た古いタイプの倉庫が建ち並び、向こうにクレーンがあつてと特徴に事欠かない。この辺りのはず。それとも情報は間違いで、まだ転移していない？

ここまで走って乱れている呼吸を静めて、冷たい夜の空気を吸っていると、嗅いだことのある匂いが鼻をくすぐった。

「あつち!？」

匂いの出所は立ち並ぶレンガ倉庫の一つから。海沿いにはない匂いはとても分かりやすい。

この匂いは桜が好んで使っているオーデコロンの薰り。高校に入ってからよそ行き用のオシャレにと、一緒に選んだものを彼女が使っていた事を思い出す。その柑橘系の匂いが不自然に倉庫からしていた。こんな距離でも分かってしまう身体の異常さは、私にとってひたすらにありがたいので深く考えない。

それにコロンの匂い以上に気になる臭いがそこからしている。汗の臭い、生臭い何かの臭い、そして血の臭い。

嫌な予感が湧いて出る頭を振り、倉庫の扉を一気に引き開けた。

扉を開けると同時に臭いはきつく、悪臭の域に達する。

倉庫内の明かりはランプが一個。それでも中は十分に見て取れる。見えてしまう。

これが悪夢か、幻だったらどんなに良かっただろう。

「……さくら」

倉庫内に積まれている木箱を並べ、そこを粗末なステージにして陵辱は行われていた。

五人の半裸の男が一人の女性を黽っている。

偵察に出ていたメンバーから報告として寄せられた内容がいくつもフラッシュする。こんな馬鹿な真似をする連中が街を闊歩していると頭では分かっていた。でも、それが目の前で見せつけられると言いだない感情がふつふつと湧いて出てくる。

扉を乱暴に開けたせいで五人の男の視線は残らず私を向く。けれ

ど髑られている女性の目は虚ろで濁っていた。

見れば、彼女の胸には短剣が突き刺さっており、手足も根本からなくなっている。

その顔は桜にとても良く似ており、もう二度と動く事はない。

「うそ……嘘だよね」

「おお、追加の女の子がやってきたぜ」

「運がいいな。こいつはもうぶっ壊れてしまったし、ちょうど良かった」

「誰だよ、ダルマにしようぜなんて言いやがったバカは。お陰でもう死んじまったぜ」

「いいじゃん、今度はこの子を可愛がればいいんだし」

「巫女さんはオレ的にストライクっ！ キツネミミでもあるし、もうドストライクだ」

「言ってるキモオタ」

男達が何か言っているけど私の耳には届かない。聞く気はない。

こんな連中の言葉なんて聞くに値しない。

ふつつつと湧いている胸が、今度はごうごうと燃え盛るものになる。そうだ、これは怒り。それも相手を殺したくなるほどの明確極まりない殺害意思の感触が胸に渦巻いているんだ。

かちり、と頭のどこかで何かのスイッチが入った。あるいは人として大切な部分にかかっている錠前が外れた感じ。

人によるけど、ある怒りの地点を過ぎればいやに冷静になってしまふ時がある。

今がそう。衝撃から立ち直った私の頭は、こいつらをいかに速やかに殺し尽くすかで思考が高速で回っていた。

「よし、可愛い子ちゃん。こっちに来てオレ達とイイコトしようぜ。返事は聞かないけどな」

「はははっ、ひでえ」

一人の男が下半身むき出しでこっちにやって来る。他の男達含めて彼ら全員無防備な様子だ。

今まで何人も蹂躪してきたのだろう。奪うことに躊躇う様子は無い。そして私が攻撃してくるなど考えもしていない。それはとても好都合なことだ。

やって来る男に対して、私も彼にゆったりと歩み寄る。もともとそんなに広さのない倉庫の中、すぐに距離は縮まった。

少し戸惑った表情を浮かべる男に私は手を伸ばして、彼のむき出しの股間に手を当てる。

「お」

こちら行動に一転好色そうな顔をして、だらしない表情になる男。こちらにもニツコリと笑みを作る。隙作りは十分。

彼に送る言葉は一言だけ。

「死ね」

その一言の直後に手の平に炎を作り出し、男の下半身を焼く。

攻撃呪紋のうち、炎属性の一つ。手から生まれた超常の火は着火した対象を焼き尽くすまで消えることはない。

「ほつつぎやあああ」

股間を燃やされ、絶叫しながらのたうち回る男。周囲も彼を見て一瞬何が起こったか理解できていない。

その隙を見逃す理由は何処にもない。

素早く近くで棒立ちになっている男に駆け寄る。同時に振りかぶ

る腕に増強呪紋をかけ、筋力を水増しする。

こっちに気付いた時には遅い。男の顔を鷲掴みにしてアイアンクロー。それだけで終わらず掴んだ頭を無理矢理ひねり、力任せに胴体からむしり取った。

骨が鳴り、肉がぶちぶちと千切れる感触が手に伝わる。熱い、熱い液体が身体にかかった。

「こ、こいつっ」

いち早く立ち直った男が半裸のまま、手近に置いた武器を手に取りろうとしている。

私はむしり取った頭を無造作に投げつけた。行動を一時止められれば良かったのだけど、生首と顔を合わせたせいか身体が固まったみたい。

実に好都合なこと。遠慮無く、その男の頭に手を当てて燃やした。

「く、来るな！ 来たら殺すぞ」

残り二人。一人はベルの身体に抱き付いたまま固まっている。うん、惨たらしく殺してあげよう。

もう一人は鉄砲をこちらに向けて喚きだした。ゲームでは銃器も武器に入るけど私は詳しくない。精々、相手が持っているのは回転式拳銃だというぐらい。他の大きな銃器の数々からすると見た目には貧相に見えてしまうが、あれでも私を害するには十分な火力があったはず。

でも、今の私には恐れるに足りない。委細構わず銃を持った男に歩み寄る。

「来るなっつてんだろ！」

引き金が引かれ、爆竹が弾けたような音が三回。飛んでくる金属の弾丸。くるくる回転して向かってくるそれを、尻尾ではたき落とした。

「は？　なんだよ、そりゃ」

学習能力がないのかももう二回引き金が引かれ、二発の銃弾が飛んでくる。それも尻尾ではたく。

もともと敏捷さの数値が上がりやすい獣人は神経の伝達において優れている。だからか、飛んでくる銃弾をかわしたり弾いたりという芸当だって出来てしまう。自身の肉体に馴染めばこのくらいの真似はやれてしまう。

ここにきて『水鈴』の身体にこれまで付きまどっていた違和感がなくなり、私〃水鈴は当然のものとなっていた。

「なんだよそりゃ……化け物め」

弾切れなのか、カチカチと銃を鳴らすだけになった男の頭に優しく手を当てて、今度は思い切り下に押し潰した。重圧呪紋も加味してかけられたプレスに、男の身体は一瞬でぺちゃんこに成り果てる。それは車に轢かれた力エルが真っ先に思い浮かぶ有様。

「た、たす……助けて」

「桜から離れなさい、ゲス」

残る一人はまだベルの身体に抱き付いている。顔中から色々な液体を出して泣き出している。これで失禁などして、桜の身体にかけたら楽には死なせない所存だ。

「助けて」

「だから、桜から離れろって言っているんだけど。聞こえない？」
「離れる、離れる。だから助けて」

二回目でようやく男はベルの身体から離れてくれた。放り捨てるような離れ方なのが氣にくわないけど、男にはまだ用事が残っている。

四つん這いで床を這うように逃げ始めた最後の男。そいつの首根っこを掴み上げ、これまた力任せに壁へと押しつける。

「が、はあ……お、おい、離れたら助けるんじゃ」

「そんな事、一言も言っていない」

「そんな、助けてくれよ」

「やだ」

これ以上男と話しても無意味なものでしかない。早々に処刑することにした。

押しつけた姿勢のまま男の腕を取り、増強呪紋で増した腕力にまかせて腕をむしり取る。顔に返り血がかかるし、男の声がともうるさくなっただけ、作業だと思って事を進める。

もう一方の腕もむしり取り、脚も膝から下を捻り取る。この辺りから男が急に静かになってしまった。様子を窺うと、どう見ても死んでいる。

「あ、死んじやった」

出血と痛みからショック死したようだ。私としてはもっと惨たらしくする予定だったのに、酷く肩すかしをくった気分になる。

でも、もうこんな男の事なんかどうでもいい。ぱいっとそれを捨てる。そんな事よりも桜のことだ。

駆け寄り、彼女の身体を抱き上げる。壊れないようにそつと。手足がないせいか、やけに軽い。

「ベル……桜、死んじゃったの？」

彼女の体は血と男達の体液で汚れ、可愛らしく見える人狼の耳と尻尾も無残なものになっている。慎ましやかな乳房には短剣が突き立ち、これが直接の死因だと目で分かる。

そう、死因。ベルはどう見ても死んでおり、回復呪紋でも生き返らせることなど不可能なことである以上、彼女の死亡は絶対のものになった。

「間に合わなかった」

あんなに急いだのに間に合わない現実に力が脱けていく。ライアさんや、偵察に出ているメンバーを罵ってしまいそうな衝動、間に合わなかった私自身を襲う呪いたくなるような後悔、ベルが死んでしまった喪失感。その全部が身体を締め付ける。

彼女の身体を抱きしめる。こうして抱きしめるのは一週間ぶりだけど、とてつもなく過去の出来事のように。くすんだ金色の髪からは、血の臭い、生臭い男の臭い、そして彼女が好きだったオーデコロンの匂いがした。

このまましばらく時間が経つに任せていると、今度は彼女をどうしようかという考えが浮かんでくる。

ベルをここに放置する気にはなれない。これ以上彼女の身体を傷ませるのは論外だ。かといって、楽団の拠点に連れて行ってもいい顔はされない気がする。何より私は、誰にも桜に触れて欲しくない。とれる手段は限られていた。その中で取れる最も良い方法を私は選ぶ。

「……じゃあね、桜」

さようならの意味を込めた口づけをして、彼女の身体から離れた。脳裏に術式の図形が巡り、突きだした手に熱が生まれる。

選ぶ魔法は火炎呪紋。それを調整して、小範囲に最大の火力を集中させて溶鉱炉並みの温度を一瞬で発現させた。目にも眩しい炎がベルの身体を包み込み、間もなく灰も残さず彼女の肉体を消し去ってくれることだろう。

ベルの身体をこの場に残すことも、誰かの手に渡すこともしたくない私にとって、これが最良の方法だ。

ひどい、ひど過ぎる悪夢である。なんでゲームの世界に来て、なんで暴動が起きて、なんで桜は殺されて、なんで私は彼女を茶毘に付すことになっているんだろう？　いつまで経っても覚めない夢はどこでクリアすればいいのか分からない。

あれほど熱くなっていた身体は冷え切り、立っている気力もなくなりペタリとその場に座り込む。

ベルの身体を燃やした炎は上へと焰を伸ばす。それに付られて私の視線も上へ。今になって初めて分かったけど、倉庫の天井は屋根なしになっていた。あの混乱で屋根が何らかの理由で吹き飛ばされたみたい。

見えるのは透き通るほどに綺麗な星空だった。空を焦がすように炎が昇っていく、まるでベルが空に昇るように。

胸にまたも渦巻くものがあつた。今度は怒りではないなにか。何なのか分からないまま、私は空を仰いで口を開いていた。

『ライアさん、現場まではもう数分で着きます』

『ええ分かった。あの子にとっては情報はあれだけで十分ってことか。あちやゝ、ミスったわ』

『見つけたら連絡します。じゃ』

『ええ頼むわ、雪』

夜のジアトーの街を走り抜けていく。念会話からもリーダーの切迫ぐあいが分かってしまう事態だ。

あたしが帰還途中で道をふらつく人影を見かけたのが始まりだった。その時は帰還を急ぐことを考えていたから、深く考えることなく楽団の拠点に戻ったけど、それがいけなかった。

帰還してからデブリーフィングの意味で軽くリーダーに報告して、次いで帰還途中で見かけた人影について話してみた。

それがどうもウチのチームのメンバーの一人だって事が分かり、どうしたものか？　っていう話になった時、部屋から水鈴さんが血相を変えて飛び出してきた。でもって、リーダーから軽く話を聞いただけで外に飛び出していく無茶をしてくれた。

水鈴さんは普段は大人しそうな人のはずなんだけど、あの時の表情は怖かった。

ライアさんから深くは聞いてないけど、あたしが見つけたメンバーとかかなり仲が良かったという。それも友情ではなく、愛情の方で恋愛なんてまだ経験のないことであるあたしにとっては、女の子同士の事は未知の世界だ。水鈴さんはどういう気持ちで飛び出していたのか、推し量ることは難しい。

大まかに倉庫街と言われる場所についた。走って十分ぐらい。これは獣人ならではのタイムで、他の種族だったらもう少しかかる。

さて、水鈴さんはどこに？ と見渡す必要は無かった。倉庫の一つから真っ赤な炎が上がっている。今のこの状況で、彼女と無関係とは考えにくい。

足を止めることなく、倉庫の中へ。直後――

――！！

それは人の声ではなかった。獣の咆吼と呼ぶべき大音量の音が倉庫の中から上がり、あたしは思わず耳を塞ぐ。

音はすぐ止み、キンキンする耳を押えつつ中をしてみる。

「うわぁ……うぶ」

耳にやった手を、今度は口に当ててしまう。何人かの男性が燃やされたり潰されたりと、かなり惨い状態で死んでいる。偵察メンバ―として街のあちこちで起きている酷い状況を見てきたあたしでもこの光景には目を逸らしたくなる。

なまじ鼻が良いものだから肉の焼ける臭いや、血の臭いが嫌でも鼻に入り、夕食を戻しそう。それでも彼女はこの中にいた。

「水鈴……さん？」

倉庫の中で赤々と燃えている炎の前、こちらに背を向けている九尾のシルエットに声をかける。声を認識してくれたのか、ゆっくりこちらを向いた彼女にあたしは声を失った。

どんな声をかけたら良いのか一瞬で分からなくなった。

血で全身が真っ赤になり、目からは涙を流し、力なく微笑んでいる様に見える水鈴さん。

触れれば壊れてしまいそうな、そんな儚いものを前にあたしはど

うすることも出来ない。ただ、動けなかった。

見つめ合った時間がどれほどか、ふつつり糸が切れたように水鈴さんの身体が横倒しに倒れた。余りに自然すぎて倒れたことに気付くまで数秒かかってしまった。

「って、水鈴さん」

慌てて駆け寄る。何がどうなっているのか全然さっぱりだけど、このままにはおけない。

あたしは水鈴さんを担ぎ上げる。報告はまだ後回しにしておいて、移動するところから始める。

急に辺りが暗くなったので振り返ってみると、倉庫の中であればど燃え盛っていた炎が不自然なくらいに消えていた。

5話 慟哭（後書き）

前よりは早くなりましたが、まだ筆が遅い言乃葉です。

またこんな残酷な内容ですみません。でも、必要な描写だと考えていますので後悔はしていません。……でもなあ、もうちょっと書きようはありますよね。

今後も精進していこうと思います。では

2011年 10月20日 改訂

6話 後悔（前書き）

- ・ 今回も暗いお話です。 気が沈む、という人は注意しましょう。
- ・ 例により、用法用量を守り正しく読みましょう。

6話 後悔

昨日今日とハードな場面に出くわしまくり、精神は一杯いっぱい。時間としては短いのに、もう十年は経っている気分だ。

それほどに張り詰めていたオレの前に、急激な緩やかさがやって来ている。

「こんな感じでどうかな。初めてだから正直言って勝手が分からない。不満があるなら忌憚なく言って欲しい」

「いやいや、不満などない、素晴らしい手付きをしている。これが初めてとは恐れ入った、気持ちよすぎて眠ってしまわないか心配になってくる」

「なら、仮眠を取る？ 短い時間でも眠っておかないと、長丁場に耐えられない」

「言葉の綾だ、主。使い魔は眠らずとも生きていけるよう出来ている。だが、その心はありがたく頂いておこった」
「そう」

オレの前でルナさんと、黒いねこナマモノしい生物が主従の絆を深め合っている。

床に敷いたマットの上に膝を折って座っているルナさんが、膝の上に生物を乗せてブラシで毛を梳いている。傍で見ているオレでも分かるほどたどたどしい手付きをしている、黒いのは気持ちよさそうに目を細めてノドを鳴らしているやがる。

これだけを見れば、猫を愛でる女の子として和む光景だし、羨ましいものでもあった。張り詰め続けていた精神が緩む。

シャワーを浴び終えて湯上りのルナさん。彼女の肌は朱が差し、ほんのりと薰りを漂わせている。

日焼けとは縁遠そうな白い肌に赤みが散っているのを見ると、その、ひどく色っぽく見える。何時だったか、タカの奴が湯上り美人が好きだったと言っていたのを思い出した。その時は大して考えていなかったが、今なら激しく同意できそうだ。

元から年上の気配がするルナさんだったが、色艶とかは薄い方と思っていた。けれども、ここにきていきなり艶っぽいところを見せられると、身の置き場がなくなってしまう。

別の意味で緊張してきた。今夜はこのまま彼女と同じ部屋で寝るんだぞ、大丈夫か？ オレ。

「マサヨシ君、今夜はジンが見張りに付いてくれるから、気兼ねなく眠れるそうだ」

「……」

「むん？ マサヨシ君、どうかしたのか」

「あ？ ——っ、いえいえ大丈夫ですよ。ルナさんは毛布とか足りています？ 窓ガラスが割れているから寒くなるっすよ」

「ああ、毛布は十分足りている。寒くなるといっても冬の北海道ほどじゃないだろうっし、問題ない」

「そ、そっすか」

危なかった、おかしい方向に考えが飛んでいたときに話しかけられるとは。

もう少し飛んでいたら、話しかけられた時にアホなことを口走っていたかもしれない。それでルナさんに軽蔑の眼を向けられたら、精神的にも実際にも生きていけない。

今まで女子と付き合ったことがなく、学校のクラスメイト相手でも二言三言しか会話をした事がないオレに、クール系美少女な年上お姉さんと一晩同じ部屋に泊れとは、ハードルが高すぎる試練だと

思う。

「デカブツよ、主に不埒なマネをしようとしたら朝日は拝めんぞ」

「や、やるかよ、こんな非常時に」

「人は非常時にこそ種を保存しようとする本能が働くそうだ。それを踏まえて貴様の言葉をどこまで信じれば良いのやら」

「お前に信じてもらっても嬉しくねえよ」

ルナさんの膝の上から黒生モノが嫌らしくオレの胸の内を突いてきやがった。くそ、見た目がネコでしかないのに渋い声が似合うのも気に入らない。

こんな釘を刺されて馬鹿な真似が出来るほどオレはがつついてはいない。そうだ、これは男として美女を前にした生理現象みたいなものだ。YES美少女、NOタッチだ。今こそオレの理性が試される時である。

「ああ」

意味のないうめき声が口から洩れた。

色々と厳しい展開が続いたせいか、反動でおバカな方向にオツムのゲージが振れているのかもしれない。

寝よう。寝て起きればいつものマサヨシに戻る。いつそ元の世界に戻れば最高なんだが、そこまで高望みはするまい。銀月同盟で何時もの狩りに出る時みたいなテンションになればベストだ。ベッドの上で毛布を手繰り寄せて体にかける。部屋の灯りのスイッチはすぐ手元、手を伸ばせば届く。

「じゃ、消しますね」

「ああ。おやすみ、マサヨシ君」

「では、こちらは屋上で見張りに行ってくる。異常があれば念会話

で知らせよう」

「ありがとう、ジン。お願いする」

「頼まれた」

黒生モノが部屋から出ていき、ルナさんが床で毛布に包まり、オレが電灯を消せば、もうやる事もなく寝る体勢だ。

二重のカーテンが掛けられているから窓から外の明かりが差さず、部屋は真っ暗闇になる。あれほどうるさかった街は、耳鳴りがしなくなくらい静まり返っている。時折、暗闇の向こうでルナさんが身じろぐ音があるのは救いになっているけど、かえって緊張のかさを増やすことになる。

オレ、今夜は眠れるだろうか？

悶々とした気持ちを抱えて横になったオレ。

この状態から解放されるのにそれほど時間はかからなかった。でも、それは新しい試練の始まりでもあった。

ベッドに入って布団をかぶり、目を閉じてしばらくすると心地よい眠気がやってくる。疲れも手伝って、このまますぐにでも眠りに落ちてしまう——直前に頭の中に声が響いた。

『二人とも起きろ、異常事態だ！』

「うえっ！ いじょう？」

頭の中に直接聞こえるせいか、下手に大声で起こされるよりも目覚ましとしては効く。寝しなだったからオレの口から間抜けな声が出てきてしまった。

身体をベッドから起こして部屋を見渡すと、すでにルナさんが寝

床から立ち上がって、脱いでいたジャケットを羽織って銃を手にしているのが暗闇の中でも分かった。

「ルナさん、異常って？」

「悪いけど静かに。今ジンから報告を聞いている」

「う、うっす」

話しかけると彼女は、片手を上げて静かにするジェスチャーをしてきた。人差し指を立てて海外風の仕種だ。

黒生モノからの念会話はルナさんだけに向けたものらしく、最初の目覚まし以外はオレには聞こえてこない。暗闇に慣れた目にはルナさんが時折頷く姿が見える。

少し手持無沙汰な気分になって、部屋の明かりを点けようとスイッチに手を伸ばす。けどその前に止められた。

「待った。マサヨシ君、明かりは点けないで。今こっちに暴徒が来ているらしい。カーテンがあっても念は入れておきたい」

「っと、そいつらここに向かってっているんすか？」

「結果としてそうなっているみたいだ。人を追ってこの付近に来たらしい」

「人を追っている？ どういう事っすか？」

「実際に見てみるのが早い。ここの窓から見えるはずだ」

様子を窺う事を提案したルナさんが、二重にしたカーテンをのけて、ガラスの割れた窓を開ける。そこはベランダになっており、柵は集合住宅風にコンクリート壁なので隠れる分には良さそうだ。

身体を屈めて壁に隠れるようにベランダに出たルナさんに続いて、オレも後に続く。マツチヨな体だと隠れる行動をすると窮屈に感じる。元々のオレの体は小柄だったからこの違いは激しい。戸惑っているオレを見かねたのか、ルナさんが場所を空けてくれた。

ベランダのコンクリート壁には装飾と明かり取りを兼ねて大きな丸い穴が設けられている。そこから外の様子を窺う訳だが、ルナさんが言う暴徒はどこから来るのかまだ分からない。

銃声や怒鳴り声とかは聞こえない。下に見える通りに現れるらしいのは分かるけど、今のところは人影は見当たらない。

ルナさんがそっと、指を通りの方向に伸ばして小声で囁いてきた。

「ジンの報告だと、あっちから追われている人に続いて暴徒が来る。それと、これから会話は念会話に切り替えよう」

「分かった。けど、さっきから言っている追われている人って何すか？」

「私も報告しか聞いていないから断定はできないけど、五、六人の暴徒に追われている女性が二人、こちらの方向に向かって来ている。その内一人は負傷しているのか、もう一人に背負われている」

「た、大変じゃないすか！」

「そうだな、その人達にとっては大変な事だ」

話を聞いてみると、オレが暴走族もどきから助けられた時と同じようなシチュエーションだ。

そんな光景がこの近くで起きているのか。オレはルナさんが指さした方向に顔を向ける。ヒビが入り、穴の開いた道路しか見えない通りだけど、すぐ近くにオレみたいになっている奴がいると思うと気が逸る。

対して、結構大変な状態なのにルナさんは静かに外の様子を窺っている。手に持っていた拳銃はホルスターに収められて、眼差しは観察するような雰囲気だ。物言いもどこか他人事みたく聞こえる。

「ルナさん、その二人はどうやって助けますか？」

「うん？ 別に助けるつもりはない」

「はい？」

思わず英語で『パードウン?』なんて言いそうになった。我が耳を疑うとはこんなシチュなのか。いや、念会話だからこの場合は頭か。

オレの質問にルナさんは、ごくあつさと当り前のように助けな
いと言った。暴徒から追われている人を見捨てるというのか。

『どういう事です? 人を助けないなんて』

『私は暴徒の動きを観察するために出てきている。連中の動きを知り、情報が一つでも欲しいから。マサヨシ君の言うような救助のためじゃない』

『何で助けられないんすか、オレの時は人を撃つてでも助けに来てましたよね?』

冷たい事を言っているルナさんの表情は今まで見てきた顔と変わらない。静かな夜の海だ。でも、表情は変わらないのに置かれている場が変わるだけで別人のみたいに感じる。

それでもオレは、オレを助けてくれたルナさんも知っている。

縋るような思いでオレを助けてくれた時を引き合いに出してみたが、彼女からの言葉はバツサリしたものだ。

『あの時とは状況が異なる。あの時は郊外の荒野、今は廃墟になっ
てはいても街中。一人一人を殺害して遺体を始末するにもかかる労力が違う。ここでは警察に追われる可能性は少ないが、代わりに殺害した相手のチームに追われる。』

それに追われる者も追手も数が違う。私は不意を打てば二、三人はいける。でも、相手は見える限りで六人ほど。四人目辺りからは正面切つての戦闘になってしまう。ここで馬鹿をやっている以上はそれなりに腕に覚えがあるだろうし、何より殺人に忌避感がない相手は怖い。おまけに『エバーエーアデ』のスキルや装備も反映され

ている。まともな戦闘をすると経験の違いで向こうが上だ。

よって、私は救助は無理と判断して観察にまわる事にした。君の質問に対する答えはこんなところだ』

「……そっすか」

念会話を忘れて力なく呟いていた。

ルナさんの言葉はまるつきり、学校で生徒の質問に答える教師みたいだった。平滑に問われた事を返している。

オレは単純にルナさんの事を対人スキルが低い人なんだな、と思っていた。でも、こんな場合でも変化がないのにはショックを感じてしまう。これは、単純なヒッキーという人じゃない。

なんだか、無性に腹が立ってきた。平気な顔をして人を見捨てるとか、そんな事を言った人が可愛い女の子だという事とか、とにかく色々なことに腹が立つてくる。

——っ

——っ！

「来たか」

ルナさんの指さした方向から人の声が聞こえてきた。内容は聞き取れないけど切羽詰まっているのは分かった。それを聞いているルナさんの反応は変わらず、静かにポツリとしたものだ。

この声が引き金で腹立ちがマックスだ。

「ぐうっ！」

「マサヨシ君？」

身体を起こして勢いよく立ち上がり、部屋の中に戻った。これでルナさんが男なら一発ぶん殴っているところだけど、女の子の上、

命の恩人だからその辺は耐えた。

室内に入り、ロッカーを開けて中に戻した甲冑へ手を伸ばす。教わった通りに着たいという意思を伝えると、鎧はバラけ、一瞬で体を包み込む。今度は驚かないし、驚く余裕もない。全身を包む冷たさと重みが今はひたすらに頼もしい。

すぐに甲冑の横に置かれた盾と戦斧を手に持ち、バックの中身を軽く点検して腰に着け、のっしのっしと玄関に向かう。

『マサヨシ君、待て。今動けばこちらの存在が暴露する。危険が及ぶのは君なんだぞ』

後ろからルナさんの念会話がかけられるが、構う事はしない。このままドアノブに手をかける。

『……マサヨシ君、止まれ。止まらなければ君を撃つ』
「なん!？」

かけられた言葉の意味を理解して、振り返って見ると、ベランダにいるルナさんが屈んだ姿勢のままこちらに拳銃を向けている。マジかよ。

一瞬沸騰した頭が急速に冷却される感触を味わった。本物の銃で狙われている、その銃を持っているのが命の恩人のルナさん。こんなガンアクション映画の一場面みたいな時でもこの人の表情に激しさはない。

今のルナさんは外から差し込む弱い月明かりもあって、ルナさんの姿は黒い影だ。影に灯る二つの金色の眼には嘘はない。感性に乏しいオレでも非現実的な絵画を見ている気分させ、その光景が冷却した頭を再加熱させた。

「保身ですか? 我が身可愛さで人を見捨てる。そのためなら直接

人を手にも掛ける。酷いつすね」

『程度の差こそあれ、人は自分自身を優先するのが正常なものだけだ。それに、語弊を恐れずに言えばこれは君のためでもある』

「オレのためにオレを撃ち殺すって矛盾してないか？」

『殺すつもりはない。手足を撃って動きを止める。この距離なら君の装甲の隙間を狙うのも難しくない芸当だ。ここでは回復呪紋もある。それに君のため、と言うのはここで君が出ていったところで何が出来るといふ話だ』

またルナさんの言葉に頭を冷やされる。

敵は複数人、この街を混乱させた馬鹿野郎な連中だけど、ルナさんが言っているように場慣れはしているはずだ。

人を殺すことに慣れているだろう連中に比べてオレは、間違いないここ数日のキングオブチキン。街中を逃げ回り、ルナさんに助けてもらった立場で人を助けるヒーローになれるのか？

ノコノコと出ていった挙句、袋叩きで済めば御の字、髑髏殺しぐらいはデフォルトかもしれない。

『確かに目の前で助ける事が出来るかも知れない人を見捨てるのは良心が咎めるだろう。しかし、ここはゲームに似た世界だけどゲームじゃない。もう一つの現実だ。アメコミのヒーローが活躍する世界みたく優しくはない』

心なしか、ルナさんの念会話に平坦さにムラを感じた。声の響きに自虐的なものが混ざっている。

なんだ、この人も顔に出ないだけで激しい何かがあるんだ。そう直感が頭に囁くと熱は再び戻る。今度は揺れない。

ノブを回し、扉を開ける。外から聞こえる声はまだ不鮮明だけど、近くなっている。早く行かなくちゃマズイ。

『マサヨシ君、待て』

「撃ちたきゃ、撃てよ。けどオレは行くぞ。確かに何もできないかも知れない。でも、何かが出来るかも知れない。オレは何も出来ない」と最初から諦めて後悔したくない」

後ろから撃たれることも覚悟して扉を潜って廊下に出た。

けれど手足のどこにも痛みはなく、ルナさんは最後まで撃たなかったようだった。この数分で彼女について思うところが山ほど出来てしまった。それについて話がしなくなったが、今は人助けだ。

廊下にも聞こえるようになった怒声に急かされて、オレは甲冑を鳴らして廊下を走った。

オレはもう後悔しなくなかった。

結局、撃つとまで脅しておいて自分は撃てなかった。

彼は自分が撃たないと確信があって行ってしまったのか？ いいや、それはないな。自分達の付き合いは極めて浅い。確証を得るだけの交流は二人の間にはまだない。つまり、撃たれても構わない。あのマサヨシ君はそういう考えだったのだ。

非合理的、かつ直情径行。直感に任せ、感性に生きるのが彼の一面だ。理屈をこねる自分とは反対と言える。自分も感性を信じる部分はあるにはあるけど、あそこまではにはなれない。

「ふうう……」

右手に持ったモーゼルのハンマーを戻してホルスターに入れた瞬間、自分でも驚くぐらいに重い溜息が出てきた。

人に銃口を向けたストレスなのか、二度目なのにえらくツライ。銃器の取扱いを習う際、絶対人に銃を向けるなと口を酸っぱくして

言われてきた反動もあるかもしれない。

『行つたな、あの単細胞は。主の配慮を無にするとは、考えなしの阿呆だ』

『だろうね。私も配慮が足りなかった。ここはマサヨシ君と一緒に部屋に籠っているのが正しかったかもしれない。あと、彼の性格を考えて置くべきだった。ああいった感性に生きる人には、感情面に訴えるものが必要なのに、私は理屈を優先した』

ジンの念会話に言葉を返しつつ、自省してみる。ああいう風に人と口論じみた事をしたのはいつ以来だろう。もう思い出せないくらい昔か、違う、そもそもやった事がなかった。

なるほど、溜息が重くもなるわけだ。今までやった事のない人と人の衝突を経験すれば精神的に疲れもする。

人が二人いればケンカは起こり、三人いれば派閥もできる。そんな人間関係のうっとうしさから逃れたいがために、ライフル持って自然の中に分け入り、バイクを駆って一人旅に出て、一人家に閉じこもるという生活をしてきた。だからか、マサヨシ君の生々しい感情には正直に言って押されてしまった。それも疲れの一因だろう。

「眩しいな」

ジンの言うように、彼の行動は考えなしの無謀なものだ。人を一人殺すのも助けるのにも相応に労力がかかる。どちらも望むべくは最小の労力で最大の成果。無理をして自身の命を危機に陥れるならいつそ見捨てるのも一つの手。マサヨシ君はこんな自分の考えとは真つ向から反することをやろうとしている。

過去を振り返っても、自分にはないものを持っているマサヨシ君。選択肢を切り捨てていく自分と、必死に拾う彼。

年齢からくる考えの違い、とは思いたくない。自分はまだ若い

もりだ。

「時間がないな。物思いに耽るのはこのくらいにしておこう」

今やる事は、結局助けるのか助けけないのかという二択に過ぎない。次に論ずるはその手段手法になる。

指出しのグローブを手にはめる。腰のバックからスプリングフィールドを取り出して、各部を軽く点検して不備がないことを確認し、次にもう一度バックに手をつ込んで細長い筒をライフルの銃口に取り付けていく。

作業を進めていくにつれて、心は研がれていく。

サウンド・サブレッサー。減音器とも訳されるコレは、俗に言うサイレンサーの事だ。しかし、各メディアにあるようにコレを銃口につけても銃声が完璧に消える訳ではない。特に強力な火力のライフル弾では消音効果など望むべくもない。

ではなぜ着けるか？これに期待する効果としては減音と消炎の二つになる。銃声は思いの外響くもので、射手や近くにいる人の耳に影響を与えてしまう。耳からの情報が必要な時に鼓膜が麻痺しては危険だ。さらに暗闇の中では銃口から出る発砲炎は遠くからでも発見される。それは居場所の暴露に繋がる。それらを防ぐのがサブレッサーだ。

ゲーム内ではゲームらしくかなり高度な消音効果を発揮したコレだが、ここではどこまで通用するか不明。それでも最悪消炎効果は期待できる。割と簡単なアタッチメントで減音器はライフルに付いた。

『助けるのだな、主』

『ジンには悪いとは思っている。自分から危険に近づく阿呆なマネを二度もしている。ただ、彼の言い分にも一理あったと思った。何

もしないで後悔はしたくない。そう私も感じた』

『ふむ、阿呆は阿呆なりに魂を持っているか。承知した。他ならない主の決めたこと、その心にこの身は従おう』

『我まま言つて済まない、ありがとう。一応手筈は考えている。ジンはマサヨシ君の後を追つて退路を確保して。細かいことは追つて伝える』

『承知』

ジンとの念会話が切れたと同時に上から黒い物影が下へと降った。黒ヒヨウ状態のジンだ。彼は階段を使う時間を惜しんで、直接屋上から飛び降りる乱暴な方法に訴えたのだ。

建物六階分の高さから落ちたのにジンは何事もなく華麗な一回転を加えた着地を決めて、振り返る。目が合った。

『では、行ってくる。連中の位置は現在、教えた方向に直線距離で約一キロの地点だ。追われている方の足の速さもあるから、ここに来るのに数分とない』

『了解した。移動中に詳細を説明する』

すでにマサヨシ君は建物を出て教えた方向へ走っている。重量級の全身甲冑を着こんでいるはずなのに陸上ランナーみたいに速い。

ジンも彼を追って駆けだした。道の向こう、建物が影になって見通せないが声で近付いているのが分かる。主に男性の怒声で、内容も聞き取れてしまうが罵詈雑言の類なので聞くに値しない。

部屋の中から枕を拝借して、ベランダの塀に乗せてライフルを預ける。土嚢が理想的なのだが、ない物は仕方がない。夜間の自分にスコープは不要、このまま遮音結界をベランダに範囲指定し展開する。

「結界呪紋・遮音——展開」

こうしたいという思考が脳に術式を呼び込む。あとは力を込めれば式は成る。

魔法は文字通り魔的に便利な技法だ。現代のガンズミスでも四苦八苦する銃のサイレンサー化をこつとも簡単に実現させる。

結界が展開されると、防音の良いカラオケルームに入った感触が肌を伝う。音の遮蔽効果は自分の拠点で実感しており、それなりに期待できる。

ベルトのポーチから出した弾倉をスプリングフィールドにはめ込んで、ボルトを引いて初弾を装填。アイアンサイトの向こうには道を駆けるマサヨシ君とジンの影が見える。

こつした射撃準備をしながら、思考はジンへ作戦の説明をしている。

『——と、いう方法が手筈』

『随分と賭けの要素が多いな。なるほど、だから主はやらなかったと』

『そう。急場で考えた作戦とも言えないものだ。何か意見は？』

『主の所在が発見された場合の撤退場所は？』

『自分の拠点』

『分かった。撤退した場合には連絡を』

『了解』

実際これはジンから状況の報告を受けた時にざつと考えた程度のもので、作戦とは呼べない。

それにこれは成功しても失敗しても自分達は危険にさらされる。安全第一でいくべき中では採るべきではない方法であり、だからこそ後味の悪さがあっても見捨てる選択をした。このまま見捨てても見知らぬ他人の事で終わり、時間が忘れさせる。人と関係で一喜一憂するのに億劫さを感じている自分らしい解決方法だった。

でも、自分の思惑はすでにマサヨシ君によって打ち砕かれた。彼の持っている真っ直ぐさは赤の他人であっても見捨てる事を良しとしなかったのだ。

数時間前に自分自身を『チキン』と言って自嘲していた人物とは同一に思えない行動力だ。マサヨシ君の中で何かが劇的に変わったのか、それとも単なる激情に駆られただけか。対人経験が絶対的に不足している自分には区別が付きそうにない。

「マサヨシ君、ここで死んでしまつては私が困る。そういうのは私が見ていないところで頼む」

視線の先にいる甲冑姿のマサヨシ君に、語りかけるように口が開いた。せつかく助かった命なのだ軽々しく捨てて欲しくない気持ちがある。捨てるにしても、せめて自分は見ていない場所にして欲しい。

だから、ここは何があつてもマサヨシ君を守る。人助けはついでだ。

ライフルをベランダの壁に預けて、立射姿勢をとった。両腕で包み持った銃床がひんやりと頬に冷気を感じさせる。吐く息が今更のように外の冷たさを知らせる。

元の自分の射撃能力は把握している。どんな環境下でもライフルで三百メートルまでなら必中させてきた自負がある。けれどそれはあくまで狩りでの話。戦場ではどこまで通用するかは不明。おまけに自分の肉体は『ルナ・ルクス』の身体。当然の事だが、ゲームのようにボタン一つでエイミング、敵を捕捉してくれるようなものはない。

どこまでの事が出来るか把握しきれない中で二回目の実戦投入。最初の時にはなかった不安がじんわりとこみ上げてきた。

「そう、二度目だ。初陣は済ませたんだからしつかりしろ、ルナ・ルクス」

不安がこみ上げる体を叱咤して、自分はライフルを構えた。

脚甲に覆われた足を動かし、地面を蹴りつけて身体を疾走させる。オレの体は鎧を着ているとは思えない速度で爆走していた。

聞きかじった知識だと、中世の全身甲冑の重さは三〇から四〇kgはあったらしい。全身にその重さがかかるから思ったよりは動きやすいそうだが、こんな大爆走は無理無茶なことだ。なのに今のオレはそれが出来ている。

テンポよく吐く息が面体の中で反響して、左手に持つ盾が腰当てにこすれ、装甲が小さく軋み、一人で賑やかな音を作っている。だんだん自分が場違いなコスプレをした痛いヤツに思えてきた。ルナさんの言うように部屋で大人しくしているのだった、などと弱気な考えもこみ上げてくる。

走りながら頭を振る。飛び出しておいて今更何を言う。襲われている人を助けなくて戻ったら、それこそ情けなさの極みだ。タカやココットさんの時みたく、後悔はしたくない。

飛び出してすぐに弱気になるオレ自身を叱りつけて、足に更なる力を込めて走る速度を上げる。

耳には自分が出す甲冑の音以外に、向かう先の声が聞き取れるようになっていた。

「おらっ、逃げんじゃねえよ！」

「なあ、撃ちたいんだけど」

「ばーか、銃はやめとけ。響くぞ」

「いいじゃん、どうせここいらの住人はほとんどS・A・Sの連中が片付けたらしいし、銃声なんて気にしないって」

「銃より魔法だよ、魔法。呪系でアへらせてえぜ」

「それも悪くないな」

ここまで鮮明に聞き取れる頃になると、その姿が目につえる事が出来た。数人に追いかけられている二人の女性。ルナさんが言っていたように一人が相方の背におぶさっていて、必死に逃げているのが見えた。

二人の女性、彼女たちはどっちも見た目の歳はオレと同年代くらいで、獣人系の女子だ。獣人だからか、人を背負っていても足は速い。

背負っている方がココットさんと同じフェルパー、腰に細身の剣を差している装備からして軽戦士な人だろう。もう一人の背負われている人は妖狐族の人みたいだ。巫女風なところからして結構コテコテな術者かもしれない。ただ、彼女の様子は良くない。顔を下ろしたままで表情は窺えないし、白い上着に赤い模様が見える。あれは血だろうか。

弱気になりかけた気持ちに活が入る。左手に握った盾を握りしめ、足を一層速める。

二人を追いかける数人の男性。五、六人、と聞いているけどこの位置では正確に分からない。その内の一人が特に足が速いらしく、二人との距離をどんどん縮めていく。

二十歳ぐらいの男。黒革のジャケットに革パンツと軽装で、右手に大きなナイフを持っている。刃の色が赤いところを見ると何かの効果があるナイフなのは間違いない。麻痺効果か、毒か？ 何にしたって趣味が悪すぎる奴だ。ビジュアル系に見えるそいつの顔は嫌らしく歪んでいる。でもって、こっちは気付いた様子はない。

女子二人を追いかけるのに夢中で、オレの事に気付いていない野

郎。そいつに向かって盾を突き出して突進した。

「ぐおおー!？」

強烈な衝撃が腕に伝わり、続いて間の抜けた男の悲鳴が聞こえて地面に男が転がる。しかも一〇メートルほど跳ね飛ばされて、自動車に轢かれたみたいだ。

……そういえば、オレの持っているスキルに盾を使った突進スキルがあった。それが発動してこうなったのか？ 凄いな。コイツにとって、横合いからトラックにはねられたみたいなものだ。

女子二人に目を向ける。横から現れたオレに、フェルパーの娘は警戒の目を向けている。狐娘の方は無反応。それとやっぱり彼女の着物の赤い模様は血である。かなりの重傷なのか反応がない。

まずは警戒を解いてもらおうと、面体を上げて素顔をさらして話しかけることにした。

「確認するけど、追われているってことでいいよな？」

「それ以外に何に見えるのよ」

「い、いや、ならいいんだ。何かの勘違いの可能性も考えていたから」

「あんだね、この様子見て勘違いはありえないんだけど」

「そ、そっすね」

フェルパー娘の気の強さに思わず下手に出してしまった。クラスにもいたな、こういう女子。オレ、苦手なんだよな、こういうタイプ。彼女の気の強さに押されていると、追っている立場の男達が追いついて来た。オレは女子達を庇う形になるよう男達の前に立って、盾の裏にマウントされている戦斧の柄を握る。

「てめえ！ よくもリックを」

男の一人が問答無用で肩に担いだ銃を手にしてこっちに向けてきた。映画とかでよく見る形状のショットガンだ。ポンプを前後に動かして発砲、夜目には眩しい閃光が目の前で散った。オレは咄嗟の行動で盾を構えて顔を中心に庇う姿勢をとった。それしかできない。またも腕に、さらには肩に衝撃が伝わり、金属がこすれる音が耳元で鳴る。さつきよりはショックは軽いし、動けるところを見ると特に怪我はしていない。

なら、突撃だ。

「き、効いてない?!」

「だりゃああ」

驚いている隙をついてもう一度突進。男との間にあった距離が瞬きの間に縮み、突き出した盾が相手の体にめり込み、はね飛ぶ。巨体を活かした突進^{チャージ}に、男は悲鳴も上げられずショットガンと一緒に地面を転がった。

この様子を見た他の男達の表情は怒りが浮かんでいる。奴等、次から本気で来そうだ。面体を下ろして、盾から戦斧を抜き取る。

女子達の様子を見ようと後ろを振り返る。すると、あの黒生物が巨体バージョンでやって来ていた。

「デカブツ、主が命じたので助けてやる。ありがたく思え。こちらは退路を確保する。そちらは適当に戦闘をこなすといい。主がサポートする手筈になっている。これもありがたく思うように」
「こんな時でも偉そうな奴だなお前って」

やって来たのがコイツなのは気になるけど、コイツは言ってみればルナさんの下僕みたいなものだ。コイツが助けるということは、ルナさんはあんな別れ方をしたオレを助けてくれるのか。

なんか、こそばゆい嬉しさがあるよ。非常時なのにちょっと照れくさくなった。

「フン。さて、お嬢さん。初対面でいきなり信じるというのは無理な相談だが、貴女達を助きたいという意思があるのは分かって欲しい。どうだろうか、こちらの誘導に乗ってくれまいか？」

「そうね。このまま逃げていても手詰まりだったし、あなた達に賭けてみるわ」

黒いのに話を振られたフェルパー娘はチラリと背負った子の様子を見やってから、ため息を吐きながら答えた。

口調が投げやり気味に聞こえるのは、きつと気のせいではない。この人はこの人なりに色々あったのだろう。ともかく、信じる信じないでグダグダと口論が起きなかったのは良いことだ。

お陰で、目の前の野郎達にすぐに対応できるのだから。

「死ねえっ」

一人がそんな芸のないことを叫び、もう二人が無言で攻撃を仕掛けてきた。距離は十つとところか。

黒いのが登場で僅かでも動揺があったらしく、会話する時間が稼げていたのだ。時間切れになった途端に戦闘は再開される。

「黒生、その二人は任せたっ」

「妙な呼び名を付けるなっ。まあいい、元よりそのつもりだ」

後ろから頼もしい返答があった。これでオレは戦いに集中できる。二人を轢き飛ばして、次に三人。目に見える限りだとこれで全員だ。一人はオーソドックスな西洋剣を持った奴、もう一人は戦闘用のハンマーだろうか。最後の一人は、マシンガン？ ゴッドファー

ザーとかに出てくるギャングがもってそんな銃を手にしている。

アレはマズイ。逃がすべき女子達に弾が当たってしまう。最初に狙うのはあいつだ。

相手の布陣はマシンガンの一人が後衛で、近接武器の二人が前衛と捻りはない。マシンガンを片付けようとするなら、二人を最初に突破しないとだめだ。

ふと、いきなりマシンガンを持った男の頭から血が噴き出し、前のめりに倒れた。

何だそりゃ、と考える暇はない。前衛の二人は後ろでお仲間がどくなったか知らずに、オレに斬りかかってきた。

「死ね死ねっ」

「死ぬかよ」

左から振ってきた剣を盾で防ぎ、右から横殴りにきたハンマーを戦斧で迎撃する。

ズツクンと腕に衝撃が走り、盾と斧に火花が散った。今までで一番衝撃が強い。くそっ、こいつら結構レベルが高い連中かもしれない。

今度は突いてきた剣、これを盾で滑らせるように受け流して相手をプッシュ。よろけたら追撃、と思っていたら反対からハンマーが襲ってきた。これは柄を狙う一撃で退ける。オレ自身こんなに動けるのが信じられない。

本物の刃物を打ち合って戦っているのに、怖いと思うよりも高揚感が体を突き動かす。こういう心の動きもゲーム補正ってやつだろうか？

でも二対一はやっぱキツイ。防ぐのが精一杯だ。

剣の奴は賑やかに「死ねよ死ねよ、滅殺だ」などと喋りながら攻

撃ってきて、ハンマーの奴は終始無言でかけ声さえない。

剣が回り込むように斬撃を放てば、それに合わせて盾を動かし、ハンマーが渾身の一撃を繰り出してくるなら、戦斧でそれをいなす。武器が打ち合うたびに金属音がして、火花が暗闇に散る。だんだんオレの腕がしびれてきた。あと何回打ち合えるか、と焦りがこみ上げる。

何回となく攻撃を防ぐオレにしびれを切らしたのか、剣の奴が後ろに声を飛ばした。

「吉田！ なに遊んでんだ。こいつ撃ち殺せ！ それが無理でも援護しろ！ さつきから撃ってねーぞ」

剣の奴がそう言っで、後ろを一瞬見るつもりで首を動かしたが、後ろの奴が倒れているのでこれが固まった。ハンマーの奴も後ろが気になったらしく、同じ様子だ。

チャンスだ。降って湧いた好機にどう動くか、頭が思考を始めようとした時に黒生から念会話が飛んできた。

『無様をさらしたくなければ、盾で目を守れ』

シンキングタイム一秒未満。黒生の今までの言動を考えるに、間を置いてくれるはずもない。すぐさま盾を顔の前に構えた。

直後、夜は昼になった。

「うがああ、な、なんぞこれ」
「く、目が」

盾越しでも目が眩んでしまう光量。オレと野郎達との間に生まれた光は、両者仲良く動きを止める代物だった。

あまりの眩しさに盾を構えたまま目をつぶってしまったオレの腕

に何かが絡みつく。まずい、こんな中でも攻撃が。

『あせるな。お前をこのまま誘導する。光は後五秒だ。走れ』
『わ、分かった』

絡みついたのは黒生の触腕のようだ。奴に助けられるのは妙にシヤクに障るけど、言い合いをしている場合ではない。

触腕に引つ張られて二人に背を向け、元来た道を走っていく。盾で目を守ったお陰でそれほど時間が経たずに視界が戻り、それを察した黒生は触腕を離れた。その頃になると、後ろからの光はもう止んでいた。それでも、拠点目指して走る足は止めない。手に持った戦斧を盾に戻して走る速度を上げた。

ちらつと後ろの様子を見える。ひょっとしたら、あの二人が怒髪天を衝くって感じで追いかけてくるかと思ったのだ。けれど実際には違っていて、あの二人も最初に倒れたマシンガン野郎と同じく地面に倒れていた。

『なあ、あの二人——』
『今は何も考えず走れ。そういうのは後回しだ』

黒生に聞こうとしたら遮られた。確かに念会話とはいえ余計な事をしている暇はないな。

拠点までの残り一〇〇メートルを無心で走っていき、行きよりも遅く感じるタイムで拠点のエントランスに無事着いた。

元はライオン。マンションみたいな高級マンション風のエントランスに、今は三つの人影がある。一つはルナさん。もう二つは助けたばかりの獣人の二人だ。背負われていた妖狐族の女子は、手近にあったソファに蹲るように座っている。

アレだけの事を言ってしまった後のこと、またルナさんと顔を合

わせるのが気まずくバツが悪い。でもオレの気まずさとは対象的に、彼女はその辺りに頓着する気はないようで、さっきと変わらない様子で声をかけてきた。

「お帰りマサヨシ君。色々言いたいこと、聞きたい事があると思うけど、落ち着いてからにしよう。じゃあ雪さん、私が水鈴さんを背負うことで良いかな？」

「ええ、お願いします」

雪、と呼ばれたフェルパーの女子がルナさんの提案に頷き、妖狐族の女子をルナさんが背負うことになっていた。

オレがいまいわずかな間に随分と二人の関係が進展しているように思えて、初対面って感じはしない。ルナさんから話は後にしようと言われてはいても、これだけは聞いて置きたかった。

「ルナさん、これだけは今聞いて置きたいんですけど、二人は顔見知りですか？」

「そう。正確にはこの雪さんが所属するチームのリーダーと顔見知りになる。お互い最初に名前を名乗り合った時に気付いた」

ルナさんの簡単な説明に、隣にいる雪さんも頷いている。口には出さないけど友人が少なそうなルナさんに、チームリーダーの知り合いがいる事がちよつと意外に感じられる。

その雪さんがオレを探るような目で見てるのが感じられる。あ、思い返せばオレ自己紹介してないや。ルナさんも言っていないっぽいし、名乗るべきだな。

「えーと、オレ、武田正義。こっちじゃマサヨシで通している。よろしくな」

「新堂由紀よ。こちらでは雪。それで、こっちが水鈴さんなんだけ

ど、本名は知らないの。正式な紹介は本人が目覚めてからにして」
「紹介は済んだね。じゃあ、マサヨシ君の部屋に移動しよう。マサヨシ君、先頭をお願いする。ジン、また周囲の警戒を頼むけどいいかい？」

「承知した」

正に挨拶もそこそこ。すぐにルナさんの仕切りで行動する。確かにこんなエントランスで延々と立ち話するのは、外からも姿が見えて都合が良くないな。

オレはルナさんの言葉に従って、先頭を切って階段を上る。手に持ったライフルを使って人を背負ったルナさんがオレの後ろに付いて、雪さんが続く。黒生の奴はいつの間にか姿を消していた。

今夜は長い夜になってしまった。階段から見える夜明け前の空を目にして、がっくりと脱力していくオレはそう思った。

太陽はまだ昇っていない黎明の時間帯。ベランダから見える街並みは、夜明け前の仄かな明るさに照らされていた。

ここからさつきマサヨシ君が暴徒連中と交戦した街路が見えて、その路上には彼らの人影が横たわっていた。全員間違はなく死んでおり、その命を摘み取ったのはこの自分である。その証拠に、足元を見れば7・62×51ライフル弾の空薬莖が始末した人数分転がっていた。

自分が用意した手筈とは、極めてシンプルな戦法だ。

先行して前線で戦うマサヨシ君に暴徒達の注目を集めさせておき、自分が予想外の方から銃弾を撃ち込む。この際、銃声や発砲炎で居場所が暴露しなければ効果的だ。そのためにサプレッサーと遮音

結界を用意した。

次に、救助対象の安全を確保したら、後詰めのジンにマサヨシ君を撤退させて、残った暴徒を掃討。ジンが使った閃光呪紋で目をやられた人と、マサヨシ君が弾き飛ばした人を射殺して状況は終了した。

言ってみればマサヨシ君を囷にした訳であり、ここまで上手く成功するとは考えていなかった。良心が咎めるのと、成功率の低さから手を出すつもりはなかったのだ、こんな事がなければ。

それでも、失敗よりは成功する方が良かった。こうして後味の悪さを感じることがないのだから。

この戦法で重要だった事は、自分達を目撃した暴徒を出さないことだった。

しばらく暴徒達の亡骸を見てみると、それに近づく二人の人影が現れた。すぐに身を伏せてベランダの壁に隠れ、屋上に伏せている使い魔のジンから念会話で報告を送ってもらう。直線にして約四〇メートルの距離はあるが、発見される可能性はゼロではない。

その人影達は遺体を確認して、一人が何処か行つて、もう一人が周りを見張っている様子だという。

一人が伝令に走つて、もう一人が現場を保存だろうか。念話は使う様子がないらしい。ともあれ、予想通りに増援はあった。

目撃情報がなければ暴徒達のチームに追われる可能性は低くなる。それでも、この周辺に暴徒達の探索がかかる。速やかに移動するか、隠れるかしないとダメだ。

目をマサヨシ君の部屋の中に転じる。ベッドでは本来の持ち主ではなく、水鈴という狐耳の少女が眠っている。

彼女は服に付いていた血の量に反して無傷だったが、今も気を失っており、彼女を抱えて素早く移動するのは無理だ。他の面子を見ても、マサヨシ君や雪さんの顔に疲労の色が濃く出ており、簡単に

移動できる様子ではない。

そうとなれば、とれる選択は隠行の一択しかなかった。こんな事もあるから救助には乗り気でなかったのだけど、もう過ぎた事だ。

「外の様子はどうですか？」

「うん。斥候らしい二人組が来ている。街中のことだから間を置かずには本隊が来ると思う。明かりは点けないで」

「うっす」

部屋に入るなり、マサヨシ君が外の様子を訪ねてきた。部屋に戻るまでは色々と言いたそうな顔をしていたが、落ち着ける空間に戻ったせいで気が緩んだのか、疲れが前面に出ている。

人の機微に疎い自分でも彼が疲れているのが分かるほどだ。体力でも精神でも余裕はないのだろ。彼と話し込むには時間を置いた方がいいな。

雪さんにも同じ事が言える。詳細はまだ聞いていないが、彼女は彼女で神経をすり減らす目に遭っている。暴徒に追われていたのが効いたのか、床にぐったりと座っていて耳と尻尾も力なく垂れ下がっている有様だ。

だらしない、などとは思わない。限界が近いのは彼らだけではなく、自分も似たようなものだからだ。

太陽が昇る時間が近づいてくるにつれて、体にみなぎっていた力が抜けていくのが実感できる。急激に頭が重くなり、眠気で目蓋が重くなってくる。肩に軽々と担いでいたライフルも重くなっており、落としそうになったため、壁に立て掛けることにした。

総じて、夜明けが近付くにつれて力が弱くなってきた。月詠人という設定にしているこの肉体は、日中は能力が低下する特性がある。すでに能力が落ちる感触を実感してきたが、この力の抜け方は以前よりも酷い。気を引き締めなければ意識が落ちてしまいそう

だ。

「あれ、ルナさん。大丈夫ですか？」

「ああ、今までの疲れが出たかもしれない。急に眠くなってきた」

「うえっ、マジっすか。じゃ、じゃあ休んで下さい。オレは見張りに着きます」

「……ありがとう。言葉に甘えさせて貰う」

疲れているクセに妙に張り切るマサヨシ君だ。けれど、彼の申し出はありがたい。三時間ぐらい仮眠をとって、体調を整えておこう。床に用意したマットは雪さんに明け渡しているため、自分は毛布にくるまって壁に背を預けて寝ることにした。こんな眠り方をしたのは久しぶりだ。

ジンにも念会話で仮眠をとる旨を伝え、その間の報告はマサヨシ君にするようにさせた。何故かこの二人は仲が悪いが、非常時にまで私情を持ち込まないだろう。そう願う。

眠るまでに出来ることはやっておき、心配の芽を摘んでおく。後は重くなる目蓋を逆らわずに閉じれば、急速に意識は眠りの闇に落ちていった。

思えばここ数日、誰かと寝食を共にしている状況に自分は置かれている。これはかなり久しぶりの経験で、昔と違ってそれが不思議と心地よいと思った。

6話 後悔（後書き）

今回も無事に投稿できて安堵している言乃葉です。

うん、明るい展開を待っている方がいたらゴメンなさいだね。また暗い話ですいません。

明るいハイテンションなギャグが書ける人は本気で尊敬できそうです。私はラブコメとか書けそうにないなあ。チンパンジーがハムレットを書くほどにありえないや。

こんな暗めな物語ですが、長い目で見ていただけると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4537u/>

終末世界の創世記

2011年10月23日17時36分発行